

7-2-7 植 物

1. 工事の実施・土地又は工作物の存在及び供用

(1) 切土又は盛土、工作物の撤去又は廃棄、仮設工事、基礎工事、施設の設置工事並びに施設の存在等に伴う植物

① 調 査

ア. 調査すべき情報

(ア) 植物の現況

- ・種子植物及びシダ植物その他主な植物に関する植物相及び植生の状況
- ・重要な種及び重要な群落の分布、生育の状況及び生育環境の状況
- ・植生自然度

(イ) 指定・規制の状況

イ. 調査地域

調査地域は、事業の実施が植物への影響を及ぼすおそれのある範囲として、直接改変や工事等による間接的な影響を勘案し、図 7-2-7.1に示す対象事業実施区域から概ね200mの範囲とした。

文献等の収集は「第3章 対象事業実施区域及びその周囲の概況」で把握した範囲と同様とした。

ウ. 調査地点

対象事業実施区域は臨海部の埋立地に位置しており、調査地域は市街地や工業地帯、開放水域等で構成されている。また、対象事業実施区域内や隣接する公園、事業所内及びその敷地境界等には植栽された樹林や草地等がみられる。

調査地点は、図 7-2-7.1に示すとおり、調査地域の植物相を把握できるように調査地域内を任意に踏査したほか、各種植生区分を網羅できるように植生調査地点を設定した。

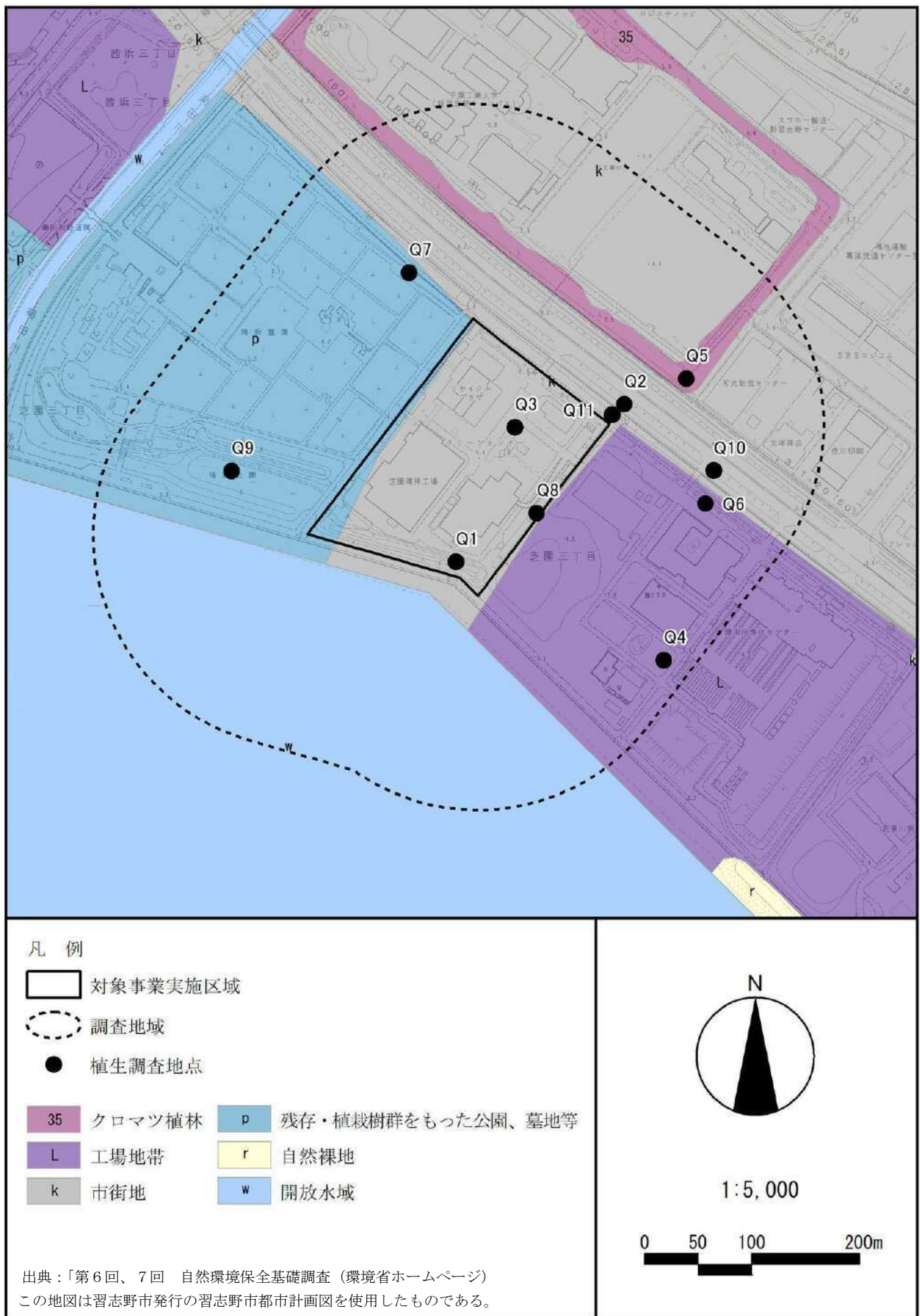


図 7-2-7.1 植物調査地点

エ. 調査手法

文献等の資料収集により情報を整理した上で、調査地域内の植生区分を網羅するように現地調査を行い、植物相・植生の現況を把握・解析してとりまとめを行った。

現地調査の手法やとりまとめ方法については、以下に示すとおりである。

(ア) 植物の現況

i 種子植物及びシダ植物その他主な植物に関する植物相及び植生の状況

(i) 植物相の状況

植物相の状況は、調査地域内の草地や樹林地等の植生区分を勘案しながら踏査を行い、種子植物及びシダ植物を対象に確認された生育種を記録・同定する手法により行った。なお、現地での同定が困難なものについては、標本を持ち帰り室内同定を行った。植物相調査の結果は確認種一覧、植物相の概要として取りまとめた。

(ii) 植生の状況

植生の状況は、ブラウーンブランケの植物社会学的手法に基づいたコドラート法により実施した。植生区分（樹林地及び草地等）を航空写真や現地踏査等によりあらかじめ概略把握し、各群落において植生が均質と思われる地点にコドラートを設定して、階層区分毎に出現した種を記録するとともに、優占度と群度を判定して植生の状況を把握した。

植生調査の結果は、植生図、植生調査票及び植生の概要としてとりまとめた。

ii 重要な種及び重要な群落の分布、生育の状況及び生育環境の状況

重要な種及び重要な群落は、国及び千葉県のレッドリスト等を参考に選定した。

現地調査において確認された重要な種及び重要な群落については、その分布状況及び生育状況を記録するとともに、生育環境についても記録し、可能な限り写真撮影を行った。

iii 植生自然度

現地調査における植生調査結果をもとに植生自然度を判別し、植生自然度図を作成した。

(イ) 指定・規制の状況

調査地域における自然環境に関する指定・規制について既存文献を収集・整理した。

オ. 調査期間

調査期間は、植物及び植生の特性を踏まえ、表 7-2-7.1に示したとおりとした。

表 7-2-7.1 植物調査実施日

調査項目	調査手法	調査季節	調査日
植物相	任意観察法	早春季	令和6年3月18日（月）
		春 季	令和6年4月22日（月）～4月23日（火）
		夏 季	令和6年7月29日（月）～7月30日（火）
		秋 季	令和6年10月28日（月）～10月29日（火）
植生	植生図作成調査	秋 季	令和6年10月28日（月）～10月29日（火）

カ. 調査結果

(ア) 植物の現況

i 種子植物及びシダ植物その他主な植物に関する植物相及び植生の状況

(i) 植物相の状況

植物相の現地調査結果（概要）は、表 7-2-7.2に示すとおりである。

調査地域内では、96科357種が確認された。

対象事業実施区域内では、57科285種の植物が確認された。草地ではチガヤ、セイタカアワダチソウ等が確認された。また、海岸の丘陵地等に生育するメダケが確認された。そのほか、リュウゼツラン類、ヤシ類等の暖地性植物の植栽が確認された。

対象事業実施区域外では、71科288種の植物が確認された。草地ではチガヤ、ススキ、セイバンモロコシ等のイネ科草本が確認されたほか、樹林地ではクロマツ、マテバシイ等の植栽樹が確認され、近くには樹林性であるキンラン、ササバギンランが確認された。そのほか、ハマヒサカキ、ハマボウ、ハマオモト等の海浜性植物の植栽が確認された。なお、植物相の確認種一覧は、資料編（資料6-1）に示す。

表 7-2-7.2 植物分類別確認種（概要）

分類				対象事業実施区域				合計		代表的な種
				内		外				
				科数	種数	科数	種数	科数	種数	
シダ植物				3	4	3	4	4	5	スギナ、タマシダ
種子植物	裸子植物			5	8	6	10	6	10	クロマツ、ソテツ
	被子植物	双子葉植物	離弁花	18	128	39	132	52	163	スダジイ、マテバシイ
			合弁花	18	76	13	72	20	93	ハマヒルガオ
		単子葉植物		13	70	10	70	14	86	チガヤ、ススキ
合計				57 科	285 種	71 科	288 種	96 科	357 種	-

(ii) 植生の状況

植物群落別面積は表 7-2-7.3に、現存植生図は図 7-2-7.2に示すとおりである。また、植物群落の概要は、表 7-2-7.4(1)、(2)に示すとおりである。

調査地域内では、9分類16の植物群落及び土地利用区分が確認された。調査地域内は市街地や工場地帯等の市街地等が全体の約52.6%となっており、続いて開放水域が約22.9%、クロマツ植林やその他植林等の植林地が約10.4%となっている。

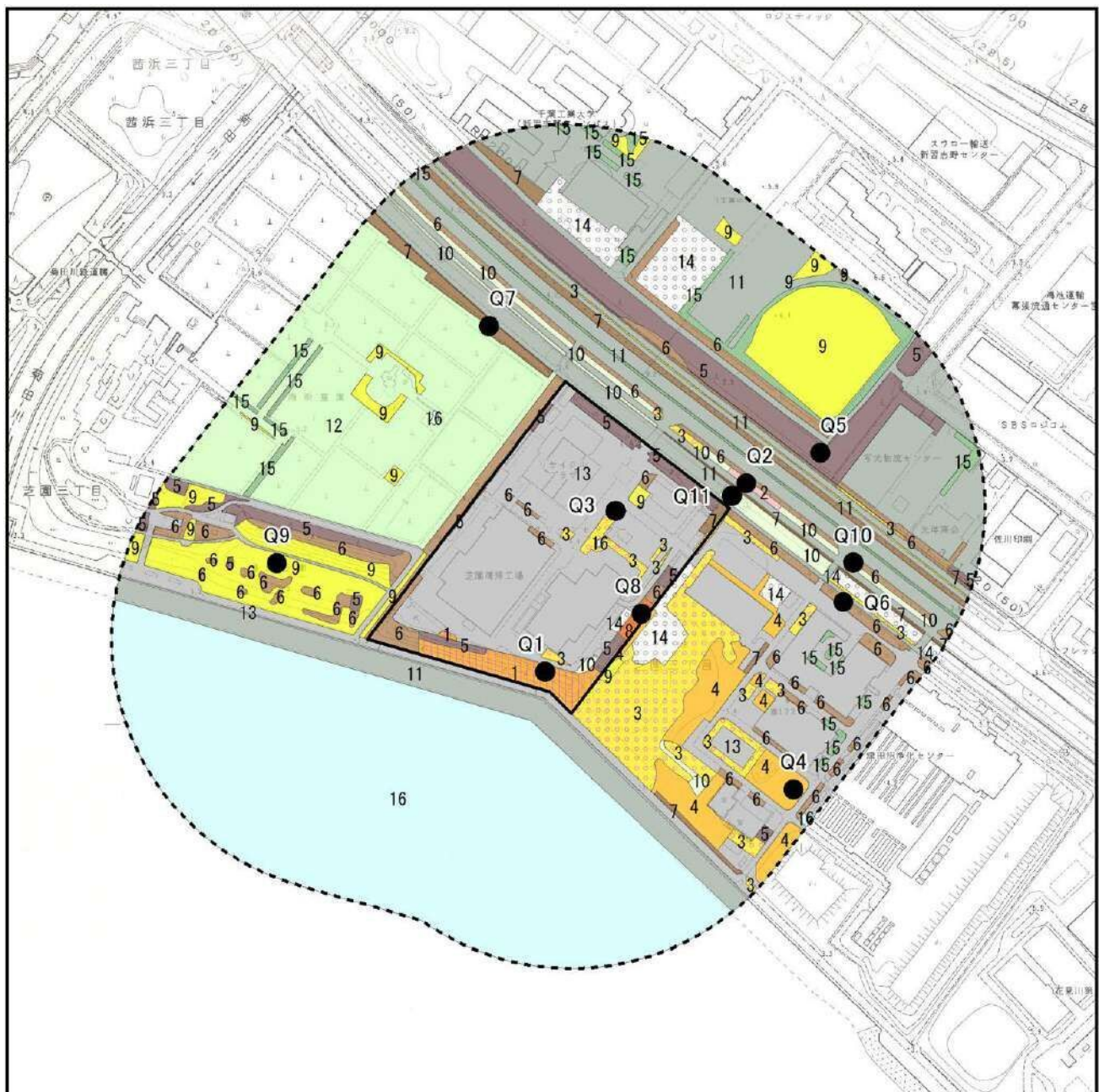
対象事業実施区域内では、8分類11の植物群落及び土地利用区分が確認された。対象事業実施区域内は工場地帯等の市街地等が全体の約77.8%を占めているほか、クロマツ植林やその他植林等の植林地が約10.4%となっている。なお、植生調査票は、資料編（資料6-2）に示す。

表 7-2-7.3 植物群落別面積

分類	No.	植物群落及び 土地利用区分	対象事業 実施区域		調査地域	
			面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)
タケ・ササ群落	1	メダケ群落	0.26	7.2	0.26	0.8
低木群落	2	クズ群落			0.02	0.1
二次草原	3	チガヤーススキ群落	0.10	2.7	1.17	3.7
	4	外来種二次草原			0.70	2.2
植林地	5	クロマツ植林	0.22	6.1	1.44	4.5
	6	その他植林	0.13	3.7	1.29	4.0
	7	その他植林（低木林）	0.02	0.5	0.58	1.8
竹林	8	ホウライチク・ホテイチク林	0.04	1.0	0.04	0.1
牧草地・ゴルフ場・芝地	9	ゴルフ場・芝地	0.02	0.5	1.91	6.0
耕作地	10	路傍・空地雑草群落	0.01	0.3	0.41	1.3
市街地等	11	市街地			6.22	19.5
	12	残存・植栽樹群をもった公園、墓地等			3.76	11.8
	13	工場地帯	2.79	77.4	5.46	17.1
	14	造成地	0.01	0.4	0.73	2.3
	15	残存・植栽樹群地			0.59	1.8
水域	16	開放水域 ^{注2)}	0.00	0.1	7.28	22.9
9分類		合計	3.60	100	31.86	100

注1) 面積及び比率は、四捨五入の関係で合計が一致しないことがある。

注2) 対象事業実施区域内の人工池、対象事業実施区域外の南東側の事業所内の人工池、西側の霊園内の人工池も開放水域に含む。なお、いずれの人工池も水生植物はほとんど存在しない。



凡 例

対象事業実施区域

調査地域

● 植生調査地点

1 メダケ群落

2 クズ群落

3 チガヤーススキ群落

4 外来種二次草原

5 クロマツ植林

6 その他植林

7 その他植林（低木林）

8 ホウライチク・ホテイチク林

9 ゴルフ場・芝地

10 路傍・空地雑草群落

11 市街地

12 残存・植栽樹群をもった公園、墓地等

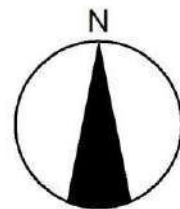
13 工場地帯

14 造成地

15 残存・植栽樹群地

16 開放水域

この地図は習志野市発行の習志野市都市計画図を使用したものである。



1:5,000



図 7-2-7.2 現存植生図

表 7-2-7.4(1) 植物群落の概要

No.	植物群落	群落高	調査面積	出現種数	群落概要
Q1	メダケ群落	4.5m	8 m × 8 m	6	メダケ群落は、陽地、河川堤防上、海岸断崖地等に成立するタケ群落である。 調査地域内では、対象事業実施区域南側の海岸に面した土堤にまとまった範囲でみられた。 群落高4.5m程度であるが、海風の影響が強い箇所では丈が低かった。低木層にメダケが高被度で優占し、その上をつる植物のクズが繁茂していた。草本層にはツワブキ、ツタバウンラン、トウネズミモチなどが生育するが、低木層に密生するメダケの影響で生育が妨げられ、草本層の植被率は7%程度と低かった。
Q2	クズ群落	0.8m	4 m × 8 m	6	クズ群落は、畑放棄地、造成跡地、伐採跡地、崩壊地等の陽地に成立するつる植物群落である。 調査地域内では、対象事業実施区域外の周辺道路沿いの植栽に小面積で帯状にみられた。 群落高0.8m程度で草本層にクズが高被度で優占し、セイタカアワダチソウやつる植物のヤブガラシ、チガヤなどが混生していた。
Q3	チガヤーススキ群落	0.4m	5 m × 5 m	9	チガヤーススキ群落は、畑放棄地、造成跡地などに形成される二次草原である。 調査地域内では、対象事業実施区域及びその周辺の植栽にパッチ状にみられたほか、対象事業実施区域の南東側の事業所内に広い範囲でみられた。 群落高0.4m程度で草本層にチガヤが優占し、シマスズメノヒエ、セイタカアワダチソウ、シロツメクサなどが混生していた。植栽の植分はシバの被度が高いことから本来シバ植栽地であった箇所にチガヤが進入したものと考えられる。造成跡地の植分にはチガヤのほかススキの優占箇所もみられた。
Q4	外来種二次草原	2 m	5 m × 5 m	8	外来種二次草原は、日当たりの良い乾燥地や造成跡地などに成立する外来種が優占する二次草原である。 調査地域内では、対象事業実施区域の南東側の事業所内にパッチ状にみられた。 群落高は2 m程度で草本層に外来種のセイバンモロコシが優占し、ヤブガラシ、ハマスゲ、ギシギシなどが混生していた。
Q5	クロマツ植林	17m	15m × 25m	21	クロマツ植林は、海岸砂丘の砂防林、沿海地の用材林として沿海地に植栽される常緑針葉樹の植林である。 調査地域内では、対象事業実施区域の縁に帯状のパッチがみられたほか、対象事業実施区域の北側の大学施設の敷地境界や、西側の公園に帯状の防砂林（防風林）がまとまって分布していた。 植生調査を実施した大学施設内の地点では、群落高10～17m程度で高木層に植栽起源のクロマツが優占し、亜高木層や低木層にはヤマモモ、マデバシイ、トベラ、ヤブツバキ、ヤブニッケイなどの常緑広葉樹が多くみられた。林内は薄暗く、林床にも常緑広葉樹の実生が多数生育していた。
Q6	その他植林	10m	4 m × 25m	31	その他植林は、スギ・ヒノキ・サワラ、アカマツ、クロマツ、エゾマツ、トドマツ、アカエゾマツ、カラマツ、リュウキュウマツ以外の在来樹種の植林である。今回の調査では、このうち約5 m以上の高木林または亜高木林をこの凡例に区分した。 調査地域内では、対象事業実施区域及びその周辺の敷地境界や建造物、道路に沿って、また対象事業実施区域外の西側の公園の防砂林（防風林）として帯状またはパッチ状にみられた。 群落高7～10m程度で高木層、亜高木層にクロマツ、マデバシイ、タブノキ、ウバメガシ、キョウチクトウなどの植栽起源の常緑樹が混生し、植分により優占種は様々であった。低木層も生育種は多様で、シャリンバイ、サンゴジュ、マデバシイ、トベラなどの常緑樹が多くみられた。

表 7-2-7.4(2) 植物群落の概要

No.	植物群落	群落高	調査面積	出現種数	群落概要
Q7	その他植林（低木林）	4.5m	5 m × 12 m	18	その他植林は、スギ・ヒノキ・サワラ、アカマツ、クロマツ、エゾマツ、トドマツ、アカエゾマツ、カラマツ、リュウキュウマツ以外の在来樹種の植林である。今回の調査では、このうち約5 m以下の樹林を低木林として区分した。また、灌木のみの植栽地や木本層の植被率が50%未満の植林地については「残存・植栽樹群地」として市街地等に区分した。 調査地域内では、対象事業実施区域内の北東側に小さな植分がみられた。また、対象事業実施区域外の北西側の霊園に帯状のまとまった植分がみられたほか、建造物や道路に沿って細長い植分が分布していた。 群落高は4.5 m程度で低木層にスダジイ、クロマツ、マテバシイ、サンゴジュなどの植栽起源の常緑樹が混生し、植分により優占種は様々であった。林床はやや明るく、チガヤ、クズ、セイタカアワダチソウなどが生育していた。
Q8	ハウライチク・ホテイチク林	7 m	5 m × 8 m	3	ハウライチク・ホテイチク林は、河川の護岸や目隠しの生垣、観賞用などを目的として植栽される竹林である。 調査地域内では、対象事業実施区域東側の敷地境界に小さな植分が確認された。 群落高7 m程度で亜高木層にホテイチクが高被度で優占しており、密生するホテイチクの影響で林内の生育種はツルグミやマサキがわずかにみられるのみであった。
Q9	ゴルフ場・芝地	0.4m	5 m × 5 m	6	ゴルフ場・芝地は、頻繁な草刈により維持されている植生高の低いゴルフ場や公園の芝地である。 調査地域内では、対象事業実施区域北側の植栽に小さな植分がみられた。また、対象事業実施区域外の北側の大学施設のグラウンドや西側の公園に広い範囲でみられたほか、各施設の植栽に小規模な植分が点在していた。 群落高は0.1～0.4 m程度で植栽起源のシバが高被度で優占し、ヤハズソウ、シマスズメノヒエ、シロツメクサ、セイヨウタンポポ、ヘラオオバコなどの陽地を好む踏みつけに強い種が混生していた。
Q10	路傍・空地雑草群落 (セイタカアワダチソウ優占)	1.8m	5 m × 5 m	5	路傍・空地雑草群落は、都市と周辺域の空地や造成地、耕作放棄地などに成立する草本群落である。 調査地域内では、対象事業実施区域南東側に小さな植分がみられたほか、対象事業実施区域外の南東側の事業所にも小さな植分が、周辺道路の植栽等にはややまとまった帯状の植分が点在していた。
Q11	路傍・空地雑草群落 (メヒシバ優占)	0.6m	3 m × 3 m	14	群落高や優占種は草刈の頻度などで異なり、多年草のセイタカアワダチソウなどが優占する植分(Q10)は高さ1.8 m程度でチガヤ、ヤブガラシ、ヘクソカズラなどが混生し、一年草のメヒシバなどが優占する植分(Q11)は高さ0.6 m程度であり、エノコログサ、シマスズメノヒエ、キンエノコロなどが混生しており、いずれも陽地を好む種が主体であった。

ii 重要な種及び重要な群落の分布、生育の状況及び生育環境の状況

(i) 選定根拠及び基準

重要種の選定は、表 7-2-7.5に示す法令及び文献による評価を基準とした。

表 7-2-7.5 重要な植物種の選定根拠

選定根拠		選定基準	植物種	植物群落
法令等による指定	①	「文化財保護法」 (昭和 25 年 5 月 30 日 法律第 214 号)	・特別天然記念物 (特天) ・国指定天然記念物 (国天)	○
	②	「千葉県文化財保護条例」 (昭和 30 年 3 月 29 日 条例第 8 号)	・県指定天然記念物 (県天)	○
	③	「習志野市文化財保護条例」 (昭和 45 年 12 月 25 日 条例第 47 号) 「千葉市文化財保護条例」 (昭和 33 年 10 月 7 日 条例第 18 号) 「船橋市文化財保護条例」 (昭和 39 年 3 月 30 日 条例第 22 号)	・市指定天然記念物 (市天)	○
	④	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律 (種の保存法)」 (平成 4 年 6 月 5 日 法律第 75 号)	・国内希少野生動植物種 (国内) ・国際希少野生動植物種 (国際) ・特定第一種国内希少野生動植物種 (特 1) ・特定第二種国内希少野生動植物種 (特 2) ・緊急指定種 (緊急)	○
	⑤	「第 5 次レッドリスト (植物・菌類)」 (令和 7 年 3 月 18 日 環境省報道発表資料)	・絶滅 (EX) ・野生絶滅 (EW) ・絶滅危惧 I A 類 (CR) ・絶滅危惧 I B 類 (EN) ・絶滅危惧 II 類 (VU) ・準絶滅危惧 (NT) ・情報不足 (DD) ・地域個体群 (LP)	○
文献による指定	⑥	「千葉県レッドデータブック-植物・菌類編 (2023 年改訂版)」 (令和 5 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課)	・消息不明・絶滅生物 (X) ・野生絶滅生物 (EW) ・最重要保護生物 (A) ・重要保護生物 (B) ・要保護生物 (C) ・一般保護生物 (D) ・保護参考雑種 (RH)	○
	⑦	「千葉市の保護上重要な野生生物-千葉県レッドリスト-」 (平成 16 年 5 月 千葉市)	・消息不明・絶滅生物 (X) ・最重要保護生物 (A) ・重要保護生物 (B) 注) ・要保護生物 (C) 注)	○
	⑧	「第 2 回、3 回、5 回 自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査」 (環境省ホームページ)	・原生林もしくはそれに近い自然林 (A) ・国内若干地域に分布するが、極めて稀な植物群落または個体群 (B) ・比較的普通に見られるものであっても、南限・北限・隔離分布等分布限界になる産地に見られる植物群落または個体群 (C) ・砂丘、断崖地、塩沼地、湖沼、河川、湿地、高山、石灰岩地等の特殊な立地に特有な植物群落または個体群で、その群落の特徴が典型的なもの (D) ・郷土景観を代表する植物群落で、特にその群落の特徴が典型的なもの (E) ・過去において人工的に植栽されたことが明らかな森林であっても、長期にわたって伐採等の手が入っていないもの (F) ・乱獲、その他人為の影響によって、当該都道府県内で極端に少なくなるおそれのある植物群落または個体群 (G) ・その他、学術上重要な植物群落または個体群 (H)	○
	⑨	「千葉県レッドデータブック-群集・群落編」 (令和 2 年 12 月 千葉県)	・生態系列の各植生ゾーンが明確に保存されている (5) ・各ゾーンの区分は明確であるが、一部に踏みつけなどの人為的影響が見られ、その生態系列に本来は得ている植物以外の種が侵入している (4) ・ゾーンの区分はできるが、一部のゾーンの区画が不明瞭になっており、ほかの生態系列に本拠を持つ種が多い。また、一部のゾーンが失われている (3) ・各ゾーンの区画が不明確であり、多くのゾーンが失われている (2) ・ほとんど本来の植生ゾーンが見られない (1)	○

注) 非維管束植物種は生育状況に関する情報が特に不足しており、カテゴリー (B) と (C) の区別が困難なため、(B-C) としている。

(ii) 重要な種

確認された植物種のうち重要な種は表 7-2-7.6に示すとおり、2科3種確認された。
また、重要な種の確認状況は、表 7-2-7.7に示すとおりである。
なお、重要な種保護の観点から詳細な確認位置は記載していない。

表 7-2-7.6 重要な種（植物）

No.	科名	種名	選定基準							確認位置 対象事業 実施区域		確認時期			
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	内	外	早春	春季	夏季	秋季
1	マツモ	マツモ						C			●			●	●
2	ラン	キンラン					NT	D	A		●		●		
3		ササバギンラン						D	A		●		●	●	
計	2科	3種	0種	0種	0種	0種	1種	3種	2種	0種	3種	0種	2種	2種	1種

注1) 選定基準は表7-2-7.5に示したとおりである。

注2) 分類及び配列は、「植物目録1987」（昭和63年 環境庁）に準拠した。

表 7-2-7.7 重要な種の確認状況（植物）

No.	種名	確認位置				主な確認状況
		対象事業実施区域				
		内		外		
		箇所数	例数	箇所数	例数	
1	マツモ	0	0	1	1	対象事業実施区域外の南東側の事業所内の人工池で確認された。
2	キンラン	0	0	2	19	対象事業実施区域外の北西側の植栽で確認された。
3	ササバギンラン	0	0	8	231	対象事業実施区域外の北西側及び南東側の植栽で確認された。

(iii) 重要な群落

調査地域には、植生自然度9～10に該当する植物群落、「第2回、3回、5回 自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査」（環境省ホームページ）における特定植物群落または「千葉県の保護上重要な野生生物－千葉県レッドデータブック－群集・群落編」（令和2年12月 千葉県）に指定されている重要な植物群落は分布していない。

iii 植生自然度

植生自然度は、「現存植生図2024 凡例に対する植生自然度の付与について」（令和7年3月 環境省）における基準に従うこととし、表 7-2-7.8に示す区分とした。

表 7-2-7.8 植生自然度の区分とその基準

植生自然度	区分	区分基準
10	自然草原	高山ハイデ、風衝草原、自然草原等、自然植生のうち単層の植物社会を形成する地区
9	自然林	エゾマツトドマツ群集、ブナ群落等、自然植生のうち低木林、高木林の植物社会を形成する地区
8	二次林 (自然林に近いもの)	ブナ・ミズナラ群落、シイ・カシ二次林等、代償植生であっても特に自然植生に近い地区
7	二次林	クリーミズナラ群集、コナラ群落等、繰り返し伐採されている一般に二次林と呼ばれている代償植生地区
6	植林地	常緑針葉樹、落葉針葉樹、常緑広葉樹等の植林地、アカメガシワ等の低木林
5	二次草原 (背の高い草原)	ササ群落、ススキ群落等の背丈の高い草原、伝統的な管理を受けて持続している構成種の多い草原
4	二次草原 (背の低い草原)	シバ群落等の背丈の低い草原、伐採直後の草原、路傍・空地雑草群落、放棄畑雑草群落
3	外来種植林 農耕地（樹園地）	竹林、外来種の植林・二次林・低木林、果樹園、茶畑、残存・植栽樹群をもった公園、墓地等
2	耕地（水田・畑）	外来種の草原、畑、水田等の耕作地、緑の多い住宅地
1	市街地等	市街地、造成地等の植生のほとんど存在しない地区

出典：「現存植生図2024 凡例に対する植生自然度の付与について」（令和7年3月 環境省）

調査地域内の植生自然度は、表 7-2-7.9及び図 7-2-7.3に示すとおりである。

調査地域内では、自然度 1 に該当する市街地、工場地帯、造成地が最も多く、全体の約39.0%となっている。比較的自然度の高い群落としては、自然度 6 に該当するクロマツ植林、その他植林、その他植林（低木林）が全体の約10.4%、自然度 5 に該当するメダケ群落、クズ群落、チガヤーススキ群落が約4.6%となっている。

対象事業実施区域内では、自然度 1 に該当する工場地帯、造成地が最も多く、全体の約77.8%となっているほか、自然度 6 に該当するクロマツ植林、その他植林、その他植林（低木林）が約10.4%となっている。

なお、調査地域内には、植生自然度10～7に該当する植物群落及び土地利用区分は確認されなかった。

表 7-2-7.9 植生自然度

植生自然度		対象事業 実施区域		調査地域	
自然度	該当する植物群落及び土地利用区分	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)
10	—				
9	—				
8	—				
7	—				
6	クロマツ植林、その他植林、その他植林（低木林）	0.37	10.4	3.31	10.4
5	メダケ群落、クズ群落、チガヤーススキ群落	0.36	10.0	1.45	4.6
4	ゴルフ場・芝地、路傍・空地雑草群落	0.03	0.8	2.32	7.3
3	ハウライチク・ホテイチク林、 残存・植栽樹群をもった公園、墓地等、 残存・植栽樹群地	0.04	1.0	4.39	13.8
2	外来種二次草原		0.0	0.70	2.2
1	市街地、工場地帯、造成地	2.81	77.8	12.41	39.0
W	開放水域	0.00	0.1	7.28	22.9
合計		3.60	100	31.86	100

注）面積及び比率は、四捨五入の関係で合計が一致しないことがある。

（イ）指定・規制の状況

「3-2-8 環境の保全を目的とする法令等により指定された地域その他の対象及び当該対象に係る規制の内容その他の状況」に示したとおりである。

調査地域は、「鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律」に基づく千葉特定猟具使用禁止区域（銃器）に含まれている。

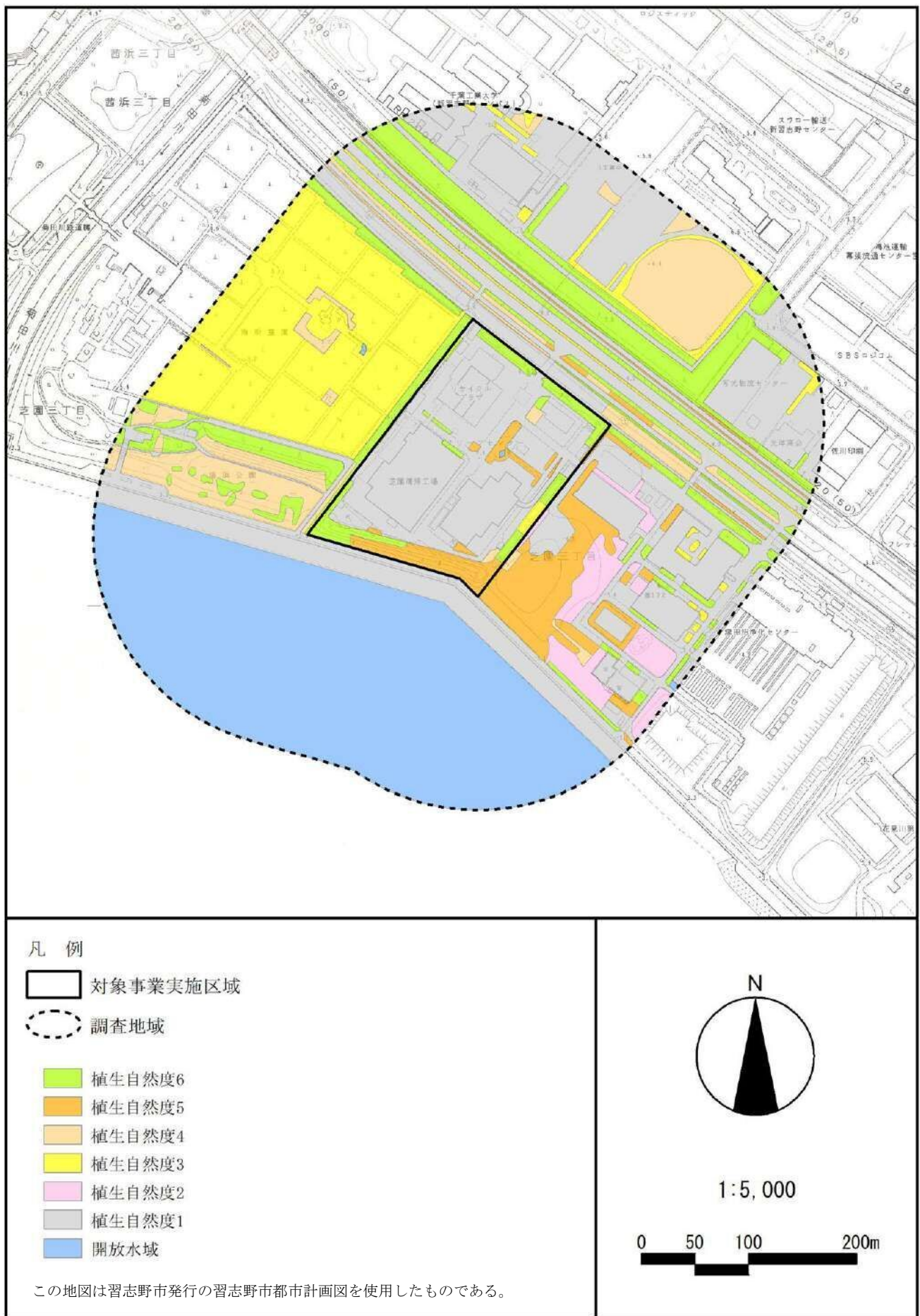


図 7-2-7.3 植生自然度図

② 予 測

ア. 予測地域

予測地域は、調査地域と同様とした。

イ. 予測項目

植物の予測は、以下に示す項目について行った。

- ・植物相の変化
- ・重要な種及び地域の特性を把握するうえで注目される種の生育状況の変化
- ・植物群落の変化
- ・植生自然度の変化

ウ. 予測対象時期

予測対象時期は、工事により植物への影響が最大になると考えられる時期及び工作物の設置並びに植栽等による修景が完了した時期とした。

エ. 予測手法

予測は事業計画の内容を踏まえ、土地の改変などが保全対象である植物に及ぼす直接的な影響及び植物の生育環境の変化に伴う間接的な影響について、現存植生図や重要な種の分布図等を重ね合わせることで、本事業による影響の程度を予測した。

なお、現状では詳細な工事計画及び土地利用計画が確定していない。そのため、工事中は、対象事業実施区域内全域が改変され、造成地となるものとした。供用時は、建築物等、構内道路・駐車場等は工場地帯（植生自然度1）になるものとし、緑地は区分（植栽樹林、芝地等）が未確定であることから、すべて植生自然度1とした。現状の土地利用計画は、図 7-2-7.4に示すとおりである。

（ア）植物相の変化

予測地域に残る植物群落の状況を考慮し、予測地域に成立する植物相の変化の程度について予測した。

（イ）重要な種及び地域の特性を把握するうえで注目される種等の生育状況の変化

予測地域に残る生育環境を考慮し、重要な種及び地域の特性を把握するうえで注目される種等の生育状況の変化の程度について、種の特性等を踏まえて予測した。

（ウ）植物群落の変化

植物群落及びそれらを構成する種の分布状況及び消失率を考慮して、予測地域に成立する植物群落の変化の程度について予測した。

（エ）植生自然度の変化

植生自然度を構成する植物群落及び消失率を考慮して、植生自然度の変化の程度について予測した。

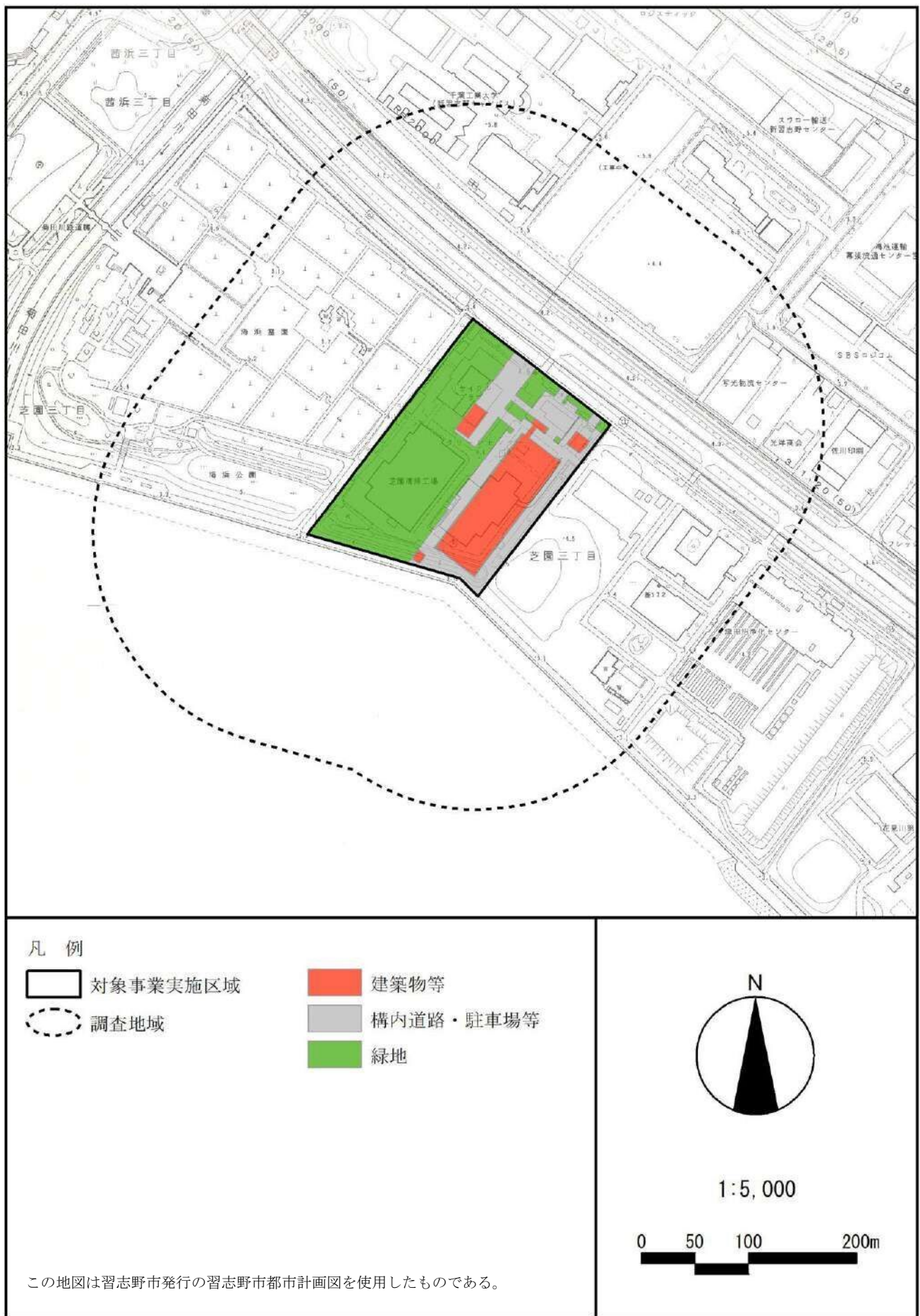


図 7-2-7.4 供用時の土地利用計画

オ. 予測結果

(ア) 植物相の変化

植物相の変化についての予測結果概要は表 7-2-7. 10に、予測結果は表 7-2-7. 11に示すとおりである。

表 7-2-7. 10 植物相の変化についての予測結果概要

項目	確認状況									代表的な種	影響の程度	
	対象事業実施区域						計		割合 (%)			
	のみ		内		外							
	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数				
	工事中	供用時										
植物相	25 科	69 種	57 科	285 種	71 科	288 種	96 科	357 種	19.3	クロマツ、マテバシイ、チガヤ、ススキ	-	-

注 1) 割合 (%) は、確認された全確認種のうち対象事業実施区域のみで確認された種の割合である。

注 2) 事業実施による影響の程度は以下のとおり。

×：影響は大きい △：影響が生じる可能性がある -：影響はない(極めて小さい)

表 7-2-7. 11 植物相の変化についての予測結果

確認状況	現地調査において、対象事業実施区域内で 57 科 285 種（うち、対象事業実施区域内でのみ確認された種は 69 種）、対象事業実施区域外で 71 科 288 種、合計 357 種確認された。
予測結果 (工事中)	【直接的影響】 対象事業実施区域内に生育する植物は、工事の影響により消失する。メダケ群落やホウライチク・ホテイチク林は対象事業実施区域内でのみ確認されているが、メダケ群落に優占しているメダケは対象事業実施区域外でも生育が確認されており、ホウライチク・ホテイチク林に優占しているホテイチクは植栽種である。対象事業実施区域内に分布するその他の植物群落（クロマツ植林、その他植林等）については、対象事業実施区域周辺に広く分布している。 対象事業実施区域は元々造成地であることから外部から侵入した種も多く、供用数年後には対象事業実施区域周辺からの植物の侵入により、対象事業実施区域周辺に近い植物相の回復も予想される。 なお、対象事業実施区域内のみで確認された種は、確認種全体の 19.3%である。対象事業実施区域内のみで確認された 69 種のうち、植栽種や逸出種といった人為的な種が半数近くを占めており、外来種も多く含んでいた。また、主に埋立地や市街地で一般的にみられる種であった。 以上のことから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害等の影響が考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、粉じんの飛散を防止するために、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行うことから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。
予測結果 (供用時)	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生育環境の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては、地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。

(イ) 重要な種及び地域の特性を把握するうえで注目される種の生育状況の変化

i 重要な種の生育状況の変化

現地調査により予測地域内で確認された重要な種の生育状況の変化についての予測結果概要は表 7-2-7.12に、予測結果は表 7-2-7.13 (1)～(3)に示すとおりである。

表 7-2-7.12 重要な種の生育状況の変化についての予測結果概要

No.	種名	確認状況		生育環境の有無		主な確認状況	影響の程度	
		内	外	内	外		工事中	供用時
1	マツモ		1箇所		○	対象事業実施区域外の南東側の人工池で確認された。	—	—
2	キンラン		2箇所 (19株)	○	○	対象事業実施区域外の北西側の植栽で確認された。	—	—
3	ササバギンラン		8箇所 (231株)	○	○	対象事業実施区域外の北西側及び南東側の植栽で確認された。	—	—

注) 事業実施による影響の程度は以下のとおり。

×：影響は大きい △：影響が生じる可能性がある —：影響はない(極めて小さい)

表 7-2-7.13(1) 重要な種の生育状況の変化についての予測結果 (マツモ)

マツモ（マツモ科）			
指定状況	⑥千葉県 RDB：要保護生物（C）		
種の特徴	沈水性の多年生草本。茎の先端は冬に切れ落ちて沈み冬芽として越冬する。茎はもろく折れやすい。葉は羽状複葉で一節に5～12葉を輪生。葉は長さ1.5～2.5cmで、裂片は2又状に分岐し先端は針状に尖る。花は雌雄異花で葉腋に1個ずつつく。水媒で水散布。ヒルムシロ群綱。	 現地調査での確認個体	
分布	北海道・本州・四国・九州・琉球。世界に広く分布。		
出典	「千葉県レッドデータブック—植物・菌類編（2023年改訂版）」 （令和5年3月 千葉県環境生活部自然保護課）		
確認状況	夏季及び秋季に対象事業実施区域外の南東側の人工池で確認された。		
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外 ：夏季・秋季1箇所（1.5m×2m）	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されていない。また、本種の生育環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。		
	【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生育環境の変化等の影響が考えられるものの、本種が生育している水域（人工池）への排水は行わない。 また、工事での雨水の流出による生育環境の変化等の影響が考えられるものの、本種が確認された水域（人工池）は対象事業実施区域から十分離れた場所に存在している。 さらに、工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害等の影響が考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行う等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。		
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。		
	【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。		

表 7-2-7.13(2) 重要な種の生育状況の変化についての予測結果（キンラン）

キンラン（ラン科）		
指定状況	⑤環境省 RL：準絶滅危惧（NT） ⑥千葉県 RDB：一般保護生物（D） ⑦千葉市 RL：最重要保護生物（A）	 現地調査での確認個体
種の特性	中型の多年生草本。葉は単葉で互生。花は5月初めに咲き黄色で、花被片は平開する。ギンラン、ササバギンランなどの同属の他の種類に比べて、全体が大きく、葉の幅が広く、緑の色が濃い。虫媒で、風散布。ブナ群綱。	
分布	本州・四国・九州。朝鮮、中国。	
出典	「千葉県レッドデータブックー植物・菌類編（2023年改訂版）」 （令和5年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	春季に対象事業実施区域外の北西側の植栽で確認された。 対象事業実施区域内：確認無し 対象事業実施区域外：春季2箇所19株	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内で確認されていない。また、本種の生育環境となるクロマツ、マテバシイなどの植林地は対象事業実施区域内に存在するものの、生育環境は広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害等の影響が考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行う等の環境保全措置を実施することから、工事中的間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生育環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては、地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-7.13(3) 重要な種の生育状況の変化についての予測結果（ササバギンラン）

ササバギンラン（ラン科）		
指定状況	⑥千葉県 RDB：一般保護生物（D） ⑦千葉市 RL：最重要保護生物（A）	
種の特性	中型の多年生草本。根茎はキンラン、ギンランよりも深いところに位置している。葉は単葉で互生し、最上部の葉は花序より長い。茎や葉の縁、脈上などに細突起状の毛が多い。花は5月中旬に咲き、白色で、わずかな期間のみ平開する。距はやや長いが、個体により変異がある。虫媒で、風散布。ブナ群綱。	 現地調査での確認個体
分布	北海道・本州・四国・九州。サハリン、千島、朝鮮、中国。キンラン、ギンランよりも北方あるいは高標高のところに分布する傾向がある。	
出典	「千葉県レッドデータブック―植物・菌類編（2023年改訂版）」 （令和5年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	春季及び夏季に対象事業実施区域外の北西側及び南東側の植栽で確認された。 対象事業実施区域内：確認無し 対象事業実施区域外：春季・夏季8箇所 201株	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内で確認されていない。また、本種の生育環境となるマテバシイ植林（マテバシイを含むその他植林、その他植林（低木林）を指す）は対象事業実施区域内に存在するものの、生育環境は広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害等の影響が考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行う等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生育環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては、地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

ii 地域の特性を把握するうえで注目される種等の生育状況の変化

地域の特性を把握するうえで注目される種等は、表 7-2-7.14に示すとおり、ササバギンラン、チガヤーススキ群落を選定した。

地域の特性を把握するうえで注目される種等の変化についての予測結果は、表 7-2-7.15(1)、(2)に示すとおりである。

表 7-2-7.14 地域の特性を把握するうえで注目される種等及びその選定理由

No.	種名	選定理由
1	ササバギンラン	本種は、コナラ二次林などの落葉広葉樹林のほか、市街地の樹林帯やマテバシイ植林に生育することもある。 現地調査において、対象事業実施区域外の西側及び南東側の植栽で確認された。予測地域内は市街地環境が多くを占めるものの、本種の生育環境となるマテバシイ植林（マテバシイを含むその他植林、その他植林（低木林）を指す）が広く点在している。以上を踏まえ、本種は地域の特性を把握するうえで注目される種と考えられることから選定した。
2	チガヤーススキ群落	本群落は、畑放棄地、造成跡地などに形成される二次草原である。 現地調査において、対象事業実施区域及びその周辺の植栽にパッチ状にみられたほか、対象事業実施区域の南東側の事業所内にまとまった範囲でみられた。本群落は市街地環境が多くを占める予測地域内において、草地を生育環境とする多くの種の生育基盤となっている。以上を踏まえ、地域の特性を把握するうえで注目される群落と考えられることから選定した。

表 7-2-7.15(1) 地域の特性を把握するうえで注目される種等の生育状況の変化についての予測結果（ササバギンラン）

ササバギンラン（ラン科）		
指定状況	⑥千葉県 RDB：一般保護生物（D） ⑦千葉市 RL：最重要保護生物（A）	
種の特性	中型の多年生草本。根茎はギンラン、ギンランよりも深いところに位置している。葉は単葉で互生し、最上部の葉は花序より長い。茎や葉の縁、脈上などに細突起状の毛が多い。花は5月中旬に咲き、白色で、わずかな期間のみ平開する。距はやや長い、個体により変異がある。虫媒で、風散布。ブナ群綱。	
分布	北海道・本州・四国・九州。サハリン、千島、朝鮮、中国。ギンラン、ギンランよりも北方あるいは高標高のところに分布する傾向がある。	
出典	「千葉県レッドデータブックー植物・菌類編（2023年改訂版）」 （令和5年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	春季及び夏季に対象事業実施区域の北西側及び南東側の植栽で確認された。 対象事業実施区域内：確認無し 対象事業実施区域外：春季・夏季8箇所 201株	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内で確認されていない。また、本種の生育環境となるマテバシイ植林（マテバシイを含むその他植林、その他植林（低木林）を指す）は対象事業実施区域内に存在するものの、生育環境は広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害等の影響が考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行う等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生育環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては、地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-7. 15 (2) 地域の特徴を把握するうえで注目される種等の生育状況の変化についての予測結果（チガヤースキ群落）

チガヤースキ群落		
植生の特徴	本植生は、畑放棄地、造成跡地等に形成される二次草原。チガヤまたはススキが優占する。やや貧養な立地に多い。	 現地調査での確認状況
出典	「統一凡例（大・中・細区分一覧表）」（環境省ホームページ）	
確認状況	主に対象事業実施区域内、対象事業実施区域外の南東側の事業所で確認された。 対象事業実施区域内：0.10ha 対象事業実施区域周辺：1.07ha	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、対象事業実施区域内に存在するチガヤースキ群落が一時的に消失するものの、群落及び構成する種の生育環境は予測地域内に広く存在する。また、本群落を構成する種は草地環境において一般的にみられる種であることから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害等の影響が考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行う等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生育環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては、地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

(ウ) 植物群落の変化

本事業による植物群落等の面積の変化は表 7-2-7.16に、供用時の植生図は図 7-2-7.5に、植物群落の変化についての予測結果は、表 7-2-7.17に示すとおりである。

表 7-2-7.16 植物群落等の面積の変化

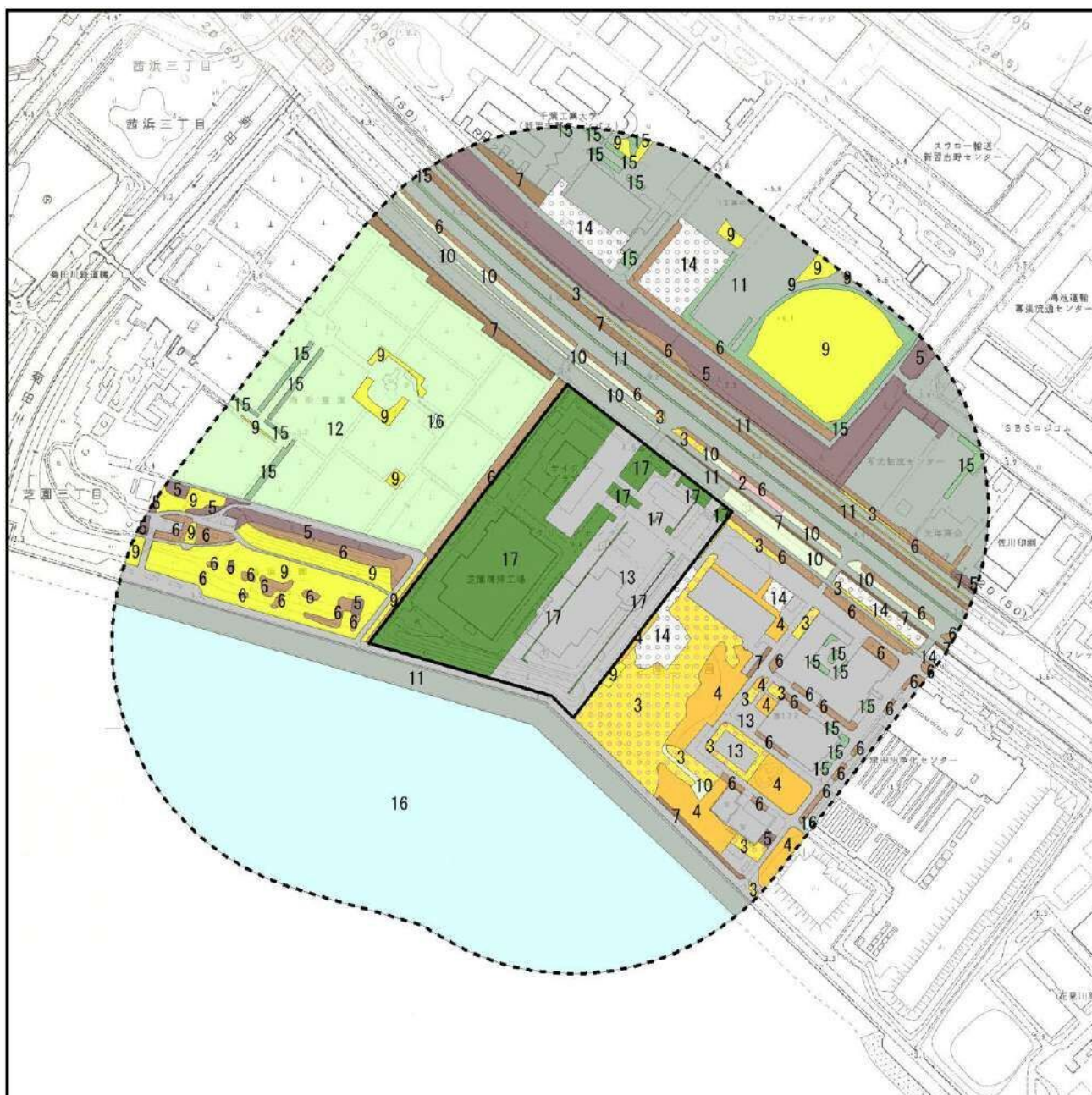
No.	植物群落及び 土地利用区分	現況				供用時			
		対象事業 実施区域		予測地域		対象事業 実施区域		予測地域	
		面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)
1	メダケ群落	0.26	7.2	0.26	0.8				
2	クズ群落			0.02	0.1			0.02	0.1
3	チガヤーススキ群落	0.10	2.7	1.17	3.7			1.07	3.3
4	外来種二次草原			0.70	2.2			0.70	2.2
5	クロマツ植林	0.22	6.1	1.44	4.5			1.22	3.8
6	その他植林	0.13	3.7	1.29	4.0			1.15	3.6
7	その他植林(低木林)	0.02	0.5	0.58	1.8			0.56	1.8
8	ハウライチク・ホテイチク林	0.04	1.0	0.04	0.1				
9	ゴルフ場・芝地	0.02	0.5	1.91	6.0			1.89	5.9
10	路傍・空地雑草群落	0.01	0.3	0.41	1.3			0.40	1.3
11	市街地			6.22	19.5			6.22	19.5
12	残存・植栽樹群をもった公園、 墓地等			3.76	11.8			3.76	11.8
13	工場地帯	2.79	77.4	5.46	17.1	1.62	45.0	4.29	13.5
14	造成地	0.01	0.4	0.73	2.3			0.72	2.3
15	残存・植栽樹群地			0.59	1.8			0.59	1.8
16	開放水域	0.00	0.1	7.28	22.9			7.28	22.8
17	緑地 ^(注2)					1.98	55.0	1.98	6.2
	合計	3.60	100	31.86	100	3.60	100	31.86	100

注1) 比率は、四捨五入の関係で合計が一致しないことがある。

注2) 現状では土地利用計画における詳細な緑地区分(植栽樹林、芝地等)は未確定である。

表 7-2-7.17 植物群落の変化についての予測結果

確認状況	現地調査において、対象事業実施区域内では植物群落であるメダケ群落が 0.26ha、クロマツ植林が 0.22ha、その他植林が 0.13ha 等、土地利用区分である工場地帯が 2.79ha 等確認された。
予測結果 (工事中)	【直接的影響】 対象事業実施区域内に存在するメダケ群落、チガヤーススキ群落、クロマツ植林、その他植林、その他植林(低木林)、ハウライチク・ホテイチク林、ゴルフ場・芝地、路傍・空地雑草群落は消失する。 そのうち、チガヤーススキ群落、クロマツ植林、その他植林、その他植林(低木林)、ゴルフ場・芝地、路傍・空地雑草群落及びこれらの群落を構成する種は予測地域内に広く残存する。 なお、対象事業実施区域内でのみ確認されているメダケ群落やハウライチク・ホテイチク林は、予測地域内から消失する。メダケ群落に優占しているメダケは対象事業実施区域外でも生育が確認されており、ハウライチク・ホテイチク林に優占しているホテイチクは植栽種である。 以上のことから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害等の影響が考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行う等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。
予測結果 (供用時)	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生育環境の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては、地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。



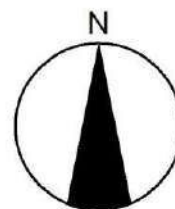
凡 例

この地図は習志野市発行の習志野市都市計画図を使用したものである。

対象事業実施区域

調査地域

- | | |
|-----------------|----------------------|
| 1 メダケ群落 | 10 路傍・空地雑草群落 |
| 2 クズ群落 | 11 市街地 |
| 3 チガヤーススキ群落 | 12 残存・植栽樹群をもった公園、墓地等 |
| 4 外来種二次草原 | 13 工場地帯 |
| 5 クロマツ植林 | 14 造成地 |
| 6 その他植林 | 15 残存・植栽樹群地 |
| 7 その他植林（低木林） | 16 開放水域 |
| 8 ホウライチク・ホテイチク林 | 17 緑地 |
| 9 ゴルフ場・芝地 | |



1:5,000



図 7-2-7.5 供用時の植生図

(エ) 植生自然度の変化

供用時における植生自然度の変化は表 7-2-7. 18に、供用時の植生自然度は図 7-2-7. 6に、植生自然度の変化についての予測結果は、表 7-2-7. 19に示すとおりである。

表 7-2-7. 18 植生自然度の変化

植生自然度		現況				供用時			
		対象事業 実施区域		予測地域		対象事業 実施区域		予測地域	
自然度	該当する植物群落 及び土地利用区分	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)
10	—								
9	—								
8	—								
7	—								
6	クロマツ植林、その他植林、 その他植林（低木林）	0.37	10.4	3.31	10.4			2.94	9.2
5	メダケ群落、クズ群落、 チガヤーススキ群落	0.36	10.0	1.45	4.6			1.09	3.4
4	ゴルフ場・芝地、 路傍・空地雑草群落	0.03	0.8	2.32	7.3			2.29	7.2
3	ホウライチク・ホテイチク林、 残存・植栽樹群をもった公園、 墓地等、残存・植栽樹群地	0.04	1.0	4.39	13.8			4.35	13.7
2	外来種二次草原			0.70	2.2			0.70	2.2
1	市街地、工場地帯、造成地、 緑地 ^{注2)}	2.81	77.8	12.41	39.0	3.60	100	13.21	41.5
W	開放水域	0.00	0.1	7.28	22.9			7.28	22.8
合計		3.60	100	31.86	100	3.60	100	31.86	100

注1) 面積及び比率は、四捨五入の関係で合計が一致しないことがある。

注2) 現状では土地利用計画における詳細な緑地区分(植栽樹林、芝地等)が未確定であることから、「緑地」はすべて植生自然度1とした。

表 7-2-7. 19 植生自然度の変化についての予測結果

確認状況	現地調査において、対象事業実施区域内で植生自然度6が0.37ha、植生自然度5が0.36ha、植生自然度4が0.03ha、植生自然度3が0.04ha、植生自然度1が2.81ha確認された。
予測結果 (工事中)	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、対象事業実施区域内においては、植生自然度6が0.37ha(予測地域内の1.2%)、植生自然度5が0.36ha(予測地域内の1.1%)、植生自然度4が0.03ha(予測地域内の0.1%)、植生自然度3が0.04ha(予測地域内の0.1%)消失するものの、これらを構成する植物群落は予測地域内に残存している。 また、現況において対象事業実施区域内は植生自然度1が多くを占めており、植生自然度の変化は小さいことから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害等の影響が考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行う等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。
予測結果 (供用時)	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生育環境の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては、地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めるほか、敷地面積の20%以上を緑地とする等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。

③ 環境保全措置

本事業では、切土又は盛土、工作物の撤去又は廃棄、仮設工事、基礎工事、施設の設置工事並びに施設の存在等に伴う植物への影響を低減するために、次のような措置を講じる計画である。

【計画段階で配慮し、予測に反映されている環境保全措置】

- ・「千葉県自然環境保全条例」及び「習志野市自然保護及び緑化の推進に関する条例」に準じた緑化に努め、敷地面積の20%（0.72ha）以上を緑地とする。
- ・植栽する樹種は、対象事業実施区域の立地条件を考慮し、地域の潜在自然植生に即した樹種など適切な樹種の選定に努める。

④ 評 価

ア．評価の手法

植物の評価は、予測結果を基に以下に示す事項について、事業者により実行可能な範囲内で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているかどうかを検討することにより評価した。

- ・植物相の保全
- ・重要な種の分布
- ・植物群落
- ・植生自然度

イ．評価の結果

植物相の保全、重要な種の分布、植物群落、植生自然度に対する、環境保全措置の実施方法等について検討した結果、「③ 環境保全措置」に示す措置を講じることから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているものと評価する。

7-2-8 動 物

1. 工事の実施・土地又は工作物の存在及び供用

(1) 切土又は盛土、工作物の撤去又は廃棄、仮設工事、基礎工事、施設の設置工事並びに施設の存在等に伴う動物

① 調 査

ア. 調査すべき情報

(ア) 動物の現況

- ・哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類及び昆虫類その他主な動物に関する動物相の状況
- ・重要な種及び注目すべき生息地の分布、生息の状況及び生息環境の状況

(イ) 指定・規制の状況

イ. 調査地域

調査地域は、事業の実施が動物へ影響を及ぼすおそれのある範囲として、直接改変や騒音・振動による影響等を勘案し、対象事業実施区域の敷地境界から概ね200mの範囲とした。なお、猛禽類に関しては行動圏が広いことから、対象事業実施区域より2.0kmの範囲を対象とした。

文献等の収集は「第3章 対象事業実施区域及びその周囲の概況」で把握した範囲と同様とした。

ウ. 調査地点等

対象事業実施区域は臨海部の埋立地に位置しており、調査地域は市街地や工業地帯、開放水域等で構成されている。また、対象事業実施区域内や隣接する公園、事業所内及びその敷地境界等には植栽された樹林や草地等がみられる。

調査地点は表 7-2-8.1及び図 7-2-8.1に示すとおり、これらの状況を踏まえた動物相を適切に把握できるように調査地点を設定したほか、調査地域内を任意に踏査し、動物の状況を全体的に把握した。

また、猛禽類の調査地点は表 7-2-8.1及び図 7-2-8.2に示すとおり、対象事業実施区域及びその周辺で見通しの良い6地点を定点として選定し、出現状況等に応じて3地点/回を使用した。

表 7-2-8.1 動物調査地点の概要

調査地点	調査方法	選定理由
地点 1	鳥 類：ポイントセンサス法	対象事業実施区域内に生息する鳥類の生息状況を確認する地点として設定した。
地点 1-1	昆虫類：ライトトラップ法	対象事業実施区域内の北側（植栽）に生息する昆虫類の生息状況を確認する地点として設定した。
地点 1-2	哺乳類：トラップ法 自動撮影法 昆虫類：ベイトトラップ法 ライトトラップ法	対象事業実施区域内の南側（メダケ群落）に生息する哺乳類及び昆虫類の生息状況を確認する地点として設定した。
地点 2	哺乳類：トラップ法 自動撮影法 昆虫類：ベイトトラップ法 ライトトラップ法	対象事業実施区域西側に位置する残存・植栽樹群をもった公園、墓地等に生息する哺乳類及び昆虫類の生息状況を確認する地点として設定した。
地点 3		対象事業実施区域東側に位置する工場地帯に生息する哺乳類及び昆虫類の生息状況を確認する地点として設定した。
地点 1	猛禽類：生息状況調査	対象事業実施区域内の現清掃工場の屋上に位置し、対象事業実施区域周辺の上空を広く視認することができる地点として設定した。
地点 2		対象事業実施区域北西側に位置し、主に谷津干潟周辺及びその上空を広く視認することができる地点として設定した。
地点 3		対象事業実施区域南東側に位置し、対象事業実施区域東側上空を広く視認することができる地点として設定した。
地点 3 [*]		対象事業実施区域南東側に位置し、現清掃工場、旧清掃工場及び対象事業実施区域東側から南側上空を広く視認することができる地点として設定した。
地点 4		対象事業実施区域南西側に位置し、現清掃工場、旧清掃工場及び対象事業実施区域南側から北西側上空を広く視認することができる地点として設定した。
地点 5		対象事業実施区域北東側に位置し、対象事業実施区域北側上空を視認することができる地点として設定した。

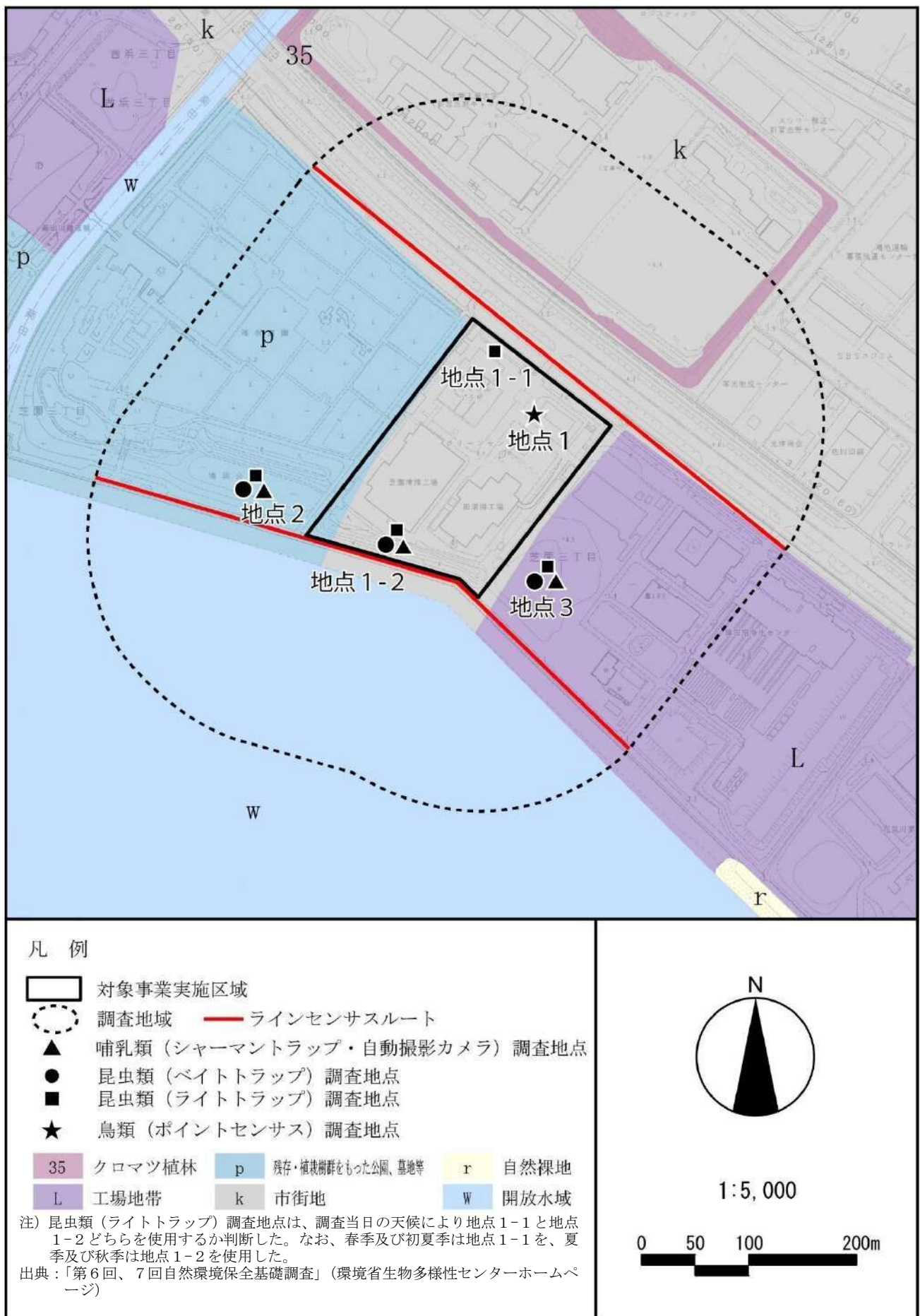


図 7-2-8.1 動物調査地点

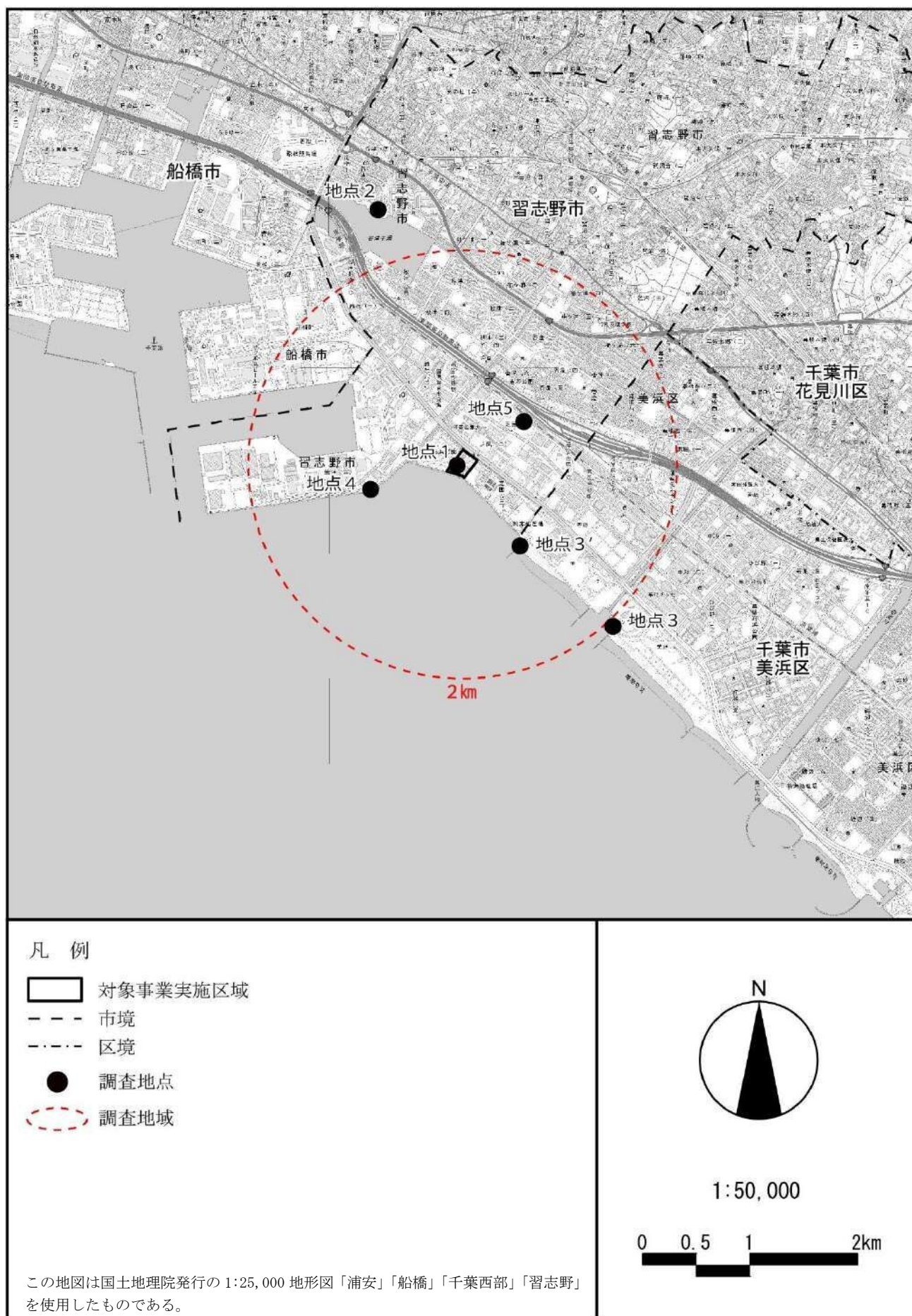


図 7-2-8.2 猛禽類調査地点

エ. 調査手法

文献等の資料収集により情報を整理した上で、区分された生息環境を網羅するように現地調査を行い、動物相の現況を把握・解析してとりまとめを行った。

現地調査の手法やとりまとめ方法については、以下に示すとおりである。

(ア) 哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類及び昆虫類その他主な動物に関する動物相の状況

i 哺乳類

任意観察法及びフィールドサイン法、トラップ法、自動撮影法により哺乳類相を把握した。現地調査の結果は哺乳類確認種リスト及び哺乳類相の概要としてとりまとめた。

(i) 任意観察法及びフィールドサイン法

調査地域を任意に踏査し個体の目撃及び鳴き声、また、死体、足跡、糞、食痕など生息の根拠となるフィールドサインの確認・記録し、生息種を把握した。

(ii) トラップ法

小型哺乳類を対象に罠（トラップ）を設置し、捕獲調査を行った。調査はシャーマントラップを一晩設置し、翌日回収する手法によった。捕獲した個体については種の同定及び体長・体重等の計測を行った後、放すこととした。

シャーマントラップは、樹林及び草地等といった生息環境を網羅するように設置地点を設けた。

(iii) 自動撮影法

自動撮影カメラを設置し、自動撮影（所定の範囲内に野生動物が通過すると、赤外線センサーが検知し、シャッターとフラッシュが作動する仕組みとなっている）を行い、生息している哺乳類を把握した。なお、自動撮影カメラは1回あたり2晩設置した。

(iv) バットディテクター法

日没から夜間に調査地域を任意に踏査し、バットディテクターを用いてコウモリ類の生息状況を把握した。

ii 鳥類（猛禽類を除く）

任意観察法、ラインセンサス法及びポイントセンサス法により鳥類相を把握した。現地調査の結果は鳥類確認種リスト及び鳥類相の概要としてとりまとめた。

また、猛禽類調査の際に対象事業実施区域内で繁殖が確認されたチョウゲンボウについて、補足的に生息・繁殖状況の確認に努めた。

(i) 任意観察法

調査地域を踏査し、鳥類の種類と繁殖行動等を記録した。鳥類の識別は目視及び双眼鏡により行った。

(ii) ラインセンサス法

調査地域の各環境区分が網羅できるように、予め設定したルート（ライン）を時速1～2km程度の速度で歩行し、鳥類の種類、個体数等を記録した。鳥類の識別は目視及び双眼鏡により行い、目視が困難な場合は鳴声による同定も併せて行った。

(iii) ポイントセンサス法

調査地域を広く観察できるよう、予め設定した地点（定点）において、一定時間に確認された鳥類の種類、個体数等を記録した。鳥類の識別は目視及び双眼鏡又は望遠鏡により行った。

iii 猛禽類

猛禽類（チョウゲンボウ）の生息状況調査や営巣場所調査等によって対象事業実施区域及びその周辺約2.0kmの範囲の生息状況及び繁殖状況を把握した。現地調査の結果は猛禽類確認種リスト及び猛禽類の概要としてとりまとめた。

(i) 生息状況調査

猛禽類の調査は、環境省の調査指針である「猛禽類保護の進め方（改訂版）（特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて）」（平成24年 環境省）等を参考に、複数定点における同時観測により、調査範囲における猛禽類の生息・分布状況を把握した。

調査手法は、各定点において調査員が終日双眼鏡や望遠鏡を用いて観察を行い、出現した個体について地図上にその位置を示し、以下に示す行動内容等を確認・記録した。また、各調査定点間は無線の使用により情報を共有し、個体確認及び行動範囲推定の精度を高めた。

- ・ 飛翔方向
- ・ 出現・消失時刻
- ・ 行動形態（ディスプレイ、狩り、止まり、旋回、滑空等）
- ・ 個体情報（成鳥と幼鳥の区別、雌雄の区別、風切羽の欠損等、個体識別につながる可能な限りの情報）

iv 爬虫類

調査地域を任意に踏査して目撃、捕獲、フィールドサイン（死体や抜け殻等）により爬虫類相を把握した。現地調査の結果は爬虫類確認種リスト、爬虫類相の概要としてとりまとめた。

v 両生類

調査地域を任意に踏査して目撃、捕獲、鳴き声、フィールドサイン（死体や抜け殻等）により両生類相を把握した。現地調査の結果は両生類確認種リスト、両生類相の概要としてとりまとめた。

vi 昆虫類

任意採集法、ベイトトラップ法、ライトトラップ法により昆虫類相を把握した。現地調査の結果は昆虫類確認種リスト、昆虫類相の概要としてとりまとめた。

(i) 任意採集法

調査地域内を踏査し、捕虫網を用いた見つけ捕りのほか、ビーティング法（樹木の枝や葉を棒で叩き、1 m四方程度の白布等で落下する昆虫を採集する方法）やスィーピング法（樹木や草本の葉を捕虫網で掬って昆虫を採集する方法）によって昆虫類を採集する手法及びチョウ・トンボ類を目視により確認する手法によった。

(ii) ベイトトラップ法

地表徘徊性の昆虫類を確認するため、誘引餌を利用した誘引採集（ベイトトラップ）による調査を行った。調査は誘引餌を入れたプラスチックカップ等を1地点に20個地表面に埋め込み、容器に落下した昆虫を採集する手法によった。トラップは1晩設置した後に回収し、捕獲された昆虫類の同定に供した。トラップの設置は、樹林地及び草地等といった生息環境を網羅するように地点を設けた。

(iii) ライトトラップ法

ガ類や甲虫類等の夜行性の昆虫類を確認するため、光に集まる習性を利用したライトトラップ（カーテン法）による調査を実施した。調査時間は日の入り前から3時間とした。

vii その他無脊椎動物（陸産貝類、クモ類・多足類）

調査地域を任意に踏査して、任意採集法によりその他無脊椎動物相を把握した。現地調査の結果はその他無脊椎動物確認種リスト、その他無脊椎動物相の概要としてとりまとめた。

(イ) 重要な種及び注目すべき生息地の分布、生息の状況及び生息環境の状況

重要な種の選定については国及び千葉県のレッドリスト等を参考に選定した。

現地調査において確認された重要な種について、その分布状況及び生息状況を記録するとともに、生息環境についても記録を行った。また、集団繁殖地等が確認された場合も、その位置と対象動物種及び繁殖の状況について記録を行った。

(ウ) 指定・規制の現況

調査地域における自然環境に関する指定・規制について既存文献を収集・整理した。

オ. 調査期間

調査期間は、動物の生息の特性を踏まえ、表 7-2-8.2(1)、(2)に示すとおりとした。

表 7-2-8.2(1) 動物調査実施日

調査項目	調査手法	調査季節	調査日
哺乳類	任意観察法 フィールドサイン法 トラップ法	冬季	令和6年1月29日(月)～1月30日(火)
		春季	令和6年4月22日(月)～4月23日(火)
		夏季	令和6年7月29日(月)～7月30日(火)
		秋季	令和6年10月28日(月)～10月29日(火)
	自動撮影法	冬季	令和6年1月29日(月)～1月31日(水)
		春季	令和6年4月22日(月)～4月24日(水)
		夏季	令和6年7月29日(月)～7月31日(水)
		秋季	令和6年10月28日(月)～10月30日(水)
	バットディテクター法	春季	令和6年4月22日(月)
		夏季	令和6年7月29日(月)
		秋季	令和6年10月28日(月)
鳥類 (猛禽類を除く)	任意観察法 ラインセンサス法 ポイントセンサス法	冬季	令和6年1月29日(月)
		春季	令和6年4月23日(火)
		初夏	令和6年6月12日(水)
		夏季	令和6年7月30日(火)
		秋季	令和6年10月29日(火)
猛禽類	生息状況調査	3月	令和5年3月29日(水)～3月30日(木)
		4月	令和5年4月13日(木)～4月14日(金)
		5月	令和5年5月8日(月)～5月9日(火)
		6月	令和5年6月1日(木)～6月6日(火)
		7月	令和5年7月10日(月)～7月11日(火)
		8月	令和5年8月7日(月)～8月8日(火)
		9月	令和5年9月11日(月)～9月12日(火)
		10月	令和5年10月2日(月)～10月3日(火)
		11月	令和5年11月6日(月)～11月7日(火)
		12月	令和5年12月4日(月)～12月5日(火)
		1月	令和6年1月11日(木)～1月12日(金)
		2月	令和6年2月7日(水)～2月8日(木)
爬虫類・両生類	任意観察法	春季	令和6年4月22日(月)～4月23日(火)
		初夏	令和6年6月11日(火)～6月12日(水)
		夏季	令和6年7月29日(月)～7月30日(火)
		秋季	令和6年10月28日(月)～10月29日(火)
昆虫類	任意採集法	春季	令和6年4月22日(月)～4月23日(火)
		初夏	令和6年6月11日(火)～6月12日(水)
		夏季	令和6年7月26日(金)
		秋季	令和6年10月28日(月)～10月29日(火)

表 7-2-8.2(2) 動物調査実施日

調査項目	調査手法	調査季節	調査日
昆虫類	ベイトトラップ法	春季	令和6年4月22日(月)～4月23日(火)
		初夏季	令和6年6月11日(火)～6月12日(水)
		夏季	令和6年7月29日(月)～7月30日(火)
		秋季	令和6年10月28日(月)～10月29日(火)
	ライトトラップ法	春季	令和6年4月22日(月)
		初夏季	令和6年6月11日(火)
		夏季	令和6年7月29日(月)
		秋季	令和6年10月29日(火)
その他 無脊椎動物	任意採集法	春季	令和6年4月22日(月)～4月23日(火)
		初夏季	令和6年6月11日(火)～6月12日(水)
		夏季	令和6年7月26日(金)
		秋季	令和6年10月28日(月)～10月29日(火)

カ. 調査結果

(ア) 哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類及び昆虫類その他主な動物に関する動物相の状況

i 哺乳類

哺乳類の現地調査結果は、表 7-2-8.3に示すとおりであり、調査地域内では2目2科2種の哺乳類が確認された。

対象事業実施区域内では、2目2科2種の哺乳類が確認された。対象事業実施区域内の南側のメダケ群落でタヌキの糞が確認されたほか、バットディテクター法ではアブラコウモリが確認された。

対象事業実施区域外では、2目2科2種の哺乳類が確認された。対象事業実施区域外の南東側の草地でタヌキの糞が確認されたほか、バットディテクター法ではアブラコウモリが確認された。

なお、トラップ法及び自動撮影法による調査では、哺乳類は確認されなかった。

表 7-2-8.3 哺乳類確認種

No.	目名	科名	和名	学名	対象事業 実施区域		確認時期			
					内	外	冬季	春季	夏季	秋季
1	コウモリ	ヒナコウモリ	アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i>	●	●		●	●	●
2	ネコ	イヌ	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	●	●	●			
計	2目	2科	2種	-	2種	2種	1種	1種	1種	1種

注) 分類及び配列は、「種の多様性調査(動物分布調査)対象種一覧」(環境省ホームページ)に準拠した。

ii 鳥類（猛禽類を除く）

鳥類の現地調査結果は、表 7-2-8.4(1)、(2)に示すとおりであり、調査地域内では12目31科66種の鳥類が確認された。

対象事業実施区域内では、5目15科20種の鳥類が確認された。対象事業実施区域内の南側のクロマツ植林でハシボソガラスの営巣が、人工構造物ではスズメやムクドリの営巣が確認された。

対象事業実施区域外では、10目28科58種の鳥類が確認された。対象事業実施区域外の南側の海域ではオカヨシガモ、ヒドリガモ、スズガモ等のカモ類、ユリカモメ、ウミネコ等のカモメ類、カンムリカイツブリ、オオバン等が確認された。対象事業実施区域外の西側及び南東側の草地、北側の周辺道路の植栽等ではムクドリ、ヒヨドリ、メジロ等が確認された。なお、ポイントセンサス法・ラインセンサス法の調査結果は、資料編（資料7-1）に示す。

表 7-2-8.4(1) 鳥類（猛禽類を除く）確認種

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業 実施区域		確認時期				
					内	外	冬季	春季	初夏	夏季	秋季
1	カモ	カモ	オカヨシガモ	<i>Mareca strepera</i>		●	●				●
2			ヨシガモ	<i>Mareca falcata</i>		●	●				
3			ヒドリガモ	<i>Mareca penelope</i>		●	●				●
4			カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>	●	●	●			●	●
5			マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>		●	●				
6			オナガガモ	<i>Anas acuta</i>		●	●				
7			コガモ	<i>Anas crecca</i>		●	●	●			●
8			ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i>		●	●				●
9			キンクロハジロ	<i>Aythya fuligula</i>		●	●				
10			スズガモ	<i>Aythya marila</i>		●	●	●			●
11			ホオジロガモ	<i>Bucephala clangula</i>		●	●				
12	カッコウ	カッコウ	ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>		●			●		
13	ハト	ハト	ドバト	<i>Columba livia var. domestica</i>	●	●	●	●	●	●	●
14			キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	●	●	●	●	●	●	●
15	ツル	クイナ	オオバン	<i>Fulica atra</i>		●	●	●			●
16	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>		●	●				
17			カンムリカイツブリ	<i>Podiceps cristatus</i>		●	●	●			●
18			ハジロカイツブリ	<i>Podiceps nigricollis</i>		●	●				
19	チドリ	チドリ	コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>		●			●		
20		シギ	キョウジョシギ	<i>Arenaria interpres</i>		●		●			
21			イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i>		●	●	●		●	●
22			キアシシギ	<i>Tringa brevipes</i>		●				●	
23		カモメ	ユリカモメ	<i>Chroicocephalus ridibundus</i>		●	●	●			●
24			ウミネコ	<i>Larus crassirostris</i>		●			●	●	●
25			セグロカモメ	<i>Larus vegae</i>		●	●	●			●
26			オオセグロカモメ	<i>Larus schistisagus</i>		●	●				●
27	カツオドリ	ウ	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	●	●	●	●	●	●	●
28	ペリカン	サギ	アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>		●	●	●		●	●
29			ダイサギ	<i>Ardea alba</i>	●	●		●	●	●	●
30			チュウサギ	<i>Ardea intermedia</i>		●				●	
31			コサギ	<i>Egretta garzetta</i>		●	●				
32	キツツキ	キツツキ	コゲラ	<i>Yungipicus kizuki</i>		●			●		●

注) 分類及び配列は、「日本鳥類目録 改訂第8版」(令和6年9月 日本鳥学会)に準拠した。

表 7-2-8.4(2) 鳥類（猛禽類を除く）確認種

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業 実施区域		確認時期				
					内	外	冬季	春季	初夏季	夏季	秋季
33	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>		●		●			
34		モズ	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>		●	●				●
35		カラス	オナガ	<i>Cyanopica cyanus</i>	●	●	●	●	●		●
36			ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	●	●	●	●	●	●	●
37			ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	●	●	●	●	●	●	●
38		シジュウカラ	シジュウカラ	<i>Parus cinereus</i>	●	●	●	●	●	●	●
39		ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	●	●	●	●	●	●	●
40		ツバメ	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	●	●		●	●	●	
41		ウグイス	ウグイス	<i>Horornis diphone</i>		●	●				
42		エナガ	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>		●			●		●
43		セッカ	セッカ	<i>Cisticola juncidis</i>		●		●	●	●	
44		メジロ	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	●	●	●	●	●	●	●
45		ムクドリ	ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>	●	●	●	●	●	●	●
46		ツグミ	マミチャジナイ	<i>Turdus obscurus</i>		●					●
47			シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>		●	●	●			
48			アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>		●	●				●
49			ツグミ	<i>Turdus eunomus</i>	●	●	●	●			●
50		ヒタキ	ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureus</i>		●	●				●
51			イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>		●	●				●
52		スズメ	スズメ	<i>Passer montanus</i>	●	●	●	●	●	●	●
53		セキレイ	ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	●	●	●	●	●	●	●
54			セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>		●				●	
55			タヒバリ	<i>Anthus rubescens</i>		●	●				
56		アトリ	シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	●	●					●
57			カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>	●	●	●	●	●	●	●
58		ホオジロ	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	●		●				
59			アオジ	<i>Emberiza personata</i>	●	●	●	●			●
計	10 目	28 科	59 種	-	20 種	58 種	44 種	29 種	21 種	22 種	38 種

注) 分類及び配列は、「日本鳥類目録 改訂第8版」(令和6年9月 日本鳥学会)に準拠した。

iii 猛禽類

猛禽類の生息状況調査結果は、表 7-2-8.5に示すとおりであり、調査地域内では3科8種の猛禽類が確認された。

猛禽類の生息状況調査により最も多く確認された猛禽類はチョウゲンボウ（合計198例）であり、続いてトビ、ミサゴ、ハイタカの順で確認例数が多かった。

チョウゲンボウは調査時期に関わらず、対象事業実施区域及びその周辺で複数個体の生息が確認された。また、対象事業実施区域外の西側及び南東側の草地では採餌行動や採餌行動が確認され、対象事業実施区域周辺の草地等を採餌環境として利用しているものと考えられた。

なお、令和5年3月～12月の期間（以下、「令和5年シーズン」という。）及び令和6年1月～鳥類調査の期間（以下、「令和6年シーズン」という。）において、対象事業実施区域内の旧清掃工場及び現清掃工場の2箇所でチョウゲンボウが繁殖していることが確認された。繁殖しているペアは、それぞれ旧工場ペア及び現工場ペアとし、各ペアの確認状況の詳細は次頁以降に示す。

表 7-2-8.5 猛禽類確認種

No.	科名	種名	確認時期												合計
			令和 5 年										令和 6 年		
			3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	
1	ミサゴ	ミサゴ				1		2		1	1	2	1	4	12
2	タカ	ハチクマ				1									1
3		ハイタカ	4									1	2	4	11
4		オオタカ	2							1					3
5		トビ	1			1		1	2	4	5	3	3		20
6		ノスリ	2										3	3	8
7	ハヤブサ	チョウゲンボウ	16	24	25	35	8	16	13	11	7	3	15	25	198
8		ハヤブサ									1				1
計	3 科	8 種	5種	1種	1種	4種	1種	3種	2種	4種	4種	4種	5種	4種	8種

注）分類及び配列は、「日本鳥類目録 改訂第8版」（令和6年9月 日本鳥学会）に準拠した。

(iv) 旧工場ペア

旧工場ペアの月別指標行動は表 7-2-8.6に、営巣地は図 7-2-8.3に示すとおりである。

令和5年3月調査及び4月調査において旧清掃工場付近で交尾が確認されたほか、ドバトやカラス等の他種に対する攻撃等の繁殖を示唆する行動が確認された。また、令和5年6月調査において旧清掃工場の東側壁面のダクト内で1羽の幼鳥が確認されたことから、令和5年シーズンは対象事業実施区域内で繁殖したと判断した。

翌年には、令和6年1月調査及び2月調査において交尾が確認されたほか、令和6年6月に実施した初夏季の鳥類調査において、巣立ち幼鳥が確認されたこと及びダクト出入口に羽毛が付着している状況から、令和6年シーズンも対象事業実施区域内で繁殖したと判断した。

対象事業実施区域及びその周辺の利用状況として、対象事業実施区域外の西側及び南東側の草地において探餌、狩り、餌運びが多く確認されている。なお、餌の内容は、主にカナヘビ・トカゲ類、小鳥類、バッタ類が多かった。

表 7-2-8.6 旧工場ペアの月別指標行動

調査月	指標行動の確認例数											
	ディスプレイ	旋回	餌運び	巣材運び	探餌	とまり	攻撃	狩り	交尾	旋回上昇	鳴き声	雛・幼鳥
令和5年3月			2		1	9	2	2	6	1		
令和5年4月					4	29	2	4	4			
令和5年5月			4			24	1					
令和5年6月			2		1	10	2					1
令和5年7月					7	7		2				
令和5年8月						10						
令和5年9月			2		1	10	2	2				
令和5年10月	指標行動確認なし											
令和5年11月						3						
令和5年12月	指標行動確認なし											
令和6年1月						12	1		5			
令和6年2月		7				19	4		2			

(v) 現工場ペア

現工場ペアの月別指標行動は表 7-2-8. 7に、営巣地は図 7-2-8. 3に示すとおりである。

令和5年6月調査において、現清掃工場の西側壁面のダクト内で2羽の幼鳥が確認されたことから、令和5年シーズンは対象事業実施区域内で繁殖したと判断した。

非繁殖期にあたる令和5年7月調査から12月調査においては、対象事業実施区域及びその周辺環境の利用は確認されなかったものの、翌年の令和6年1月調査及び2月調査において、令和5年シーズンのダクトに出入りする雄成鳥が確認された。また、令和6年6月に実施した初夏季の鳥類調査において、ダクト内で3羽の幼鳥が確認されたことから、令和6年シーズンも対象事業実施区域内で繁殖したと判断した。

対象事業実施区域及びその周辺で狩りや餌運びは確認されなかったものの、対象事業実施区域西側での飛翔が多く確認されていることから、対象事業実施区域外の西側の草地を採餌環境にしていると考えられた。

表 7-2-8. 7 現工場ペアの月別指標行動

調査月	指標行動の確認例数											
	ディスプレイ	旋回	餌運び	巣材運び	探餌	とまり	攻撃	狩り	交尾	旋回上昇	鳴き声	雛・幼鳥
令和5年6月			1		1	11						2
令和6年1月		1	3			11	1		1			
令和6年2月		1				12	2			1		

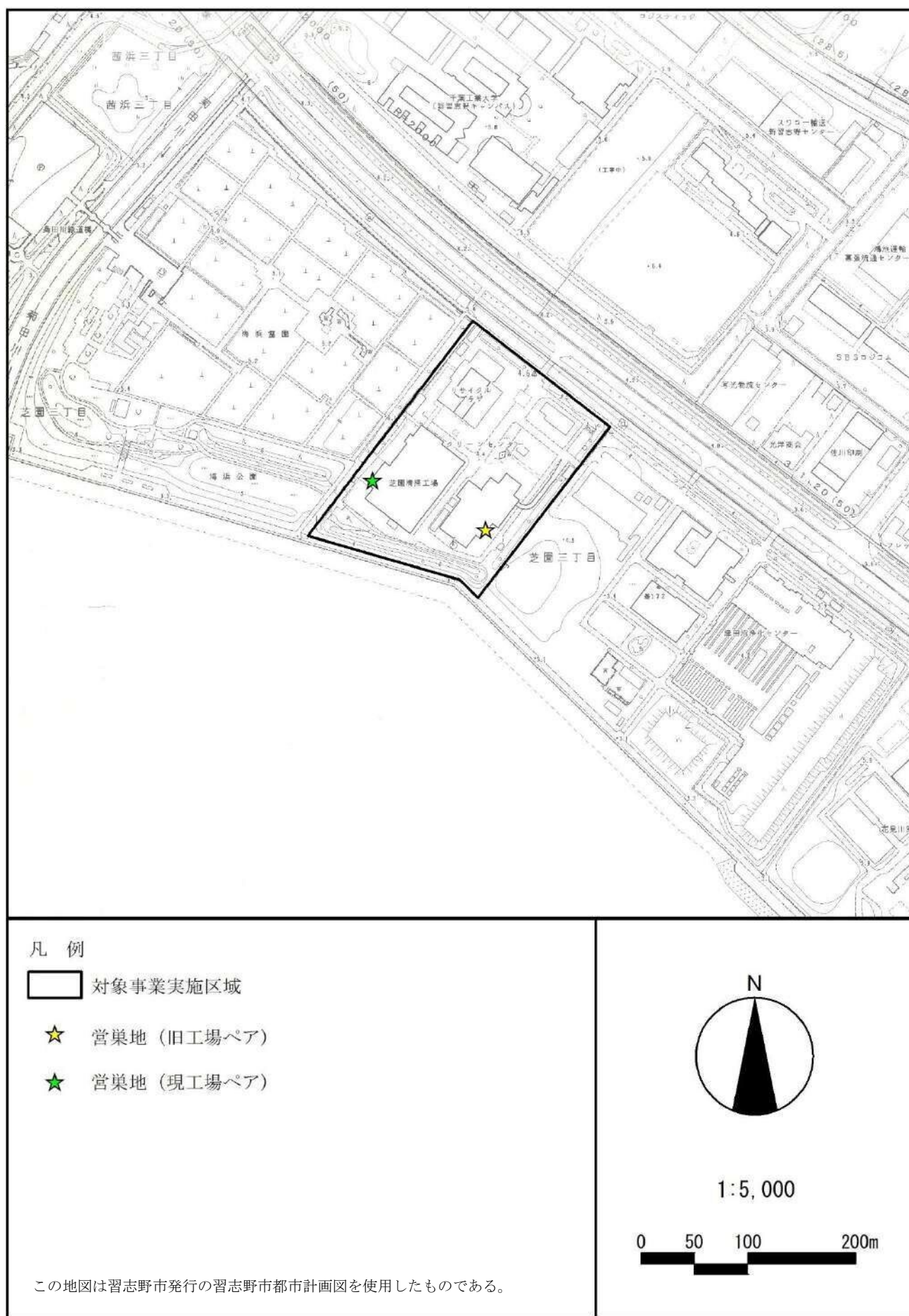


図 7-2-8.3 営巣地（ダクト）位置図

iv 爬虫類

爬虫類の現地調査結果は、表 7-2-8.8に示すとおりであり、調査地域内では2目6科6種の爬虫類が確認された。

対象事業実施区域内では、2目5科5種の爬虫類が確認された。対象事業実施区域内の人工池ではクサガメ、ミシシippアカミミガメ等の外来の飼育個体が確認された。また、初夏季には人工構造物の外壁にアオダイショウの幼体が確認された。

対象事業実施区域外では、1目2科2種の爬虫類が確認された。対象事業実施区域外の西側の草地では、ニホンヤモリの死体が確認されたほか、調査地域全域でニホンカナヘビが確認された。

表 7-2-8.8 爬虫類確認種

No.	目名	科名	和名	学名	対象事業 実施区域		確認時期			
					内	外	春季	初夏季	夏季	秋季
1	カメ	イシガメ	クサガメ	<i>Mauremys reevesii</i>	●		●	●	●	●
2		ヌマガメ	ミシシippアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>	●		●	●	●	●
-		カメ目 ^{注2)}	-	<i>Testudinata</i>	●		●	●	●	●
3	有鱗	ヤモリ	ニホンヤモリ	<i>Gekko japonicus</i>		●		●		
4		トカゲ	ヒガシニホントカゲ	<i>Plestiodon finitimus</i>	●		●		●	●
5		カナヘビ	ニホンカナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i>	●	●	●	●	●	●
6		ナミヘビ	アオダイショウ	<i>Elaphe climacophora</i>	●			●		
計	2目	6科	6種		5種	2種	4種	5種	4種	4種

注1) 分類及び配列は、「日本産爬虫両生類標準和名リスト (2024年3月11日版)」(令和6年3月 日本爬虫両棲類学会)に準拠した。

注2) 交雑個体等をまとめてカメ目とした。

v 両生類

両生類の現地調査結果は、表 7-2-8.9に示すとおりであり、調査地域内では1目1科1種の両生類が確認された。

対象事業実施区域内では、両生類は確認されなかった。

対象事業実施区域外では、1目1科1種の両生類が確認された。対象事業実施区域外の南東側の草地の水たまりでニホンアカガエルの幼生が確認された。

表 7-2-8.9 両生類確認種

No.	目名	科名	和名	学名	対象事業 実施区域		確認時期			
					内	外	春季	初夏季	夏季	秋季
1	無尾	アカガエル	ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i>		●	●			
計	1目	1科	1種		0種	1種	1種	0種	0種	0種

注) 分類及び配列は、「日本産爬虫両生類標準和名リスト (2024年3月11日版)」(令和6年3月 日本爬虫両棲類学会)に準拠した。

vi 昆虫類

昆虫類の現地調査結果（概要）は、表 7-2-8. 10に示すとおりであり、調査地域内では11目122科424種が確認された。

対象事業実施区域内では、11目81科198種の昆虫類が確認された。草地では、クビキリギス、ショウリョウバッタ等のバッタ目、クロアシホソナガカメムシ、ウズラカメムシ等のカメムシ目が確認された。また、植栽では、アブラゼミ、ミンミンゼミ等のセミ類、ハラビロカマキリ、シロテンハナムグリ、クロカミキリ等が確認された。

対象事業実施区域外では、11目115科357種の昆虫類が確認された。対象事業実施区域外の南西側の草地では、ヒメギス、オンブバッタ、ショウリョウバッタモドキ等のバッタ目、イネカメムシ、ウズラカメムシ等のイネ科草本を食草とするカメムシ目等が確認された。そのほか、西側の公園では、ハマベヒメサビキコリ、ホソケシマグソコガネ等の海岸性の種が確認された。なお、確認種一覧及びベイトトラップ法・ライトトラップ法の調査結果は、資料編（資料7-2）に示す。

表 7-2-8. 10 昆虫類確認種（概要）

No.	目名	対象事業実施区域				合計		代表的な種
		内		外				
		科数	種数	科数	種数	科数	種数	
1	トンボ	1	2	2	5	2	5	シオカラトンボ
2	ゴキブリ	2	2	2	1	2	2	クロゴキブリ
3	カマキリ	1	1	1	2	1	2	ハラビロカマキリ
4	シロアリ	1	1	0	0	1	1	ヤマトシロアリ
5	バッタ	6	13	6	22	6	24	ショウリョウバッタモドキ
6	カメムシ	19	39	27	66	28	83	イネカメムシ
7	アミメカゲロウ	1	3	2	7	2	8	カオマダラクサカゲロウ
8	コウチュウ	15	57	19	90	21	112	クロカミキリ
9	ハチ	5	20	12	31	13	38	二ホンミツバチ
10	ハエ	17	27	26	51	27	54	ハグロケバエ
11	チョウ	13	33	19	82	19	95	キタテハ
計	11 目	81 科	198 種	115 科	357 種	122 科	424 種	－

注) 分類及び配列は、基本的に「日本産野生生物目録 無脊椎動物編Ⅱ」(平成7年6月 環境庁)に準拠したが、その後、和名や学名等が変更された種については、最新の文献や図鑑等に基づいて修正した。

vii その他無脊椎動物（陸産貝類、クモ類・多足類）

その他無脊椎動物（陸産貝類）の現地調査結果は、表 7-2-8.11に示すとおりである。

調査地域内では、1目5科6種の陸産貝類が確認された。

対象事業実施区域内では1目3科4種、対象事業実施区域外では1目4科5種の陸産貝類が確認された。

表 7-2-8.11 その他無脊椎動物（陸産貝類）確認種

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業 実施区域		確認時期			
					内	外	春季	初夏	夏季	秋季
1	マイマイ (柄眼)	オカチョウジガイ	オカチョウジガイ	<i>Allopeas clavulinum kyotoense</i>			●			
2		コハクガイ	コハクガイ	<i>Zonitoides arboreus</i>	●	●	●	●		●
3		コウラナメクジ	チャコウラナメクジ	<i>Limax marginatus</i>	●	●	●	●	●	●
4		シタラ	ヒメベッコウガイ	<i>Discoconulus sinapidium</i>		●		●		
5		ナンバンマイマイ	オナジマイマイ	<i>Bradybaena similaris</i>	●	●			●	●
6			ウスカワマイマイ	<i>Acusta despecta sieboldiana</i>	●	●	●	●		●
計	1目	5科	6種	—	4種	5種	4種	4種	2種	4種

注1) 分類及び配列は、基本的に「日本産野生生物目録無脊椎動物編Ⅲ」（平成10年12月 環境庁）に準拠した。

注2) 春季調査は確認種の記録のみとし、確認位置は記録していない。

その他無脊椎動物（クモ類・多足類）の現地調査結果は表 7-2-8.12(1)、(2)に示すとおりである。

調査地域内では、5目25科56種のクモ類・多足類が確認された。

対象事業実施区域内では、5目17科28種のクモ類・多足類が確認された。人工構造物の近くでイエユウレイグモやゲジ等が確認された。

対象事業実施区域外では、5目19科36種のクモ類・多足類が確認された。草地ではササグモやヤハズハエトリ等が、樹林地ではジョロウグモやハラコモリグモ等が確認された。また、対象事業実施区域外の南側の護岸上では、海岸性の種であるキタフナムシが確認された。

表 7-2-8. 12(1) その他無脊椎動物（クモ類・多足類）確認種

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業 実施区域		確認時期			
					内	外	春季	初夏	夏季	秋季
1	クモ	タマゴグモ	タマゴグモ科	Oonopidae	●	●			●	
2		ユウレイグモ	イエユウレイグモ	Pholcus phalangoides	●			●		
3		ヒメグモ	アシトヒメグモ	Anelosimus crassipes	●	●		●		
4			シロカネイソウロウグモ	Argyrodus bonadea		●			●	
5			セアカゴケグモ	Latrodectus hasselti	●				●	
6			オオヒメグモ	Parasteatoda tepidariorum	●			●	●	
—			オオヒメグモ属	Parasteatoda sp.		●	●	●		
—			ヒメグモ科	Theridiidae	●					●
7		コガネグモ	ヤエンオニグモ	Araneus macacus	●			●		
—			オニグモ属	Araneus sp.		●		●		
8			ナガコガネグモ	Argiope bruennichi	●	●		●	●	●
9			コガタコガネグモ	Argiope minuta	●			●		
10			ゴミグモ	Cyclosa octotuberculata		●		●	●	
11			マルゴミグモ	Cyclosa vallata		●			●	
12			ワキグロサツノミダシ	Neoscona mellottei	●	●			●	●
13			サツノミダシ	Neoscona scylloides	●	●		●		
14			ジョロウグモ	Trichonephila clavata	●	●			●	●
15		アシナガグモ	トガリアシナガグモ	Tetragnatha caudicula		●	●		●	
16			ヒカリアシナガグモ	Tetragnatha nitens		●		●		
17			アシナガグモ	Tetragnatha praedonia	●	●	●	●	●	●
18		サラグモ	コデーニツサラグモ	Doenitzius pruvus			●			
19			ニッポンケシグモ属	Nippononeta sp.	●	●			●	
—			サラグモ科	Linyphiidae	●	●		●	●	
20		タナグモ	クサグモ	Agelena silvatica	●	●		●	●	
21			ヤチグモ属	Coelotes sp.	●	●			●	
22		ナミハグモ	ナミハグモ属	Cybaeus sp.	●					●
23		ウシオグモ	クロガケジグモ	Badumna insignis	●					●
24		ササグモ	ササグモ	Oxyopes sertatus		●	●			●
25		コモリグモ	ハラクロコモリグモ	Lycosa coelestis		●				●
26			オオアシコモリグモ属	Pardosa sp.		●	●		●	
27			カイゾクコモリグモ属	Pirata sp.		●				●
28			ナミコモリグモ	Piratula yaginumai		●			●	
29			モリコモリグモ属	Xerolycosa sp.			●			
30		カニグモ	ハナグモ	Ebrechtella tricuspidata			●			
31			ワカバグモ	Oxytate striatipes	●	●	●		●	●
32			アズチグモ	Thomisus labefactus		●			●	
33			チュウカカニグモ	Xysticus ephippiatus	●				●	
34			アズマカニグモ	Xysticus insulicola		●			●	
—			カニグモ属	Xysticus sp.	●		●			●
35		フクログモ	マダラフクログモ	Clubiona deletrix			●			
—			フクログモ属	Clubiona sp.	●					●
36		ウラシマグモ	ヤバネウラシマグモ	Pennalithus pennatus		●			●	
37		ワシグモ	チャクロワシグモ	Cladothela oculinotata		●		●		
38		コマチグモ	コマチグモ属	Cheiracanthium sp.			●			
39		エビグモ	アサヒエビグモ	Philodromus subaureolus	●			●		
40		ハエトリグモ	ヤマジハエトリ	Asiellanellus festinus			●			
41			ネコハエトリ	Carrhotus xanthogramma		●		●		

注1) 分類及び配列は、基本的に「日本産土壌動物 第二版」(平成 27 年 2 月 東海大学出版部)に準拠した。

注2) 種名の「～科」「～属」等は、同科同属に属する種の確認がある場合、種数に計上しない。

注3) 春季調査は確認種の記録のみとし、確認位置は記録していない

表 7-2-8. 12(2) その他無脊椎動物（クモ類・多足類）確認種

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業 実施区域		確認時期			
					内	外	春季	初夏	夏季	秋季
42	クモ	ハエトリグモ	ヤハズハエトリ	<i>Mendoza elongata</i>	●	●		●	●	●
43			ヤガタアリグモ	<i>Myrmarachne elongata</i>	●				●	
44			アリグモ	<i>Myrmarachne japonica</i>		●		●		
45			クワガタアリグモ	<i>Myrmarachne kuwagata</i>			●			
46			ネオンハエトリグモ属	<i>Neon sp.</i>			●			
47			マガネアサヒハエトリ	<i>Phintella arenicolor</i>		●			●	
48			カラスハエトリ	<i>Rhene atrata</i>	●		●		●	
-			ハエトリグモ科	<i>Salticidae</i>	●	●	●		●	●
49	ゲジ	ゲジ	ゲジ	<i>Thereuonema tuberculata</i>	●	●	●	●	●	●
50			オオゲジ	<i>Thereuopoda clunifera</i>			●			
51	イシムカデ	イッスンムカデ	イッスンムカデ	<i>Bothropolys rugosus</i>		●			●	
52		イシムカデ	ヒトフシムカデ属	<i>Monotarsobius sp.</i>	●	●		●		●
53	オオムカデ	オオムカデ	アオズムカデ	<i>Scolopendra japonica</i>	●	●	●		●	●
54	ワラジムシ	フナムシ	キタフナムシ	<i>Ligia cinerascens</i>		●	●	●	●	●
55		ワラジムシ	ワラジムシ	<i>Porcellio scaber</i>	●	●	●	●	●	●
56		オカダンゴムシ	オカダンゴムシ	<i>Armadillidium vulgare</i>	●	●	●	●	●	●
計	5 目	25 科	56 種	-	28 種	36 種	20 種	21 種	31 種	17 種

注1) 分類及び配列は、基本的に「日本産土壌動物 第二版」(平成27年2月 東海大学出版部)に準拠した。

注2) 種名の「～科」「～属」等は、同科同属に属する種の確認がある場合、種数に計上しない。

注3) 春季調査は確認種の記録のみとし、確認位置は記録していない

(イ) 重要な種及び注目すべき生息地の分布、生息の状況及び生息環境の状況

i 選定根拠及び基準

重要な動物種の選定は、表 7-2-8.13に示す法令及び文献による評価を基準とした。

表 7-2-8.13 重要な動物種の選定根拠

選定根拠		選定基準
法令等 による 指定	①	「文化財保護法」(昭和 25 年 5 月 30 日 法律第 214 号)
	②	「千葉県文化財保護条例」(昭和 30 年 3 月 29 日 条例第 8 号)
	③	「習志野市文化財保護条例」(昭和 45 年 12 月 25 日 条例第 47 号) 「千葉市文化財保護条例」(昭和 33 年 10 月 7 日 条例第 18 号) 「船橋市文化財保護条例」(昭和 39 年 3 月 30 日 条例第 22 号)
	④	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律 (種の保存法)」(平成 4 年 6 月 5 日 法律第 75 号)
		・特別天然記念物(特天) ・国指定天然記念物(国天) ・県指定天然記念物(県天) ・市指定天然記念物(市天)
文献 による 指定	⑤	「環境省レッドリスト 2020」 (令和 2 年 3 月 27 日改訂 環境省報道発表資料)
	⑥	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドリスト 動物編(2019 年改訂版)」 (平成 29 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課)」
	⑦	「千葉市の保護上重要な野生生物ー千葉市レッドリストー」 (平成 16 年 5 月 千葉市)
		・国内希少野生動植物種(国内) ・国際希少野生動植物種(国際) ・特定第一種国内希少野生動植物種(特 1) ・特定第二種国内希少野生動植物種(特 2) ・緊急指定種(緊急)
		・絶滅(EX) ・野生絶滅(EW) ・絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN) ・絶滅危惧ⅠA類(CR) ・絶滅危惧ⅠB類(EN) ・絶滅危惧Ⅱ類(VU) ・準絶滅危惧(NT) ・情報不足(DD) ・地域個体群(LP)
		・消息不明・絶滅生物(X) ・最重要保護生物(A) ・重要保護生物(B) ・要保護生物(C) ・一般保護生物(D) ・情報不足
		・消息不明・絶滅生物(X) ・最重要保護生物(A) ・重要保護生物(B) ・要保護生物(C)

ii 哺乳類

確認された哺乳類のうち重要な種は表 7-2-8.14に示すとおり、1目1科1種であった。また、重要な種の確認状況は、表 7-2-8.15に示すとおりである。

なお、重要種保護の観点から詳細な確認位置は記載していない。

表 7-2-8.14 重要な種（哺乳類）

No.	目名	科名	種名	選定基準							確認位置 対象事業 実施区域		確認時期			
											内	外	冬季	春季	夏季	秋季
1	ネコ	イヌ	タヌキ							B	●	●	●			
計	1目	1科	1種	0種	0種	0種	0種	0種	0種	1種	1種	1種	1種	0種	0種	0種

表 7-2-8.15 重要な種の確認状況（哺乳類）

No.	種名	確認位置				主な確認状況	調査地域内における 繁殖可能性の有無
		対象事業実施区域					
		内		外			
		箇所数	例数	箇所数	例数		
1	タヌキ	1	1	1	1	対象事業実施区域内のメダケ群落及び対象事業実施区域外の南西側の草地で糞が確認された。	繁殖の可能性は低い

注) 箇所数：確認した地点数 例数：確認した個体数または痕跡数（動物は移動能力があり、重複の可能性があることから「例数」として表記した。）

iii 鳥類（猛禽類を除く）

確認された鳥類のうち重要な種は表 7-2-8. 16に示すとおり、7 目16科24種であった。

また、重要な種の確認状況は、表 7-2-8. 17に示すとおりである。

なお、重要種保護の観点から詳細な確認位置は記載していない。

表 7-2-8. 16 重要な種（鳥類（猛禽類を除く））

No.	目名	科名	種名	選定基準							確認位置		確認時期				
											対象事業 実施区域						
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	内	外	冬季	春季	初夏季	夏季	秋季
1	カモ	カモ	オカヨシガモ						C	C		●	●				●
2			ヨシガモ					B	B		●	●					
3			スズガモ					D	C		●	●	●			●	
4			ホオジロガモ					B			●	●					
5	カッコウ	カッコウ	ホトトギス						C	B		●			●		
6	ツル	クイナ	オオバン						C	C		●	●	●			●
7	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ						C	C		●	●				
8			カンムリカイツブリ					D	C		●	●	●			●	
9	チドリ	チドリ	コチドリ						B	B		●			●		
10		シギ	キョウジョシギ						C	B		●		●			
11			イソシギ					A	B		●	●	●		●	●	
12			キアシシギ					C	B		●				●		
13		カモメ	オオセグロカモメ					NT				●	●				●
14	ペリカン	サギ	ダイサギ						D	C	●	●		●	●	●	●
15			チュウサギ					NT	B	C		●				●	
16			コサギ						B	B		●	●				
17	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ					VU	X			●		●			
18		ツバメ	ツバメ							C	●	●		●	●	●	
19		ウグイス	ウグイス							C		●	●				
20		エナガ	エナガ							C		●			●		●
21		セッカ	セッカ						D	C		●		●	●	●	
22		メジロ	メジロ							C	●	●	●	●	●	●	●
23		セキレイ	セグロセキレイ							C		●				●	
24		ホオジロ	ホオジロ							C	B	●		●			
計	7 目	16科	24種	0種	0種	0種	0種	3種	18種	21種	4種	22種	13種	10種	7種	8種	9種

注 1) 選定基準は表 7-2-8. 13に示したとおりである。

注 2) 分類及び配列は、「日本鳥類目録 改訂第 8 版」(令和 6 年 9 月 日本鳥学会)に準拠した。

表 7-2-8.17 重要な種の確認状況（鳥類（猛禽類を除く））

No.	種名	確認位置				主な確認状況	調査地域内における繁殖可能性の有無
		対象事業実施区域					
		内		外			
		箇所数	例数	箇所数	例数		
1	オカヨシガモ	0	0	2	209+	対象事業実施区域外の南側の海域で休息または採食する個体等が確認された。	繁殖していない
2	ヨシガモ	0	0	1	1	対象事業実施区域外の南側の海域で休息する個体が確認された。	繁殖していない
3	スズガモ	0	0	4	3005+	対象事業実施区域外の南側の海域で休息する個体等が確認された。	繁殖していない
4	ホオジロガモ	0	0	1	1	対象事業実施区域外の南側の海域で採食する個体が確認された。	繁殖していない
5	ホトトギス	0	0	1	1	対象事業実施区域外の北西側の霊園でさえずりが確認された。	繁殖の可能性は低い
6	オオバン	0	0	4	196+	対象事業実施区域外の南側の海域で休息または採食する個体等が確認された。	繁殖していない
7	カイツブリ	0	0	1	1	対象事業実施区域外の南側の海域で採食する個体が確認された。	繁殖していない
8	カンムリカイツブリ	0	0	5	581+	対象事業実施区域外の南側の海域で休息または採食する個体等が確認された。	繁殖していない
9	コチドリ	0	0	1	1	対象事業実施区域外の南東側の草地上空を飛翔する個体が確認された。	繁殖していない
10	キョウジョシギ	0	0	2	2	対象事業実施区域外の南側の護岸上で採食する個体等が確認された。	繁殖していない
11	イソシギ	0	0	11	11	対象事業実施区域外の南側の護岸上及び南西側の事業所で休息または採食する個体等が確認された。	繁殖していない
12	キアシシギ	0	0	2	3	対象事業実施区域外の南側の護岸上で採食する個体等が確認された。	繁殖していない
13	オオセグロカモメ	0	0	2	13	対象事業実施区域外の南側の海域を飛翔する個体等が確認された。	繁殖していない
14	ダイサギ	1	1	7	7	対処事業実施区域上空及び対象事業実施区域外の南側の海域を飛翔する個体及び護岸上で休息する個体等が確認された。	繁殖していない
15	チュウサギ	0	0	2	2	対象事業実施区域外の南側の護岸上で休息する個体等が確認された。	繁殖していない
16	コサギ	0	0	2	3	対象事業実施区域外の南側の海域や南東側の草地上空を飛翔する個体等が確認された。	繁殖していない
17	サンショウクイ	0	0	1	1	対象事業実施区域外の西側の草地上空を飛翔する個体が確認された。	繁殖していない
18	ツバメ	7	12	5	16	対象事業実施区域及びその周辺を飛翔する個体等が確認された。	繁殖の可能性あり
19	ウグイス	0	0	2	2	対象事業実施区域外の北側の周辺道路の植栽の樹上、西側の事業所内の樹上等で地鳴きが確認された。	繁殖の可能性は低い
20	エナガ	0	0	2	10	対象事業実施区域外の西側の公園や北側の大学施設内の樹上等で個体や地鳴きが確認された。	繁殖の可能性あり
21	セッカ	0	0	8	8	対象事業実施区域外の南東側の草地等で確認された。	繁殖の可能性あり
22	メジロ	13	47	5	10	対象事業実施区域及びその周辺の樹上等で確認された。	繁殖の可能性あり
23	セグロセキレイ	0	0	1	1	対象事業実施区域外の西側の草地で確認された。	繁殖の可能性は低い
24	ホオジロ	1	1	0	0	対象事業実施区域内のメダケ群落から地鳴きが確認された。	繁殖の可能性は低い

注1) 分類及び配列は、「日本鳥類目録 改訂第8版」(令和6年9月 日本鳥学会)に準拠した。

注2) 箇所数：確認した地点数 例数：確認した個体数または痕跡数（動物は移動能力があり、重複の可能性があるので「例数」として表記した。）

注3) 「+」は確認された個体数に加え、多数確認されていることを示す。

注4) 対象事業実施区域内及び対象事業実施区域外を連続して飛翔した個体は、対象事業実施区域内の例数に計上した。

iv 猛禽類

確認された猛禽類のうち重要な種は表 7-2-8. 18に示すとおり、3科7種であった。
また、重要な種の確認状況は、表 7-2-8. 19に示すとおりである。
なお、重要種保護の観点から詳細な確認位置は記載していない。

表 7-2-8. 18 重要な種（猛禽類）

No.	科名	種名	選定基準							確認時期													
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	令和5年												令和6年	
										3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月		
1	ミサゴ	ミサゴ					NT	B	B				1		2		1	1	2	1	4		
2	タカ	ハチクマ					NT	B					1										
3		ハイタカ					NT	B	C	4									1	2	4		
4		オオタカ					NT	C	B	2							1						
5		トビ							B	1			1		1	2	4	5	3	3			
6		ノスリ						C	C	2										3	3		
7	ハヤブサ	ハヤブサ				国内	VU	A	B									1					
計	3科	7種	0種	0種	0種	1種	5種	6種	6種	4種	0種	0種	3種	1種	2種	1種	3種	3種	3種	4種	3種		

注1) 選定基準は表 7-2-8. 13に示したとおりである。

注2) 分類及び配列は、「日本鳥類目録 改訂第8版」(令和6年9月 日本鳥学会)に準拠した。

表 7-2-8. 19 重要な種の確認状況（猛禽類）

No.	種名	確認位置		主な確認状況	調査地域内における繁殖可能性の有無
		対象事業実施区域			
		内	外		
		例数	例数		
1	ミサゴ	1	11	対象事業実施区域上空で飛翔が確認されたほか、対象事業実施区域外の南側の海域で探餌行動や餌運びが確認された。	繁殖していない
2	ハチクマ	1		対象事業実施区域上空で飛翔が確認された。	繁殖していない
3	ハイタカ	1	10	対象事業実施区域上空及び対象事業実施区域外の北西側の霊園上空等で飛翔が確認された。なお、確認時期は、令和5年3月及び令和5年12月から令和6年2月であることから、越冬個体と考えられた。	繁殖していない
4	オオタカ	1	2	対象事業実施区域及びその周辺の上空での飛翔が確認された。	繁殖していない
5	トビ	4	16	対象事業実施区域上空や対象事業実施区域外の南側の海域における旋回、探餌、餌運び等が確認された。	繁殖していない
6	ノスリ	1	7	対象事業実施区域及びその周辺で飛翔、探餌が確認された。なお、確認時期は令和5年3月及び令和6年1月～令和6年2月であることから、越冬個体と考えられた。	繁殖していない
7	ハヤブサ	1		対象事業実施区域上空で飛翔が確認された。	繁殖していない

注1) 分類及び配列は、「日本鳥類目録 改訂第8版」(令和6年9月 日本鳥学会)に準拠した。

注2) 例数：確認した個体数（動物は移動能力があり、重複の可能性があることから「例数」として表記した。）

注3) 対象事業実施区域内及び対象事業実施区域外を連続して飛翔した個体は、対象事業実施区域内の例数に計上した。

v 爬虫類

確認された爬虫類のうち重要な種は表 7-2-8. 20に示すとおり、1 目 4 科 4 種であった。また、重要な種の確認状況は、表 7-2-8. 21に示すとおりである。

なお、重要種保護の観点から詳細な確認位置は記載していない。

表 7-2-8. 20 重要な種（爬虫類）

No.	目名	科名	種名	選定基準							確認位置 対象事業 実施区域		確認時期			
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	内	外	春季	初夏	夏季	秋季
1	有鱗	ヤモリ	ニホンヤモリ						D	C		●		●		
2		トカゲ	ヒガシニホントカゲ						B	B	●		●		●	●
3		カナヘビ	ニホンカナヘビ						D		●	●	●	●	●	●
4		ナミヘビ	アオダイショウ						D	C	●			●		
計	1 目	4 科	4 種	0 種	0 種	0 種	0 種	0 種	4 種	3 種	3 種	2 種	2 種	3 種	2 種	2 種

注 1) 選定基準は表 7-2-8. 13に示したとおりである。
注 2) 分類及び配列は、「日本産爬虫両生類標準和名リスト（2024年 3 月 11 日版）」（令和 6 年 3 月 日本爬虫両棲類学会）に準拠した。
注 3) クサガメは飼育個体のため、重要な種として扱わない。

表 7-2-8. 21 重要な種の確認状況（爬虫類）

No.	種名	確認位置				主な確認状況	調査地域内における 繁殖可能性の有無
		対象事業実施区域					
		内		外			
		箇所数	例数	箇所数	例数		
1	ニホンヤモリ	0	0	1	1	対象事業実施区域外の西側の公園で死体が確認された。	繁殖の可能性あり
2	ヒガシニホントカゲ	3	3	0	0	対象事業実施区域内のメダケ群落や板切れの下等で確認された。	繁殖の可能性あり
3	ニホンカナヘビ	4	4	6	6	対象事業実施区域内のメダケ群落や板切れの下、対象事業実施区域外の南東側の草地、北側の周辺道路の植栽等で確認された。	繁殖の可能性あり
4	アオダイショウ	1	1	0	0	対象事業実施区域内の人工構造物の外壁で幼体を確認された。	繁殖の可能性あり

注 1) 分類及び配列は、「日本産爬虫両生類標準和名リスト（2024年 3 月 11 日版）」（令和 6 年 3 月 日本爬虫両棲類学会）に準拠した
注 2) 箇所数：確認した地点数 例数：確認した個体数または痕跡数（動物は移動能力があり、重複の可能性があることから「例数」として表記した。）

vi 両生類

確認された両生類のうち重要な種は表 7-2-8. 22に示すとおり、1 目 1 科 1 種であった。また、重要な種の確認状況は、表 7-2-8. 23に示すとおりである。

なお、重要種保護の観点から詳細な確認位置は記載していない。

表 7-2-8. 22 重要な種（両性類）

No.	目名	科名	種名	選定基準							確認位置		確認時期			
											対象事業 実施区域					
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	内	外	春季	初夏季	夏季	秋季
1	無尾	アカガエル	ニホンアカガエル						A	A		●	●			
計	1 目	1 科	1 種	0 種	0 種	0 種	0 種	0 種	1 種	1 種	0 種	1 種	1 種	0 種	0 種	0 種

注 1) 選定基準は表 7-2-8. 13に示したとおりである。
注 2) 分類及び配列は、「日本産爬虫両生類標準和名リスト（2024年 3 月11日版）」（令和 6 年 3 月 日本爬虫両棲類学会）に準拠した。

表 7-2-8. 23 重要な種の確認状況（両生類）

No.	種名	確認位置				主な確認状況	調査地域内における 繁殖可能性の有無
		対象事業実施区域					
		内		外			
		箇所数	例数	箇所数	例数		
1	ニホンアカガエル	0	0	1	15	対象事業実施区域外の南東側の 草地の水たまりで幼生が確認され た。	繁殖を確認した

注 1) 箇所数：確認した地点数 例数：確認した個体数（動物は移動能力があり、重複の可能性があるので「例数」として表記した。）
注 2) 分類及び配列は、「日本産爬虫両生類標準和名リスト（2024年 3 月11日版）」（令和 6 年 3 月 日本爬虫両棲類学会）に準拠した。

vii 昆虫類

確認された昆虫類のうち重要な種は表 7-2-8. 24に示すとおり、6 目 8 科 9 種であった。また、重要な種の確認状況は、表 7-2-8. 25に示すとおりである。

なお、重要種保護の観点から詳細な確認位置は記載していない。

表 7-2-8. 24 重要な種（昆虫類）

No.	目名	科名	種名	選定基準							確認位置 対象事業 実施区域		確認時期			
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	内	外	春季	初夏	夏季	秋季
1	トンボ	トンボ	ショウジョウトンボ							C		●			●	
2	バッタ	バッタ	ショウリョウバッタモドキ							C		●		●	●	
3	カメムシ	カメムシ	フタテнкаメムシ						C			●			●	
4			イネカメムシ						C			●			●	
5		ツノカメムシ	オオツノカメムシ						D			●				●
6	コウチュウ	ゲンゴロウ	ハイイロゲンゴロウ							C		●			●	●
7	ハチ	アリ	ヒラタウロコアリ							C	●			●		
8	チョウ	コブガ	ツクシアオリング							C	●	●			●	
9		ヤガ	マエグロシラオビアカガネトウ							B		●		●		
計	6 目	8 科	9 種	0 種	0 種	0 種	0 種	0 種	3 種	6 種	2 種	8 種	0 種	3 種	6 種	2 種

注 1) 選定基準は表 7-2-8. 13に示したとおりである。

注 2) 分類及び配列は、基本的に「日本産野生生物目録 無脊椎動物編Ⅱ」（平成 7 年 6 月 環境庁）に準拠したが、その後、和名や学名等が変更された種については、最新の文献や図鑑等に基づいて修正した。

表 7-2-8. 25 重要な種の確認状況（昆虫類）

No.	種名	確認位置				主な確認状況	調査地域内における 繁殖可能性の有無
		対象事業実施区域					
		内		外			
		箇所数	例数	箇所数	例数		
1	ショウジョウトンボ	0	0	1	2	対象事業実施区域外の南東側の草地で確認された。	繁殖の可能性あり
2	ショウリョウバッタモドキ	0	0	10	19	対象事業実施区域外の南東側の草地、北側の周辺道路沿いの草地等で確認された。	繁殖の可能性あり
3	フタテнкаメムシ	0	0	1	2	対象事業実施区域外の南東側の草地で確認された。	繁殖の可能性あり
4	イネカメムシ	0	0	1	1	対象事業実施区域外の南東側の草地で確認された。	繁殖の可能性あり
5	オオツノカメムシ	0	0	1	1	対象事業実施区域外の北側の周辺道路沿いの植栽で確認された。	繁殖していない
6	ハイイロゲンゴロウ	0	0	1	6	対象事業実施区域外の北西側の人工池で確認された。	繁殖の可能性あり
7	ヒラタウロコアリ	1	1	0	0	対象事業実施区域内のメダケ群落で確認された。	繁殖の可能性は低い
8	ツクシアオリング	1	1	1	1	対象事業実施区域内の植栽、対象事業実施区域外の西側の樹林地で確認された。	繁殖の可能性あり
9	マエグロシラオビアカガネトウ	0	0	1	1	対象事業実施区域外の西側の樹林地で確認された。	繁殖の可能性あり

注) 箇所数：確認した地点数 例数：確認した個体数（動物は移動能力があり、重複の可能性があるので「例数」として表記した。）

viii その他無脊椎動物

確認されたその他無脊椎動物のうち重要な種は表 7-2-8. 26に示すとおり、1 目 1 科 2 種であった。また、重要な種の確認状況は、表 7-2-8. 27に示すとおりである。

なお、重要種保護の観点から詳細な確認位置は記載していない。

表 7-2-8. 26 重要な種（その他無脊椎動物）

No.	目名	科名	種名	選定基準							確認位置 対象事業 実施区域		確認時期			
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	内	外	春季	初夏	夏季	秋季
1	ゲジ	ゲジ	ゲジ						B			●	●	●	●	●
2			オオゲジ						B				●			
計	1 目	1 科	2 種	0 種	0 種	0 種	0 種	0 種	2 種	0 種	0 種	1 種	2 種	1 種	1 種	1 種

注1) 分類及び配列は、基本的に「日本産野生生物目録無脊椎動物編Ⅲ」（平成10年12月 環境庁）に準拠した。

注2) 春季調査は確認種の記録のみとしたため、確認位置や個体数の記録はない。

表 7-2-8. 27 重要な種の確認状況（その他無脊椎動物）

No.	種名	確認位置				主な確認状況	調査地域内における 繁殖可能性の有無
		対象事業実施区域					
		内		外			
		箇所数	例数	箇所数	例数		
1	ゲジ	7	16	6	19	対象事業実施区域内のメダケ群落や人工構造物の外壁、対象事業実施区域外の草地や植栽等で確認された。	繁殖の可能性あり
2	オオゲジ	-	-	-	-	確認位置の記録なし。	繁殖の可能性あり

注1) 箇所数：確認した地点数 例数：確認した個体数（動物は移動能力があり、重複の可能性があることから「例数」として表記した。）

注2) 春季調査は確認種の記録のみとしたため、確認位置や個体数の記録はない。

(ウ) 注目すべき生息地

調査地域における注目すべき生息地として、対象事業実施区域北西側約1.8kmにラムサール条約湿地に指定されている谷津干潟があり、水鳥や水生動物等の多様な生物の生息地となっている。

(エ) 指定・規制の状況

「3-2-8 環境の保全を目的とする法令等により指定された地域その他の対象及び当該対象に係る規制の内容その他の状況」に示したとおりである。

調査地域は、「鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律」に基づく千葉特定猟具使用禁止区域（銃器）に含まれている。

② 予 測

ア. 予測地域

予測地域は、調査地域と同様とした。

イ. 予測項目

動物の予測は、以下に示す項目について行った。なお、注目すべき生息地については、予測地域内にラムサール条約湿地に指定されている谷津干潟があるものの、約1.8kmの離隔があることから、本事業による影響は生じないと考えられるため、予測項目から除外した。

- ・動物相の変化
- ・地域を特徴づける種又は指標性の高い種の分布域の変化
- ・重要な種の生息状況の変化

ウ. 予測対象時期

予測対象時期は、工事により動物への影響が最大になると考えられる時期及び工作物の設置並びに植栽等による修景が完了した時期とした。

エ. 予測手法

予測は事業計画の内容を踏まえ、保全対象である動物及び生息環境に及ぼす直接的影響及び動物の生息環境条件の変化、生息域の分断や孤立等の間接的影響について、種の特性や生息環境及び重要な種の分布図等を重ね合わせることで、本事業による影響の程度を予測した。

なお、現状では詳細な工事計画及び土地利用計画が確定していない。そのため、工事中は、対象事業実施区域内全域が改変され、造成地となるものとした。供用時は、建築物等、構内道路・駐車場等は工場地帯（植生自然度1）になるものとし、緑地は区分（植栽樹林、芝地等）が未確定であることから、すべて植生自然度1とした。

（ア）動物相の変化

予測地域に残る生息環境の状況を考慮し、予測地域に成立する動物相の変化の程度について予測した。

（イ）地域を特徴づける種又は指標性の高い種の分布域の変化

予測地域に残る生息環境の状況を考慮し、予測地域を特徴づける種または指標性の高い種の分布域の変化の程度について予測した。

（ウ）重要な種の生息状況の変化

予測地域に残る生息環境の状況を考慮し、重要な種の生息状況の変化について予測した。

オ. 予測結果

(ア) 動物相の変化

動物相の変化についての予測結果概要は表 7-2-8. 28に、予測結果は表 7-2-8. 29に示すとおりである。

表 7-2-8. 28 動物相の変化についての予測結果概要

項目		確認状況									代表的な種	影響の 程度	
		対象事業実施区域						計		割合 (%)			
		のみ		内		外							
		科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数				
		工事中	供用時										
哺乳類相		0 科	0 種	2 科	2 種	2 科	2 種	2 科	2 種	0.0	アブラコウモリ、タヌキ	－	－
鳥類相		1 科	1 種	15 科	20 種	28 科	58 種	28 科	59 種	1.7	スズメ、ムクドリ、オカ ヨシガモ、ユリカモメ	－	－
猛禽類	0 科	0 種	3 科	8 種	3 科	8 種	3 科	8 種	0.0	ミサゴ、チョウゲンボ ウ、オオタカ			
爬虫類相		4 科	4 種	5 科	5 種	2 科	2 種	6 科	6 種	66.6	ニホンヤモリ、ニホンカ ナヘビ、アオダイショウ	－	－
両生類相		0 科	0 種	0 科	0 種	1 科	1 種	1 科	1 種	0.0	ニホンアカガエル	－	－
昆虫類相		7 科	67 種	81 科	198 種	115 科	357 種	122 科	424 種	15.8	ショウリョウバッタモ ドキ、イネカメムシ	－	－
その他無脊椎動物 (陸産貝類相)		0 科	0 種	3 科	4 種	4 科	5 種	5 科	6 種	0.0	コハクガイ、チャコウラ ナメクジ	－	－
その他無脊椎動物 (クモ類・多足類相)		4 科	11 種	17 科	28 種	19 科	36 種	25 科	56 種	19.6	キタフナムシ、ゲジ、オ オゲジ	－	－

注1) 割合(%)は、確認された全確認種のうち対象事業実施区域のみで確認された種の割合である。

注2) 事業実施による影響の程度は以下のとおり。

×：影響は大きい △：影響が生じる可能性がある —：影響はない(極めて小さい)

表 7-2-8.29 動物相の変化についての予測結果

確認状況	現地調査において、対象事業実施区域内で 126 科 265 種（うち、対象事業実施区域内でのみ確認されたのは 16 科 83 種）、対象事業実施区域外で 174 科 469 種、合計 192 科 562 種確認された。
予測結果 (工事中)	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、哺乳類相、両生類相、陸産貝類相では、対象事業実施区域内のみで確認された種はいない。また、各動物相を構成する種の生息環境は、対象事業実施区域外にも存在しており、対象事業実施区域内は主要な生息環境ではないことから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 鳥類相、昆虫類相、クモ類・多足類相では、対象事業実施区域内のみで確認された種はいるものの、いずれも一般的な市街地、草地及び樹林地でみられる種である。また、各動物相を構成する種の生息環境は、対象事業実施区域外にも存在しており、対象事業実施区域内は主要な生息環境ではないことから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 爬虫類相では、対象事業実施区域内のみで確認された種は 66.6%いるものの、内のみで確認された 4 種のうち 2 種は外来の飼育個体、2 種は一般的な市街地環境及び草地環境でみられる種である。また、爬虫類相を構成する種の生息環境は、対象事業実施区域外にも存在しており、対象事業実施区域内は主要な生息環境ではないことから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による哺乳類、鳥類等の一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施する。 また、工事の実施に伴う粉じん等の発生により、植物の生息環境が変化し、動物の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、粉じんの飛散を防止するために、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行うことから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。
予測結果 (供用時)	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。

(イ) 地域を特徴づける種又は指標性の高い種の分布域の変化

地域を特徴づける種または指標性の高い種は、表 7-2-8.30に示すとおり、チョウゲンボウ、ニホンカナヘビ、バッタ目を選定した。

地域を特徴づける種または指標性の高い種の変化についての予測結果概要は表 7-2-8.31に、予測結果は表 7-2-8.32(1)～(3)に示すとおりである。

表 7-2-8.30 地域を特徴づける種または指標性の高い種及びその選定理由

No.	種名等	選定理由
1	チョウゲンボウ	本種は、海岸の埋立地や河川敷の草地、丘陵地や低山地の耕作地や造成地、住宅地などに生息しており、山地の崖や都市部にあるビルや橋などの人工物に営巣する。 現地調査において、対象事業実施区域及びその周辺で複数個体の生息が確認されているほか、対象事業実施区域内の旧清掃工場及び現清掃工場の2箇所で、計2ペアのチョウゲンボウの繁殖が確認されている。また、対象事業実施区域外の西側及び南東側の草地では採餌行動や採餌行動が確認され、対象事業実施区域周辺の草地を採餌環境として利用しているものと考えられた。 以上を踏まえ、営巣環境である市街地（人工構造物）や採餌環境である草地が広く存在する予測地域内の特徴を反映している種であり、市街地における草地環境の指標となることから選定した。
2	ニホンカナヘビ	本種は、草地や藪等を主な生息環境としている。 現地調査において、公園や事業所内のまとまった草地や、市街地に点在する植栽等で確認されている。また、チョウゲンボウがニホンカナヘビを餌としている様子も確認されている。 以上を踏まえ、市街地及び草地が広く存在している予測地域内の特徴を反映している種であることから選定した。
3	バッタ目	バッタ目は、草地を主な生息環境としている。 現地調査において、公園や事業所内のまとまった草地や、市街地に点在する草地等で確認されている。また、チョウゲンボウがバッタ類を餌としている様子も確認されている。 以上を踏まえ、草地が広く存在している予測地域内の特徴を反映している種であることから選定した。

表 7-2-8.31 地域を特徴づける種または指標性の高い種の生息状況の変化についての予測結果概要

No.	種名	確認状況		生息環境の有無		主な確認状況	影響の程度	
		内	外	内	外		工事中	供用時
1	チョウゲンボウ	198 例		○	○	平地から高山の草地、農耕地、川原、埋立地など	△	—
2	ニホンカナヘビ	4 例	6 例	○	○	平地から低山帯の草むらや藪、人家の庭先	—	—
3	バッタ目	6 科 13 種	6 科 22 種	○	○	草地、樹林地	—	—

注) 事業実施による影響の程度は以下のとおり。

×：影響は大きい △：影響が生じる可能性がある —：影響はない(極めて小さい)

表 7-2-8. 32 (1) 地域を特徴づける種または指標性の高い種の分布域の変化についての予測結果 (チョウゲンボウ)

チョウゲンボウ（ハヤブサ科）		
指定状況	指定なし	 現地調査での確認状況
種の特性	体長雄 30cm、雌 33cm。雄成鳥は頭頸部、顔、腰から尾にかけて青灰色。背、翼上面は茶褐色。平地から山地の崖のほか、橋脚や煙突などの人工建造物で繁殖する。ネズミ類や小鳥、昆虫類を食べる。	
分布	北海道、本州（中部以東）では留鳥または漂鳥。本州（近畿以西）、四国、九州、南西諸島では主に冬鳥。山地の崖に営巣していたが、1990 年代以降は平地の都市部にあるビルや橋などの人工物にも営巣することも多くなった。都内では海岸の埋立地や河川敷の草地、丘陵地や低山地の耕作地や造成地、住宅地などで見られ、営巣もしており、分布は局所的だが増加傾向にある。	
出典	「東京都レッドデータブック（本土部）2023」（令和 5 年 3 月 東京都環境局）	
確認状況	現地調査において、令和 5 年 3 月～令和 6 年 2 月すべての調査月をとおして、対象事業実施区域及びその周辺において複数個体の生息が確認されており、「令和 5 年シーズン」、「令和 6 年シーズン」において、対象事業実施区域内の旧清掃工場及び現清掃工場の 2 箇所でチョウゲンボウが 2 ペア繁殖していることが確認された。 また、対象事業実施区域外の西側及び南東側の草地では採餌行動や採餌行動が確認され、対象事業実施区域周辺の草地等を採餌環境として利用しているものと考えられた。	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、対象事業実施区域内の旧清掃工場及び現清掃工場に繁殖している 2 ペアの営巣地（ダクト）は消失する。 なお、「③ 環境保全措置」に示すとおり、工事の開始時期を非繁殖期（7 月～12 月）とし、解体工事前の非繁殖期に営巣地（ダクト）を封鎖する。また、旧清掃工場及び現清掃工場の解体工事前には代替巣を設置し、営巣環境を創出する等の環境保全措置を実施するものの、効果に不確実性があることから、工事中の直接的影響が生じる可能性があるとして予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境及び餌資源生物の組成・量が変わることが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止する。 しかし、工事の実施に伴う騒音により、対象事業実施区域内で営巣しているペアの繁殖が阻害される可能性があることから、工事中の間接的影響が生じる可能性があるとして予測する。 なお、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画である。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める。 また、対象事業実施区域周辺の緑地を有する施設と協議に努め、草地環境の確保や管理方法等を検討し、本種の採餌環境を確保するよう努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 32(2) 地域を特徴づける種または指標性の高い種の分布域の変化についての予測結果（ニホンカナヘビ）

ニホンカナヘビ（カナヘビ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：一般保護生物（D）	
種の特徴	日本固有種。茶褐色で背面の鱗はキールが発達してざらついた印象をあたえる。なめらかな鱗に被われ、つややかなニホントカゲと対照的。長い尾と発達した四肢を使って地上から草の上を生活場所とし、クモや小型の昆虫を捕食する。初夏に、2-6個の卵を数回にわたり産卵する。	 現地調査での確認個体
分布	日本固有種で、北海道・本州・四国・九州および佐渡島・隠岐・壱岐・五島列島・屋久島・種子島・中之島・諏訪之瀬島などに分布する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編〈2011年改訂版〉」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課） 「山溪ハンドブック 10 日本のカメ・トカゲ・ヘビ」（平成19年7月 山と溪谷社）	
確認状況	全季節をとおして対象事業実施区域及びその周辺で確認された。	
	対象事業実施区域内：春季1箇所1例 初夏季1箇所1例 夏季2箇所2例	対象事業実施区域外：春季4箇所4例 夏季1箇所1個体 秋季1箇所1個体
予測結果 (工事中)	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の草地が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられる。本種の移動能力は高くはないものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、解体や造成等の工事は、段階的に実施することから、周辺へ忌避することが考えられる。 また、本種の生息環境である草地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 (供用時)	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 32(3) 地域を特徴づける種または指標性の高い種の分布域の変化についての予測結果（バッタ目）

バッタ目（コオロギ科、カネタタキ科、キリギリス科、ツユムシ科、オンブバッタ科、バッタ科）		
目の概要	バッタ目の仲間は比較的大型の種が多く、鳴く虫を含むので日本人には親しみのある昆虫である。しかし翅が退化して全く欠けているか、あっても痕跡程度で鳴かない種類もいる。バッタ科の一部には飛蝗と呼ばれる大群となって農作物に大きな被害を及ぼす種類があり注目されている。国内では農業の普及で害虫としてのバッタ類はあまり問題にならなくなった。そればかりかハネナガイナゴのように、かつてのイネの害虫が県レベルのレッドデータブックに掲載される例もある。	
出典	「千葉県保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	現地調査での確認個体
確認状況	現地調査において、6科24種（うち重要な種1種）のバッタ目が、主に対象事業実施区域及びその周辺の草地環境等で確認された。 対象事業実施区域内：6科13種 対象事業実施区域外：6科22種	
予測結果（工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、バッタ目の主要な生息環境となる対象事業実施区域内の草地が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられるものの、バッタ目は移動能力が高いことから、工事中は周辺へ忌避することが考えられる。また、バッタ目の主要な生息環境である草地は予測地域内に広く存在する。 なお、対象事業実施区域内のみで確認されたバッタ目は2種（クマスズムシ、サトクダマモドキ）であり、一般的な草地環境や林縁環境に広く分布する種であることから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

(ウ) 重要な種の生息状況の変化

現地調査にて予測地域内で確認された、重要な種の生息状況の変化についての予測結果概要は表 7-2-8. 33(1)～(3)に、重要な種の生息状況の変化について予測した結果は、表 7-2-8. 34(1)～(48)に示すとおりである。

表 7-2-8. 33(1) 重要な種の生息状況の変化についての予測結果概要

項目	No.	種名	確認状況		生息環境の有無		主な確認状況	影響の程度	
			内	外	内	外		工事中	供用時
哺乳類	1	タヌキ	1 箇所 (1 例)	1 箇所 (1 例)	○	○	対象事業実施区域内のメダケ群落及び対象事業実施区域外の南西側の草地で糞が確認された。	—	—
鳥類 ^{注3, 4)} (猛禽類を除く)	1	オカヨシガモ		2 箇所 (209+例)		○	対象事業実施区域外の南側の海域で休息または採食する個体等が確認された。	—	—
	2	ヨシガモ		1 箇所 (1 例)		○	対象事業実施区域外の南側の海域で休息する個体が確認された。	—	—
	3	スズガモ		4 箇所 (3005+例)		○	対象事業実施区域外の南側の海域で休息する個体等が確認された。	—	—
	4	ホオジロガモ		1 箇所 (1 例)		○	対象事業実施区域外の南側の海域で採食する個体が確認された。	—	—
	5	ホトトギス		1 箇所 (1 例)		○	対象事業実施区域外の北西側の霊園でさえずりが確認された。	—	—
	6	オオバン		4 箇所 (196+例)		○	対象事業実施区域外の南側の海域で休息または採食する個体等が確認された。	—	—
	7	カイツブリ		1 箇所 (1 例)		○	対象事業実施区域外の南側の海域で採食する個体が確認された。	—	—
	8	カンムリカイツブリ		5 箇所 (581+例)		○	対象事業実施区域外の南側の海域で休息または採食する個体等が確認された。	—	—
	9	コチドリ		1 箇所 (1 例)		○	対象事業実施区域外の南東側の草地上空を飛翔する個体が確認された。	—	—
	10	キョウジョシギ		2 箇所 (2 例)		○	対象事業実施区域外の南側の護岸上で採食する個体等が確認された。	—	—
	11	イソシギ		11 箇所 (11 例)		○	対象事業実施区域外の南側の護岸上及び南西側の事業所で休息または採食する個体等が確認された。	—	—
	12	キアシシギ		2 箇所 (3 例)		○	対象事業実施区域外の南側の護岸上で採食する個体等が確認された。	—	—
	13	オオセグロカモメ		2 箇所 (13 例)		○	対象事業実施区域外の南側の海域を飛翔する個体等が確認された。	—	—
	14	ダイサギ	1 箇所 (1 例)	7 箇所 (7 例)		○	対象事業実施区域上空及び対象事業実施区域外の南側の海域を飛翔する個体及び護岸上で休息する個体等が確認された。	—	—
	15	チュウサギ		2 箇所 (2 例)		○	対象事業実施区域外の南側の護岸上で休息する個体等が確認された。	—	—

注1) 事業実施による影響の程度は以下のとおり。

×：影響は大きい △：影響が生じる可能性がある —：影響はない(極めて小さい)

注2) 箇所数：確認した地点数 例数：確認した個体数または痕跡数(動物は移動能力があり、重複の可能性があることから「例数」として表記した。)

注3) 「+」は確認された個体数に加え、多数確認されていることを示す。

注4) 対象事業実施区域内及び対象事業実施区域外を連続して飛翔した個体は、対象事業実施区域内の例数に計上した。

表 7-2-8. 33 (2) 重要な種の生息状況の変化についての予測結果概要

項目	No.	種名	確認状況		生息環境の有無		主な確認状況	影響の程度	
			内	外	内	外		工事中	供用時
鳥類 ^{注3)} (猛禽類を除く)	16	コサギ		2箇所 (3例)		○	対象事業実施区域外の南側の海域や南東側の草地上空を飛翔する個体等が確認された。	—	—
	17	サンショウクイ		1箇所 (1例)			対象事業実施区域外の西側の草地上空を飛翔する個体が確認された。	—	—
	18	ツバメ	7箇所 (12例)	5箇所 (16例)	○	○	対象事業実施区域及びその周辺を飛翔する個体等が確認された。	—	—
	19	ウグイス		2箇所 (2例)	○	○	対象事業実施区域外の北側の周辺道路の植栽の樹上、西側の事業所内の樹上等で地鳴きが確認された。	—	—
	20	エナガ		2箇所 (10例)	○	○	対象事業実施区域外の西側の公園や北側の大学施設内の樹上等で個体や地鳴きが確認された。	—	—
	21	セッカ		8箇所 (8例)		○	対象事業実施区域外の南東側の草地等で確認された。	—	—
	22	メジロ	13箇所 (47例)	5箇所 (10例)	○	○	対象事業実施区域及びその周辺の樹上等で確認された。	—	—
	23	セグロセキレイ		1箇所 (1例)		○	対象事業実施区域外の西側の草地で確認された。	—	—
	24	ホオジロ	1箇所 (1例)			○	対象事業実施区域内のメダケ群落から地鳴きが確認された。	—	—
猛禽類 ^{注3)}	1	ミサゴ	1例	11例		○	対象事業実施区域上空で飛翔が確認されたほか、対象事業実施区域外の南側の海域で探餌行動や餌運びが確認された。	—	—
	2	ハチクマ	1例				対象事業実施区域上空で飛翔が確認された。	—	—
	3	ハイタカ	1例	10例			対象事業実施区域上空及び対象事業実施区域外の北西側の霊園上空等で飛翔が確認された。なお、確認時期は、令和5年3月及び令和5年12月から令和6年2月であることから、越冬個体と考えられた。	—	—
	4	オオタカ	1例	2例			対象事業実施区域及びその周辺の上空での飛翔が確認された。	—	—
	5	トビ	4例	14例		○	対象事業実施区域上空や対象事業実施区域外の南側の海域における旋回、探餌、餌運び等が確認された。	—	—
	6	ノスリ	1例	7例			対象事業実施区域及びその周辺で飛翔、探餌が確認された。なお、確認時期は令和5年3月及び令和6年1月～令和6年2月であることから、越冬個体と考えられた。	—	—
	7	ハヤブサ	1例			○	対象事業実施区域上空で飛翔が確認された。	—	—
爬虫類	1	ニホンヤモリ		1箇所 (1例)	○	○	対象事業実施区域外の西側の公園で死体が確認された。	—	—
	2	ヒガシニホントカゲ	3箇所 (3例)		○	○	対象事業実施区域内のメダケ群落や板切れの下等で確認された。	—	—
	3	ニホンカナヘビ	4箇所 (4例)	6箇所 (6例)	○	○	対象事業実施区域内のメダケ群落や板切れの下、対象事業実施区域外の南東側の草地、北側の周辺道路の植栽等で確認された。	—	—

注1) 事業実施による影響の程度は以下のとおり。

×：影響は大きい △：影響が生じる可能性がある —：影響はない(極めて小さい)

注2) 箇所数：確認した地点数 例数：確認した個体数または痕跡数(動物は移動能力があり、重複の可能性があることから「例数」として表記した。)

注3) 対象事業実施区域内及び対象事業実施区域外を連続して飛翔した個体は、対象事業実施区域内の例数に計上した。

表 7-2-8. 33 (3) 重要な種の生息状況の変化についての予測結果概要

項目	No.	種名	確認状況		生息環境の有無		主な確認状況	影響の程度	
			内	外	内	外		工事中	供用時
爬虫類	4	アオダイショウ	1箇所 (1例)		○	○	対象事業実施区域内の人工構造物の外壁で幼体を確認された。	—	—
両生類	1	ニホンアカガエル		1箇所 (15例)		○	対象事業実施区域外の南東側の草地の水たまりで幼生を確認された。	—	—
昆虫類	1	ショウジョウトンボ		1箇所 (2例)		○	対象事業実施区域外の南東側の草地で確認された。	—	—
	2	ショウリョウバッタモドキ		10箇所 (19例)	○	○	対象事業実施区域外の南東側の草地、北側の周辺道路沿いの草地等で確認された。	—	—
	3	フタテнкаメムシ		1箇所 (2例)	○	○	対象事業実施区域外の南東側の草地で確認された。	—	—
	4	イネカメムシ		1箇所 (1例)	○	○	対象事業実施区域外の南東側の草地で確認された。	—	—
	5	オオツノカメムシ		1箇所 (1例)			対象事業実施区域外の北側の周辺道路沿いの植栽で確認された。	—	—
	6	ハイイログンゴロウ		1箇所 (6例)		○	対象事業実施区域外の北西側の人工池で確認された。	—	—
	7	ヒラタウロコアリ	1箇所 (1例)				対象事業実施区域内のメダケ群落で確認された。	—	—
	8	ツクシアオリング	1箇所 (1例)	1箇所 (1例)	○	○	対象事業実施区域内の植栽、対象事業実施区域外の西側の樹林地で確認された。	—	—
	9	マエグロシラオビ アカガネヨトウ		1箇所 (1例)	○	○	対象事業実施区域外の西側の樹林地で確認された。	—	—
その他無脊椎動物	1	ゲジ	7箇所 (16例)	6箇所 (19例)	○	○	対象事業実施区域内のメダケ群落や人工構造物の外壁、対象事業実施区域外の草地や植栽等で確認された。	—	—
	2	オオゲジ ^{注3)}	—	—	○	○	確認位置の記録なし。	—	—

注1) 事業実施による影響の程度は以下のとおり。

×：影響は大きい △：影響が生じる可能性がある —：影響はない(極めて小さい)

注2) 箇所数：確認した地点数 例数：確認した個体数または痕跡数(動物は移動能力があり、重複の可能性があることから「例数」として表記した。)

注3) オオゲジは春季調査で確認されているが、春季調査は確認種の記録のみとしたため、確認位置や個体数の記録はない。

表 7-2-8. 34(1) 重要な種の生息状況の変化（タヌキ）

タヌキ（イヌ科）		
指定状況	⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	親子あるいは家族が近い距離に集まり生活、活動する。排泄物を特定の場所に集中するタメ糞を行う。このタメ糞は個体あるいは家族集団間のナワバリ識別の役割があると考えられている。	
分布	ベトナム北部、中国東部～東北部、モンゴル東部、ロシア南東部、サハリン、日本列島と周辺離島	
出典	「侵入生物データベース」（国立研究開発法人国立環境研究所ホームページ）	 現地調査での確認（糞）
確認状況	冬季に対象事業実施区域内のメダケ群落及び対象事業実施区域外の南東側の草地で糞が確認された。 対象事業実施区域内 冬季：1箇所1例	対象事業実施区域外 冬季：1箇所1例
予測結果 (工事中)	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の市街地、草地及び樹林地が一時的に消失するものの、本種は移動能力が高いことから、工事中は周辺へ忌避することが考えられる。 また、本種の生息環境である市街地、草地及び樹林地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境及び餌資源生物の組成・量が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 (供用時)	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34(2) 重要な種の生息状況の変化（オカヨシガモ）

オカヨシガモ（カモ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：要保護生物（C） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	主に淡水の湖沼、河川、湿地に生息する。内陸部よりも沿岸部の湖沼に多い。主に植物食であるが、水生の小動物等も採食する。繁殖期は5-7月で地上の草むらに営巣する。非繁殖期にも大群ではなく、10-40羽程度の小群で行動する。	
分布	ヨーロッパ、シベリア、北アメリカの亜寒帯で繁殖する。温帯からインド・アフリカ等熱帯の一部に渡り、越冬する。国内では本州以南に冬鳥として飛来する。国内での繁殖の報告は少ない。北海道の数ヶ所と千葉県の東京湾岸の埋立地が、繁殖地である可能性がある（環境庁，1981）	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の海域で休息または採食する個体等が確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外 ：冬季1箇所 200+例 秋季1箇所 9例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施することから、工事中的間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中的間接的影響はないと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34(3) 重要な種の生息状況の変化（ヨシガモ）

ヨシガモ（カモ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：重要保護生物（B） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	中型のカモ類。極東地域に固有の種である。主に水草等を採食する。近年、国内では減少傾向にある。	
分布	東シベリアで繁殖する。北海道では、少数が繁殖する。冬期は南に渡る。日本や中国で越冬する（黒田，939）。国内では全国の湿地で越冬する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の海域で休息する個体が確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：冬季1箇所1例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。	
	【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	

表 7-2-8. 34(4) 重要な種の生息状況の変化（スズガモ）

スズガモ（カモ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：一般保護生物（D） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	干潟や砂浜、湖沼等の浅瀬、湿地、海域で採食する。越冬期、海域で数万から十数万羽の群れを形成することがある。潜水し、二枚貝や小型の甲殻類等の小動物を採食する。	
分布	旧北区、新北区の北部の広範囲な地域で繁殖する（Madge & Burn, 1989）。冬期には南に渡る。主に海岸で越冬する。国内では主に冬鳥。渡りの時期や越冬期に浅瀬、干潟、砂浜海岸等で見られる。国内では、増加傾向があると考えられている（環境庁自然環境局，2010）	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の海域で休息する個体等が確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外 ： 冬季 3 箇所 3002+例 秋季 1 箇所 3 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。	
	【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34(5) 重要な種の生息状況の変化（ホオジロガモ）

ホオジロガモ（カモ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	オスの嘴の基部、頬に白い羽毛がある。オスの頭部は、緑色で光沢がある。メスの頭部は茶褐色である。二枚貝類や甲殻類等を採食する。	
分布	ユーラシア大陸北部と北アメリカ北部で繁殖する（黒田，1939）。冬期は南に渡る。温帯域で越冬する。ユーラシア大陸で亜種 <i>B. c. clangula</i> 、北アメリカで亜種 <i>B. c. americana</i> が繁殖する。国内では冬鳥。亜種ホオジロガモ <i>B. c. clangula</i> が飛来する。全国に飛来し、越冬する。北海道厚岸付近で 1,000 羽ほど、クッチャロ湖で 200 羽ほどが越冬する。北日本に多く分布する。内湾や大きな河川、湖沼で数十羽が越冬する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の海域で採食する個体が確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：冬季 1 箇所 1 例
予測結果（工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	

表 7-2-8. 34(6) 重要な種の生息状況の変化（ホトトギス）

ホトトギス（カッコウ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：要保護生物（C） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	日本産ホトトギス類の中で最も小さい。主食は昆虫類である。他の鳥類があまり食べない鱗翅類の幼虫（毛虫）を捕食する。山地の林で繁殖する。他の鳥類の巣に卵を産む（托卵）。宿主は主にウグイスである。稀にセンダイムシクイやミソサザイに托卵する（樋口ら，1997）。卵はウグイスの卵より大きく、同色の赤茶色である。	現地調査での撮影写真無し
分布	日本からロシア、中国、朝鮮半島にかけて繁殖する。冬期は、南に渡る。中国南部、ベトナム等の東南アジアで越冬する。越冬地の詳細は不明である。国内では夏鳥。九州以北の山地の林に渡来し繁殖する。北海道では少ない。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の北西側の霊園でさえずりが確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：初夏季1箇所1例
予測結果（工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の樹林地が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、生息環境である樹林地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 施設の存在等に伴う日照障害、緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、本種の生息環境である樹林地は予測地域内に広く存在する。 さらに、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34(7) 重要な種の生息状況の変化（オオバン）

オオバン（クイナ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：要保護生物（C） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	全身が黒色の羽毛で覆われ、嘴と額板が白色で目立つ。足にはみずかきが発達している。主に湿地を歩行し生活するバンとは異なり、水面に浮かびながら生活することが多い（桑原，2007b）。湖沼、潮間帯湿地、塩性湿地、沼沢地、河川、河口域、水田等の湿地に生息する。広い水域で生活する。水面を泳ぎ、潜水して水草の葉、茎などを採食し、水生昆虫、貝、甲殻類など捕食する。繁殖期、ヨシやマコモの湿原や草むらに枯れ草を積み上げて皿形の巣を造る。冬は数羽から数十羽の群れになることもある。	
分布	旧北区、東洋区、オーストラリア区に広く分布する。国内では留鳥。本州中部以北、北海道で繁殖する。北部で繁殖する個体は、冬期、南に渡る。1980年代頃まで、東京湾岸が繁殖の南限であった。1980年以降、各地の湿地で繁殖が確認されるようになった。越冬期、各地の湿地で見られる。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の海域で休息または採食する個体等が確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：冬季1箇所150例 春季2箇所16例 秋季1箇所30例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34(8) 重要な種の生息状況の変化（カイツブリ）

カイツブリ（カイツブリ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：要保護生物（C） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	河川や湖沼に生息する。海岸では稀である。「キリリリリー」と大きな声で鳴く（桑原，2010b）。潜水して魚類・水生昆虫・甲殻類等の小動物を捕食する。繁殖期には、ヨシ等の間の水面に水草等を積み上げ営巣する。人工物を利用することもある（Hiraoka, 1996）。	
分布	ヨーロッパ、アフリカ、アジアにかけ広く分布する。国内では全国に分布する。北日本や高地で繁殖する個体は、冬期、暖地に移動し越冬する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の海域で採食する個体が確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：冬季1箇所1例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。	
	【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	

表 7-2-8. 34(9) 重要な種の生息状況の変化（カンムリカイツブリ）

カンムリカイツブリ（カイツブリ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：一般保護生物（D） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	日本産カイツブリ類の中では最も大きい。海域、内湾、干潟、砂浜等の海岸、河川、河口、湖沼等に飛来する。潜水して魚類、甲殻類等を捕食する。繁殖地では、湖沼の岸边に水草を積み上げて浮巣を造る。2-6 卵を産み、約 21-28 日で孵化する（樋口ら，1996）。	
分布	ヨーロッパ、アジア、アフリカ南部、オーストラリア、ニュージーランド等で繁殖する。高緯度地方で繁殖する個体は、暖温帯へ渡る。国内では、主に冬鳥。北日本の湖沼、一部の地域で局所的に繁殖する。青森県下北半島の陸奥小川原湖沼群でだけ繁殖していた。青森県では、各地で繁殖し、特に津軽地方で増加している（青森県, 2010）。現在、石川県河北潟、滋賀県琵琶湖、長良川・淀川等でも繁殖している。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の海域で休息または採食する個体等が確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：冬季 1 箇所 500+例 春季 3 箇所 69 例 秋季 1 箇所 12 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34(10) 重要な種の生息状況の変化（コチドリ）

コチドリ（チドリ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：重要保護生物（B） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	繁殖期は4～7月。一夫一妻で繁殖する。砂地や砂利地に浅い窪みを掘り、巣にする。一腹卵数は4卵が多い。千葉市美浜区での初卵日は、5月中旬である（桑原・箕輪ら，1997）。コアジサシのコロニーの周辺部で営巣することもあり。雌雄交替で抱卵する。抱卵中および育雛中に捕食者が近づくと擬傷を行う。22-25日抱卵でヒナに孵化する。ヒナは孵化後、短時間で歩けるようになり、離巣する。離巣したヒナは、自分で餌を採り、両親の世話を受けながら育つ。	
分布	ユーラシア大陸の低・中緯度地方の広い範囲で繁殖する。冬期は南に渡る。アフリカ大陸・インド・東南アジアに渡り、越冬する。国内では夏鳥。全国に渡来し繁殖する。少数が越冬する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南東側の草地上空を飛翔する個体が確認された 対象事業実施区域内：確認無し 対象事業実施区域外：初夏季1箇所1例	
予測結果（工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域や砂礫地は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	

表 7-2-8. 34(11) 重要な種の生息状況の変化（キョウジョシギ）

キョウジョシギ（シギ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：要保護生物（C） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	干潟、砂浜、岩礁、礫浜等の海岸、潮間帯湿地、塩性湿地、河口域、蓮田、水田等の湿地で採食する。歩きながら小動物を探し、頑丈でふと短い嘴でつついて食べる。干潟では、コメツキガニ、チゴガニ、アナジャコ等の小型の甲殻類等を捕食する。	
分布	ヨーロッパ、シベリア、アラスカ等、広い範囲で繁殖する。春の渡りの時期は、越冬地から繁殖地に渡り、秋の渡りの時期には繁殖地から越冬地に渡る。ヨーロッパ、アフリカ、中近東、インド、中国南東部、東南アジア等で越冬する。国内では旅鳥。各地で春と秋の渡りの時期に見られる。南西諸島や小笠原諸島では越冬する。冬期は少ない。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の護岸上で採食する個体等が確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：春季1箇所1例
予測結果（工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域や砂礫地は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34(12) 重要な種の生息状況の変化（イソシギ）

イソシギ（シギ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：最重要保護生物（A） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	
種の特徴	中型のシギ類。主に河川中流域の砂礫の河原に生息する。水辺から少し離れたまばらに草の生えた地上に営巣する。河川では中州や河口域、湖岸でみられる（石黒・桑原・桐原，2000）。海岸や埋立地でも見られる（桑原，1990）。水際や浅瀬でユスリカ等の水生昆虫を採食する。	
分布	北極圏や砂漠・高山を除くユーラシア大陸の広い範囲で繁殖する。冬期は南に渡る。アフリカ・オーストラリア・南アジア等に渡り、越冬する（Hayman et al., 1986）。国内では九州以北で繁殖する。北方で繁殖する個体は、本州中部以南に渡り越冬する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の護岸上及び南西側の事業所で休息または採食する個体等が確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：冬季3箇所3例 春季2箇所2例 夏季2箇所2例 秋季4箇所4例
予測結果（工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域や砂礫地は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8.34(13) 重要な種の生息状況の変化（キアシシギ）

キアシシギ（シギ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：要保護生物（C） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	 現地調査での確認個体
種の特性	干潟、浅瀬、砂浜、岩礁海岸、潮間帯湿地、塩性湿地、小河川、沼沢地、河口域や水田等の湿地で採食する。歩きながら小動物を探し、餌を細長い嘴でつついて食べる。干潟では、コメツキガニ、チゴガニ、アナジャコ等の小型の甲殻類、ゴカイ類等を捕食する。	
分布	ロシア極東地域で繁殖する。春の渡りの時期は、越冬地から繁殖地に渡り、秋の渡りの時期には繁殖地から越冬地に渡る。主にオーストラリアから東南アジアで越冬する。国内では旅鳥。渡りの時期に飛来する。南西諸島では越冬する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の護岸上で採食する個体等が確認された。 対象事業実施区域内：確認無し 対象事業実施区域外：夏季 2 箇所 3 例	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域や砂礫地は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	

表 7-2-8. 34(14) 重要な種の生息状況の変化（オオセグロカモメ）

オオセグロカモメ（カモメ科）		
指定状況	⑤環境省 RL：準絶滅危惧（NT）	
種の特性	海岸の岩礁や崖で集団営巣する。5月頃3卵を産み、6月頃ふ化し、8月頃巣立つ。おもに魚類、甲殻類などの小動物や鳥類の卵やヒナを捕食する。残滓も食べる。	
分布	東北地方から北海道の沿岸で繁殖。本州以南で冬鳥。ロシアや日本など極東沿岸域に分布。	
出典	「第6回自然環境保全基礎調査 鳥類繁殖分布調査報告書」（平成16年3月環境省自然環境局 生物多様性センター）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の海域を飛翔する個体等が確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：秋季1箇所1例 冬季1箇所12例
予測結果（工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34(15) 重要な種の生息状況の変化（ダイサギ）

ダイサギ（サギ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：一般保護生物（D） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	見通しの良い河川、湖沼、干潟、水田等の湿地で魚類、両生類、甲殻類等を捕食する。4 - 9 月に一夫一妻で繁殖する。マツ林、雑木林、竹林等の樹上に枯れ枝を利用し、粗雑な皿形の巣を造る。3-5 卵を産む。 産まれた順に抱卵を始めるため、非同時孵化が起こる。コサギ、チュウサギ、アマサギ、ゴイサギ、アオサギ等他のサギ類と混生して、集団で繁殖する。非繁殖期にも集団でねぐらをとることが多い（行徳野鳥観察舎友の会, 2005）。繁殖期、住宅地に隣接した集団繁殖地では、糞や餌の吐き戻しによる悪臭、雛や親鳥の大きな鳴き声に対し、近隣の住民より苦情が出されることがある。	 現地調査での確認個体
分布	世界中の熱帯、温帯で繁殖する。国内では 2 亜種が分布している。亜種チュウダイサギ <i>Egretta alba modesta</i> が、各地で繁殖する。チュウダイサギは、主に関東以西で繁殖する。冬期は南に渡る。大部分の個体は、フィリピン等の東南アジアへ移動し、越冬する。亜種ダイサギ <i>Egretta alba alba</i> は冬鳥。亜種ダイサギの飛来数は少ない。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域上空及び対象事業実施区域外の南側の海域を飛翔する個体及び護岸上で休息する個体等が確認された。	
	対象事業実施区域内：初夏季 1 箇所 1 例	対象事業実施区域外：春季 2 箇所 2 例 夏季 2 箇所 2 例 秋季 3 箇所 3 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域上空を飛翔する個体が確認されたものの、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内に存在しないことから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	

表 7-2-8.34(16) 重要な種の生息状況の変化（チュウサギ）

チュウサギ（サギ科）		
指定状況	⑤環境省 RL：準絶滅危惧（NT） ⑥千葉県 RL：重要保護生物（B） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	 現地調査での確認個体
種の特性	草地、水田、湖沼、河川等の湿地に生息する。主にカエル類やトカゲ類、魚類、昆虫類を捕食する。繁殖期は4～9月である。一夫一妻である。マツ林や雑木林等の樹上に営巣する。枯れ枝を利用し、粗雑な皿形の巣を造る。3～5卵を産む。産卵した順に抱卵を始めるため、非同時孵化が起こる。チュウサギはアマサギ、ダイサギ、コサギ、ゴイサギなど他のサギ類と混生して集団繁殖コロニーを形成する。夏から秋にかけ集団で埒をとることがある。	
分布	九州から本州にかけての水田や草地、河川などに夏鳥として渡来する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課） 「東京都レッドデータブック（本土部）2023」（令和5年3月 東京都環境局）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の護岸上で休息する個体等が確認された。 対象事業実施区域内：確認無し 対象事業実施区域外：夏季2箇所2例	
予測結果（工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	

表 7-2-8.34(17) 重要な種の生息状況の変化（コサギ）

コサギ（サギ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：重要保護生物（B） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	 現地調査での確認個体
種の特性	河川、湖沼、沼沢地、水田、海岸、干潟、潮間帯湿地、塩性湿地、河口域等の湿地、水辺に見られる。ドジョウ、フナなどの魚類、カエル類やアメリカザリガニなどを餌とする。泥の中で足をかき回し魚等の小動物を追い出して捕食する動作も見られる。4-9月に一夫一妻で繁殖する。マツ林、雑木林、竹林等の樹上に枯れ枝を利用し、粗雑な皿形の巣を造る。4-7 卵を産む。抱卵は初卵の直後に始まるため、非同時孵化が起こる。ダイサギ、チュウサギ、アマサギ、ゴイサギ、アオサギ等他のサギ類と混生して、集団で繁殖する。非繁殖期にも集団でねぐらをとることが多い（行徳野鳥観察会友の会、2005）。繁殖期、住宅地に隣接した集団繁殖地では、糞や餌の吐き戻しによる悪臭、雛や親鳥の大きな鳴き声に対し、近隣の住民より苦情が出されることがある。	
分布	アジア、オーストラリア大陸、アフリカ大陸の温帯から熱帯にかけて広く分布する。国内では留鳥。本州から九州までの各地で繁殖する（環境庁、1981）。冬期、一部は南へ渡る。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南側の海域や南東側の草地上空を飛翔する個体等が確認された。 対象事業実施区域内：確認無し 対象事業実施区域外：冬季 2 箇所 3 例	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	

表 7-2-8. 34(18) 重要な種の生息状況の変化（サンショウクイ）

サンショウクイ（サンショウクイ科）		
指定状況	⑤環境省 RL：絶滅危惧Ⅱ類（VU） ⑥千葉県 RL：消息不明・絶滅生物（X）	
種の特性	森林に生息する。主に落葉広葉樹林で繁殖し、常緑広葉樹林などでも見られる。樹幹部で昆虫を捕食する。	
分布	日本から中国、ロシアにかけた極東地域で繁殖する。冬期は南に渡る。国内では夏鳥。本州以北の平地から山地で繁殖する。繁殖分布は局地的であり、現在の繁殖地は次第に減少している。繁殖生態などの詳細は不明である。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の西側の草地上空を飛翔する個体が確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：春季1箇所1例
予測結果（工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の樹林地が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、生息環境である樹林地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中的間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 施設の使用に伴う日照障害、緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、本種の生息環境である樹林地は予測地域内に広く存在する。 さらに、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8.34(19) 重要な種の生息状況の変化（ツバメ）

ツバメ（ツバメ科）		
指定状況	⑦千葉県 RL：要保護生物（C）	
種の特性	人家や駅・商店等の人の住む建造物の軒下に営巣する。一夫一妻で繁殖する。年に1-2回繁殖する。古巣もよく利用する。稀に9月に営巣することがある。主に4-7月に産卵する。一腹卵数は3-7卵である。抱卵後、13-14日で孵化する。抱卵・抱雛は主にメスが行う。給餌は雌雄共に行う。雛には、主に昆虫を与える。市川市における巣の下に落ちたフンの分析結果では、鞘翅目・双翅目・膜翅目の計17種が検出された（早川・寺山，1993）。雛は17-22日で巣立ち、離巣する。雛は独立すると湖沼、河川流域や河口のヨシ原に集団ねぐらを形成する。夏から秋に何万という大群になるねぐらも確認されている（山本ら，1999）。	
分布	北半球の温帯から亜寒帯で繁殖する（Turner & Rose, 1989）。冬期は南に渡る。熱帯地域で越冬する。国内では夏鳥。種子島以北の全国で繁殖する。北海道では主に道南に分布する。霞ヶ浦・浜名湖・九州では、越冬個体群が知られている。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域及びその周辺を飛翔する個体等が確認された。	
	対象事業実施区域内：春季2箇所4例 初夏季2箇所2例 夏季3箇所6例	対象事業実施区域外：春季2箇所2例 夏季3箇所14例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられるものの、本種は移動能力が高いことから、工事中は周辺へ忌避することが考えられる。また、本種の営巣環境となる対象事業実施区域内の人工構造物が一時的に消失するものの、本種の営巣は対象事業実施区域内では確認されていない。 さらに、営巣環境である人工構造物及び採餌環境である市街地及び草地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境及び餌資源生物の組成・量が変わることが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34 (20) 重要な種の生息状況の変化（ウグイス）

ウグイス（ウグイス科）		
指定状況	⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	体長 14～15.5cm。成鳥は頭部から尾までの背面と翼が暗い黄緑色。白色の眉斑と淡黒褐色の過眼線がある。平地から山地のササなどが茂る樹林に生息し、昆虫類や植物の種子、果実などを食べる。	
分布	北海道や高標高の場所では夏鳥。本州、四国、九州、南西諸島では留鳥。都内では丘陵地や山地の林床にササなどが繁茂した樹林で繁殖している。平地の樹林では冬に見られるのみだったが、近年は繁殖期にも生息するようになっている。	
出典	「東京都レッドデータブック（本土部）2023」（令和5年3月 東京都環境局）	
確認状況	対象事業実施区域外の北側の周辺道路の植栽の樹上、西側の事業所内の樹上等で地鳴きが確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：冬季2箇所2例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の樹林地が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、生息環境である樹林地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。	
	【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8.34 (21) 重要な種の生息状況の変化（エナガ）

エナガ（エナガ科）		
指定状況	⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	雑木林などの落葉広葉樹林にすみ、2-5月に繁殖する。7-12 卵を雌雄で14 日前後抱卵し、16 日前後で巣立つ。昆虫やその卵、樹液、漿果など多様なものを食べる。冬は群れでねぐらをとる。	現地調査での撮影写真無し
分布	九州以北で留鳥。ユーラシアの中・高緯度地域に広く分布。	
出典	「第6回自然環境保全基礎調査 鳥類繁殖分布調査報告書」（平成16年3月環境省自然環境局 生物多様性センター）	
確認状況	対象事業実施区域外の西側の公園や北側の大学施設内の樹上等で個体や地鳴きが確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外 ：夏季1箇所5例 秋季1箇所5例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の樹林地が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、生息環境である樹林地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8.34 (22) 重要な種の生息状況の変化（セッカ）

セッカ（セッカ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：一般保護生物（D） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	丈の低い乾いた草地に生息する。一夫多妻制で繁殖する（母袋, 1973）。繁殖期が長く、メスは生まれた年の秋に繁殖に参加することもある（上田, 1986）。草地で繁殖する（山階, 1934）。水田、畑、採草地、放牧地等の農耕地や河川敷で囀る姿が見られる。	
分布	熱帯域を中心にアフリカ大陸からユーラシア大陸南部、オーストラリア北部にかけて広く分布する。高緯度地方で繁殖する個体は、暖温帯から熱帯地域へ渡る。国内では留鳥。本州以南で繁殖する。寒冷地で繁殖する個体は、冬期、温暖な地域に移動する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南東側の草地等で確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：春季5箇所5個体 初夏季1箇所1例 夏季2箇所2例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の草地が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、生息環境である草地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8.34 (23) 重要な種の生息状況の変化（メジロ）

メジロ（メジロ科）		
指定状況	⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	都市緑地などにもすむが、常緑広葉樹林に多い。3-7月に樹上につり下げ型の巣をつくる。3-5卵を雌雄で11日前後抱卵し、11日後で巣立つ。昆虫や花蜜、果実などを食べる。	
分布	全国で留鳥。北海道ではおもに夏鳥。アジア東部～東南部に分布。	
出典	「第6回自然環境保全基礎調査 鳥類繁殖分布調査報告書」（平成16年3月環境省自然環境局 生物多様性センター）	
確認状況	対象事業実施区域及びその周辺の樹上等で確認された。	
	対象事業実施区域内：冬季2箇所5例 春季1箇所1例 秋季2箇所4例	対象事業実施区域外：冬季8箇所41例 初夏季2箇所2例 夏季1箇所1例 秋季2箇所3例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の樹林地が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられるものの、本種は移動能力が高いことから、工事中は周辺へ忌避することが考えられる。 また、本種の生息環境である樹林地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34(24) 重要な種の生息状況の変化（セグロセキレイ）

セグロセキレイ（セキレイ科）			
指定状況	⑦千葉県 RL：要保護生物（C）		
種の特性	体長 21cm。成鳥は背面や頸、胸などが黒く、眉斑と喉、体下面は白い。平地から山地の河川、湖沼、耕作地などに生息し、昆虫類を食べる。	 現地調査での確認個体	
分布	北海道、本州、四国、九州で留鳥。都内では平地から丘陵地の河川沿いに生息し、繁殖している。都市部の小河川沿いでも見られることがある。東京都鳥類繁殖分布調査では 1970 年代から 1990 年代、2010 年代と継続して分布が縮小傾向にある。全国的にも同様の傾向にあり、主要な生息地である礫河原の減少や環境悪化が影響している可能性がある。		
出典	「東京都レッドデータブック（本土部）2023」（令和 5 年 3 月 東京都環境局）		
確認状況	対象事業実施区域外の西側の草地で確認された。 対象事業実施区域内：確認無し 対象事業実施区域外：夏季 1 箇所 1 例		
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、主要な生息環境である水域や農耕地は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。		
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。		

表 7-2-8. 34 (25) 重要な種の生息状況の変化（ホオジロ）

ホオジロ（ホオジロ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：要保護生物（C） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	全長 17 cm。見通しのいい梢等で大きな良く通る声で囀る（山岸・明石，1981）。低木やヤブの散在する環境に生息する（樋口ら，1997）。林縁や低木林で繁殖する（山岸，1978）。集落周辺の疎林でも普通に繁殖する。広い草原や樹林内部では見られない。地上で主に草本類の種子を採食する。越冬期、大きな群れは形成せず、数羽の小群を作る。	
分布	シベリア南部からモンゴル、アムール、ウスリー地方、中国、朝鮮半島、日本に分布する（山階，1934）。国内では留鳥。主に種子島以北のほぼ全国に分布する。北方や山地で繁殖する個体は、低地や暖地に移動し、越冬する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域内のメダケ群落から地鳴きが確認された。	
	対象事業実施区域内：冬季 1 箇所 1 例	対象事業実施区域外：確認無し
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の樹林地が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられるものの、確認例数は 1 例と極めて少なく、対象事業実施区域内は主要な生息環境ではないと考えられる。また、本種は移動能力が高いことから、工事中は周辺へ忌避することが考えられる。 加えて、本種の生息環境である樹林地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。	
	【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8.34 (26) 重要な種の生息状況の変化（ミサゴ）

ミサゴ（ミサゴ科）		
指定状況	⑤環境省 RL：準絶滅危惧（NT） ⑥千葉県 RL：重要保護生物（B） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	 現地調査での確認個体
種の特性	タカの仲間。海岸・湖沼・河口等に生息する。上空から水中に突入し、足で魚を捕らえる。海岸の岩棚やアカマツ等の樹上に小枝を大量に積み上げて営巣する。	
分布	汎世界的に分布する。極地や砂漠を除く北半球全域、オーストラリアの沿岸部で繁殖する。高緯度地方で繁殖する個体は、冬期、南に渡る。アフリカ、南アメリカ等で越冬する。国内では北海道・本州・四国・九州および島嶼・伊豆諸島等で繁殖する。北日本で繁殖する個体は、南に渡り越冬する。個体数は多くない。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	令和6年5月、8月、10月、11月、12月、令和6年1月、2月に対象事業実施区域上空及び対象事業実施区域外の南側の海域等で確認された。	
	対象事業実施区域内：1例	対象事業実施区域外：11例
予測結果（工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域上空を飛翔する個体が確認されたものの、主要な生息環境である水域は対象事業実施区域内には存在しない。また、本種の営巣環境である海洋・湖沼に面した絶壁や岸辺、水辺に面するまとまった樹林地は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画であることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	

表 7-2-8. 34 (27) 重要な種の生息状況の変化（ハチクマ）

ハチクマ（タカ科）		
指定状況	⑤環境省 RL：準絶滅危惧（NT） ⑥千葉県 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	比較的大型のタカの仲間。羽色の個体変異が大きい。丘陵地から山地の森林に生息する。ハチ類をはじめとする昆虫類を多く捕食する。地中に営巣するクロスズメバチの幼虫や蛹を採食する。繁殖地への飛来は、本州中部では5月中旬以降である。カラス類や他のタカ類の古巣を利用することが多い。6月中旬にかけて1-3卵を産む。抱卵の後、約1ヶ月後に孵化する。育雛にもハチ類の巣を多く利用する。ハチ類の巣を掘り出し、幼虫や蛹を雛に与える。雛は孵化後 35-45 日の8月に巣立つ。巣立ち時期は本州で繁殖するタカ類の中で最も遅い。8月中旬から 10 月中旬にかけ、越冬地に向けて渡る。	現地調査での撮影写真無し
分布	ヨーロッパから極東地域で繁殖する。国内では夏鳥。主に近畿以北の本州から北海道で繁殖する。個体数は多くない。四国・九州でも繁殖が確認されている。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	令和 5 年 6 月に対象事業実施区域上空で飛翔する個体が確認された。	
	対象事業実施区域内：1 例	対象事業実施区域外：確認無し
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域上空を飛翔する個体が確認されたものの、確認例数は 1 例と少なく、対象事業実施区域内は主要な生息環境になっていない。また、本種の営巣環境であるまとまった樹林地は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から 2.0km 内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事間の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から 2.0km 内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34 (28) 重要な種の生息状況の変化（ハイタカ）

ハイタカ（タカ科）		
指定状況	⑤環境省 RL：準絶滅危惧（NT） ⑥千葉県 RL：重要保護生物（B） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	小型のタカの仲間。オスはおよそハトくらいの大きさ、オスはメスより小さい。オスの体重はメスの半分くらいしかない。日本産鳥類中でも、体の大きさの雌雄差が、もっとも大きな種の一つである（東條, 1991）。森林で生活する。スズメからツグミ位の小-中型の鳥類を捕食する（東條, 1993）。	 現地調査での確認個体
分布	ユーラシア大陸の中-高緯度地方と北アフリカで繁殖する。高緯度地方で繁殖する個体は、アフリカ・インド・東南アジア等に渡り越冬する。国内では北海道と本州で繁殖する。主に山地で営巣する。越冬期、全国で見られる。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	令和 5 年 3 月、12 月、令和 6 年 1 月、2 月に対象事業実施区域及びその周辺の上空で確認された。確認個体は越冬個体であると考えられる。	
	対象事業実施区域内：1 例	対象事業実施区域外：10 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域上空を飛翔する個体が確認されたものの、確認例数は 11 例と少なく、確認時期も冬季のみのため越冬個体と考えられることから、対象事業実施区域内は主要な生息環境になっていない。また、本種の営巣環境であるまとまった樹林地は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から 2.0km 内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から 2.0km 内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34 (29) 重要な種の生息状況の変化（オオタカ）

オオタカ（タカ科）		
指定状況	⑤環境省 RL：準絶滅危惧（NT） ⑥千葉県 RL：要保護生物（C） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	森林性のタカ類。平地から山地に生息する。主にハト類等の中型の鳥類を捕食する。キジ類やカモ類等やリス類・ノウサギ等の哺乳類も捕食する。スギ、アカマツ等の針葉樹に営巣する（前橋営林局、1998）。産卵期は4～5月である。通常3～4卵を産む。雛は、6月中頃から7月上旬に巣立つ。越冬期、森林だけでなく、河川敷や湖沼畔等の湿地でも見られる。	
分布	北極圏周辺を除く、ユーラシア大陸・北アメリカ大陸北部で繁殖する。北方や高地で繁殖する個体は、低地や暖地に渡り、越冬する。国内では、亜種オオタカ A・g が分布する（茂田ら、2006）。主に本州および北海道で繁殖する（環境庁自然保護局野生生物課、1996）。近年、中国地方や四国でも繁殖例が知られ、九州以北で広く繁殖している可能性がある。非繁殖期は、全国で見られる。個体数は、増加傾向にあると考えられている（Kawakami & Higuchi, 2003）。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	令和5年3月、令和6年10月に対象事業実施区域及びその周辺の上空での飛翔が確認された。 対象事業実施区域内：1例 対象事業実施区域外：2例	
予測結果（工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域上空を飛翔する個体が確認されたものの、確認例数は3例と少なく、対象事業実施区域内は主要な生息環境になっていない。また、本種の営巣環境であるまとまった樹林地は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から2.0km内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中的間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から2.0km内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34 (30) 重要な種の生息状況の変化（トビ）

トビ（タカ科）		
指定状況	⑦千葉県 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	ワシタカ類。最も身近な猛禽類と言える。「ピーヒョロロロ」とよく鳴く。海岸線から山地にまで分布する。海岸、漁港、養魚場、河口、ゴミ処理場等が集まる（茨城県，1993）。市街地でも見られる。都市化が著しく進行すると減少する（笹川，1993）。長時間高空を旋回し餌を探す。動物の死骸を採食する。昆虫類・ヘビ類・魚類・ネズミ類等も捕食する。ゴミを漁ることもある。アカマツ・モミ等の樹上に小枝を積み上げ営巣する。大きな巣は、直径 80-100cm にもなる。越冬期には集団壱を形成する。数百羽の大群を作ることがある。	 現地調査での確認個体
分布	砂漠や北極圏を除くユーラシア、アフリカ、オーストラリア各大陸に広く分布する。高緯度地方で繁殖する個体は、熱帯アフリカや東南アジアに渡り越冬する。7 亜種が知られている。国内では、亜種 トビ <i>M. m. lineatus</i> が繁殖する。国内では留鳥。ほとんどの地域で周年みられる。北海道から九州で繁殖する。沖縄では稀に迷行例がある。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	令和 5 年 3 月、5 月、8 月、9 月、10 月、11 月、12 月、令和 6 年 1 月に対象事業実施区域及びその周辺の上空で確認された。	
	対象事業実施区域内：4 例	対象事業実施区域外：16 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域上空を飛翔する個体が確認されたものの、指標行動は確認されておらず、対象事業実施区域内は主要な生息環境になっていない。また、本種の営巣環境であるまとまった樹林地は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から 2.0km 内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から 2.0km 内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8.34(31) 重要な種の生息状況の変化（ノスリ）

ノスリ（タカ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：要保護生物（C） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	 現地調査での確認個体
種の特性	タカ類。トビよりやや小さい。小型哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫類等の小動物を捕食する（石沢・千羽，1967）。山地の森林で繁殖する。耕作地のネズミ類を捕食する。	
分布	ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯域とアフリカの一部で繁殖する。高緯度地方で繁殖する個体は、温暖な地域に渡り、越冬する。国内では留鳥・冬鳥。北海道・本州・四国で繁殖する。冬期は各地で見られる。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	令和5年3月、令和6年1月、2月に対象事業実施区域及びその周辺の上空で確認された。確認個体は越冬個体であると考えられる。	
	対象事業実施区域内：1例	対象事業実施区域外：7例
予測結果（工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域上空を飛翔する個体が確認されたものの、確認時期は冬季のみのため越冬個体と考えられることから、対象事業実施区域内は主要な生息環境になっていない。また、本種の営巣環境であるまとまった樹林地は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響はないと予測する。 【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から2.0km内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から2.0km内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34 (32) 重要な種の生息状況の変化（ハヤブサ）

ハヤブサ（ハヤブサ科）		
指定状況	⑤環境省 RL：絶滅危惧Ⅱ類（VU） ⑥千葉県 RL：最重要保護生物（A） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	海岸・河川敷・湖沼・水田等の開けた場所に生息する。小型から中型の鳥類を空中で捕獲する。主に海岸の断崖の岩棚で繁殖する。	
分布	南極大陸を除く世界中に広く分布する。高緯度地方で繁殖する個体は、冬期、南に渡り、温暖な地域で越冬する。国内では全国的に見られる。ただし、繁殖個体数は、極めて少ない。北海道から九州の海岸で局地的に繁殖する。越冬期、全国で見られる。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	令和5年11月に対象事業実施区域上空で確認された。	
	対象事業実施区域内：1例	対象事業実施区域外：確認無し
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域上空を飛翔する個体が確認されたものの、確認例数は1例と少なく、対象事業実施区域内は主要な生息環境になっていない。また、本種の営巣環境となる対象事業実施区域内の人工構造物が一時的に消失するものの、本種の営巣は対象事業実施区域内では確認されていない。 さらに、営巣環境である人工構造物は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。	
	【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から2.0km内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 本種の営巣地は対象事業実施区域から2.0km内で確認されておらず、対象事業実施区域周辺は主要な生息環境として利用されていない。 また、緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34 (33) 重要な種の生息状況の変化（ニホンヤモリ）

ニホンヤモリ（ヤモリ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：一般保護生物（D） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	かつて1種とされ本州から沖縄まで広範囲に生息するとみなされていたが、近年になってその中に複数の近縁種が含まれていることが明らかとなった。本州では住宅地や商店街などの人工的な建造物が主な生息場所となっている。6から7月にかけて固い卵殻に被われた卵を2個産む。	現地調査での撮影写真無し
分布	本州～九州、周辺の島々。朝鮮南部や中国大陸東部。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の西側の公園で死体が確認された。。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：初夏季1箇所1例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の市街地（人工構造物）が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されていない。 また、本種の生息環境である市街地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。	
	【間接的影響】 工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34 (34) 重要な種の生息状況の変化（ヒガシニホントカゲ）

ヒガシニホントカゲ（トカゲ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：重要保護生物（B） ⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	幼体は尾が鮮やかな青色であるが、成長するにつれ色あせ、成熟個体では胴体と尾が同じ茶褐色となる。胴体の中央部の胴回りの鱗の数は 24-28 で 26 が普通。なお、2006 年に改訂された日本爬虫両棲類学会の標準和名リストに従い学名を <i>Eumeces latiscutatus</i> （Hallowell, 1860）から変更した。	
分布	海道～九州、周辺の島々。ロシア沿海州。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編〈2011 年改訂版〉」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域内のメダケ群落や板切れの下等で確認された。	
	対象事業実施区域内：春季 1 箇所 1 例 夏季 1 箇所 1 例 秋季 1 箇所 1 例	対象事業実施区域外：確認無し
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の草地が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられる。本種の移動能力は高いものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、解体や造成等の工事は、段階的に実施することから、周辺へ忌避することが考えられる。 また、本種の生息環境である草地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34 (35) 重要な種の生息状況の変化（ニホンカナヘビ）

ニホンカナヘビ（カナヘビ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：一般保護生物（D）	
種の特性	日本固有種。茶褐色で背面の鱗はキールが発達してざらついた印象をあたえる。なめらかな鱗に被われ、つややかなニホントカゲと対照的。長い尾と発達した四肢を使って地上から草の上を生活場所とし、クモや小型の昆虫を捕食する。初夏に、2-6個の卵を数回にわたり産卵する。	
分布	日本固有種で、北海道・本州・四国・九州および佐渡島・隠岐・壱岐・五島列島・屋久島・種子島・中之島・諏訪之瀬島などに分布する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課） 「山溪ハンドブック 10 日本のカメ・トカゲ・ヘビ」（平成19年7月 山と溪谷社）	
確認状況	全季節をとおして対象事業実施区域及びその周辺で確認された。	
	対象事業実施区域内：春季1箇所1例 初夏季1箇所1例 夏季2箇所2例	対象事業実施区域外：春季4箇所4例 夏季1箇所1個体 秋季1箇所1個体
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の草地が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられる。本種の移動能力は高いものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、解体や造成等の工事は、段階的に実施することから、周辺へ忌避することが考えられる。 また、本種の生息環境である草地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34 (36) 重要な種の生息状況の変化（アオダイショウ）

アオダイショウ（ナミヘビ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：一般保護生物（D） ⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	本土で最大のヘビ。樹上性の傾向があり、胴体の断面はかまぼこ型で、腹の鱗の側方に側稜という強いキールがある。頭部は角張った感じがする。地色は緑がかった灰色で、シマヘビのようなストライプを薄くもつ。 幼体は地色が灰茶白色で茶色のバンドがあり、マムシと混同されることが多い。鳥類や哺乳類など主に内温性の脊椎動物を捕食する。	
分布	北海道～九州、周辺の島々。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域内の人工構造物の外壁で幼体を確認された。	
	対象事業実施区域内：初夏季1箇所1例	対象事業実施区域外：確認無し
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の市街地、草地及び樹林地が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられる。本種の移動能力は高くないものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、解体や造成等の工事は、段階的に実施することから、周辺へ忌避することが考えられる。 また、本種の生息環境である草地及び樹林地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34 (37) 重要な種の生息状況の変化（ニホンアカガエル）

ニホンアカガエル（アカガエル科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：最重要保護生物（A） ⑦千葉市 RL：最重要保護生物（A）	 現地調査での確認個体
種の特性	日本固有種。体色は鮮やかな赤褐色。ヤマアカガエルとは背側線がまっすぐに鼓膜の後方でもほとんど曲がらないことで区別できる。平地や丘陵地に生息し、冬から早春（1-3月）に水田の日当りのよい浅い止水に産卵する。	
分布	本州、四国、九州、隠岐、大隅諸島に分布する。ミトコンドリア DNA の解析によって、太平洋側では伊豆半島を境に東北日本集団と西日本集団に分化していることが明らかにされた。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南東側の草地の水たまりで幼体が確認された。 対象事業実施区域内：確認無し 対象事業実施区域外：春季 1 箇所 15 例	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の草地及び樹林地が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、生息環境である草地及び樹林地は予測地域内に広く存在する また、本種の繁殖環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止する。 また、工事中の雨水の流出による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する。 さらに、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中的間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34 (38) 重要な種の生息状況の変化（ショウジョウトンボ）

ショウジョウトンボ（トンボ科）		
指定状況	⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	全長：41.5～48.5mm。未熟成虫は橙黄色であるが、雄は成熟すると全体が赤くなり、雌は茶褐色となる。翅の基部に赤褐色斑がある。成虫は6月から9月まで見られる。交尾は飛翔しつつ行い10秒ほどで短い。雌は単独で打水産卵をする。雄は産卵雌の近くを飛びまわり警護することがある。	 現地調査での確認個体
分布	北海道南端から九州まで、国外では朝鮮・台湾・中国・東南アジア・アフリカに分布する。	
出典	「青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2020年版）」（令和2年3月 青森県）	
確認状況	対象事業実施区域外の南東側の草地で確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：夏季1箇所1例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の草地が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、生息環境である草地は予測地域内に広く存在する。 また、本種の繁殖環境である水域は対象事業実施区域内には存在しないことから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。	
	【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中的間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34(39) 重要な種の生息状況の変化（ショウリョウバッタモドキ）

ショウリョウバッタモドキ（バッタ科）		
指定状況	⑦千葉県 RL：要保護生物（C）	
種の特性	体長（翅端まで）雄 27～35 mm，雌 45～57 mm。淡緑色と褐色の 2 型がある。背面は淡紅色で直線状。頭頂が尖り，全体細長い。主にチガヤの優占する草原にすみ草の茎にとまっている。人が近づくと反対側に回って隠れる性質がある。成虫の出現初期にあたる 8 月頃には，希に灯火に飛来することがある。	 現地調査での確認個体
分布	本州，四国，九州，伊豆諸島，南西諸島。国外では中国，台湾，東南アジアに分布する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南東側の草地、北側の周辺道路沿いの草地等で確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外 ：初夏季 1 箇所 1 個体 夏季 9 箇所 18 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の草地が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、生息環境である草地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34 (40) 重要な種の生息状況の変化（フタテンカメムシ）

フタテンカメムシ（カメムシ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：要保護生物（C）	
種の特性	体長 12mm 前後。小楯板の前側に黄白色の小斑点があるが、一見、黒褐色に見える地味なカメムシで、海岸近くのイネ科植物の根の周辺に生息する。	
分布	北海道～九州。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南東側の草地で確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：夏季 1 箇所 2 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の寄主植物である対象事業実施区域内のイネ科草本が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されていない。 また、寄主植物であるイネ科草本は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、本種の寄主植物であるイネ科草本の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等により、本種の寄主植物であるイネ科草本の生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34(41) 重要な種の生息状況の変化（イネカメムシ）

イネカメムシ（カメムシ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：要保護生物（C）	
種の特性	体長 12mm 前後。イネ科植物で生息し、イネの害虫と知られるが、千葉県では被害は聞かない。シロヘリカメムシに酷似するが、頭部側葉が中葉より若干長く、左右側葉が接していないことにより区別できる。	
分布	本州～琉球。台湾、中国。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南東側の草地で確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：夏季 1 箇所 1 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の寄主植物である対象事業実施区域内のイネ科草本が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されていない。 また、寄主植物であるイネ科草本は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。	
	【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、本種の寄主植物であるイネ科草本の生息環境の変化の影響が考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等により、本種の寄主植物であるイネ科草本の生息環境の変化の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34 (42) 重要な種の生息状況の変化（オオツノカメムシ）

オオツノカメムシ（ツノカメムシ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：一般保護生物（D）	
種の特性	体長 18mm 前後。鮮やかな緑色の美しいカメムシで、雄の側角は赤く大きく側方に突き出る。食樹はケンポナシを好み、時にミズキなどにも集まる。	
分布	本州～九州。台湾、朝鮮、中国。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の北側の周辺道路沿いの植栽で確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：秋季 1 箇所 1 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、寄主植物であるケンポナシ、ミズキは対象事業実施区域内には存在しない。また、越冬環境である樹林地が一時的に消失するものの、同様の環境は予測地域内に広く確認されていることから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。	
	【間接的影響】 本種の寄主植物であるケンポナシ、ミズキは対象事業実施区域周辺には存在しない。 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、本種の越冬環境である樹林地の変化の影響が考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 本種の寄主植物であるケンポナシ、ミズキは対象事業実施区域周辺には存在しない。 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等により、本種の越冬環境である樹林地の変化の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34(43) 重要な種の生息状況の変化（ハイイロゲンゴロウ）

ハイイロゲンゴロウ（ゲンゴロウ科）		
指定状況	⑦千葉県 RL：要保護生物（C）	
種の特Ⓐ性	体長 9.8～16.5mm。体型は卵形で背面には平たいが腹面にはかなり膨隆し翅端部は突出する。背面は灰黄褐色で頭頂の 1 紋、後頭縁の 2 紋、前胸背中央両側横紋、上翅 3/4 位置の波状横帯、上翅側縁中央、翅端直前の小紋、上翅の 3 点刻列と小点刻、前胸背後縁部の点刻は黒色。しかしいずれも個体変異が多く、頭頂の 1 紋が消失したり、後頭縁の 2 紋が融合して 1 紋になる個体や、上翅の波状横帯や前胸背横紋が消失する個体も少なからず出現する。背面は微細点刻を密にそなえ、小点刻を混在させる。前胸背前縁、後縁でやや密。♀では上翅側縁中央の黒紋のすぐ内方が明らかにへこむ。触角と口枝は淡黄褐色。肢は淡黄褐色～黄褐色で後附節でやや暗色。前・中附節の爪は非常に長い。腹面は淡黄褐色で腹板はやや暗色。全体に細かいしわと点刻をそなえる。	
分布	北海道、本州、四国、九州、南西諸島。国外では台湾、朝鮮半島、中国、東南アジア、インド、ヨーロッパ、北アフリカ、オーストラリア、北アメリカなどにわたりきわめて広範に分布する。	
出典	「図説 日本のゲンゴロウ」（平成 5 年 6 月 文一総合出版）	
確認状況	対象事業実施区域外の北西側の霊園の人工池で確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：夏季・秋季 1 箇所 3 例
予測結果（工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の水域（人工池）が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、本種が確認された水域（人工池）は予測地域内に残存することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う雨水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、本種が生息している水域（人工池）への排水は行わない。 また、工事中の雨水の流出による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、本種が確認された水域（人工池）は対象事業実施区域から十分離れた場所に存在していることから、工事中の間接的影響はないと予測する。	
予測結果（供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 施供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、本種が確認された水域（人工池）に排水しないことから、工事中の間接的影響はないと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34 (44) 重要な種の生息状況の変化（ヒラタウロコアリ）

ヒラタウロコアリ（アリ科）		
指定状況	⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	体長 1.5-2 mm。全身が黄褐色から暗褐色。後腹柄節と腹部は平滑で光沢がある。それ以外はほぼ全身が細かく密に彫刻される。立毛は頭部と胸部にはまったくなく、後腹柄節と腹部に少数あるのみ。頭部は薄く、背面は平坦。頭盾は幅広く、後方は凸型だが前縁は幅広く裁断され中央部は少しくぼむ。大腮は細くやや長く、多数の小歯をそなえる。触角第5節は、第3, 4節を合わせたより長く、眼の長径より長い。胸部は横から見て背面が平坦。前伸腹節刺は明瞭で、その下方にある薄板は外縁がくぼむ。腹柄節の丘部は長さと同幅がほぼ等しい。腹柄部の海綿状附属物はイガウロコアリのそれとほぼ同じ。腹部第1背板基方の縦隆起線は数多く、背板の長さの1/3 付近までのびる。照葉樹林の林床に生息し、落葉層の篩いで採集できる。	
分布	本州南岸、四国、九州、大隅諸島に分布する。南九州では、宮崎県、鹿児島県薩摩半島、甕島列島、屋久島から採集されている。	
出典	「アリの生態と分類－南九州のアリの自然史－」（平成 22 年 5 月 株式会社南方新社）	
確認状況	対象事業実施区域内のメダケ群落で確認された。	
	対象事業実施区域内：初夏季 1 箇所 1 例	対象事業実施区域外：確認無し
予測結果 (工事中)	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の照葉樹林が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられるものの、確認例数は 1 例と少なく、対象事業実施区域内は主要な生息環境になっていない。 また、本種の生息環境である照葉樹林は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 (供用時)	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34 (45) 重要な種の生息状況の変化（ツクシアオリング）

ツクシアオリング（コブガ科）		
指定状況	⑦千葉市 RL：要保護生物（C）	
種の特性	33～36mm。♂の触角は繊毛状。翅は幅広く、短い。前翅の内、外横線は直線的である。♂♀で斑紋は同じであるが、後翅は♂は黄色、♀は白色である。寄主植物はマテバシイ（ブナ科）。	
分布	本州、四国、九州。本州では千葉県以西で得られている。マテバシイの植栽によって分布が拡大していると考えられている。国外では、台湾に分布する。	
出典	「日本産蛾類標準図鑑Ⅱ」（平成 23 年 4 月 学研教育出版）	
確認状況	対象事業実施区域内の植栽、対象事業実施区域外の西側の公園の樹林で確認された。	
	対象事業実施区域内：夏季 1 箇所 1 例	対象事業実施区域外：夏季 1 箇所 1 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の寄主植物である対象事業実施区域内のマテバシイが消失し、対象事業実施区域内で生息する個体への影響考えられるものの、本種は移動能力が高いことから、工事中は周辺へ忌避することが考えられる。 また、本種の寄主植物であるマテバシイは予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。	
	【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、本種の寄主植物であるマテバシイの生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-8. 34 (46) 重要な種の生息状況の変化（マエグロシラオビアカガネヨトウ）

マエグロシラオビアカガネヨトウ（ヤガ科）		
指定状況	⑦千葉市 RL：重要保護生物（B）	
種の特性	開張：36～40mm。♂の触角はやや葉片状、♀は刺毛を伴う糸状。シラオビアカガネヨトウに似ているが、前翅内横線白帯は前縁に達しない。♂交尾器ではベシカ基部に鋸歯状になる骨化部は2列になる。寄主植物はシシガシラ（シシガシラ科）、タマシダ（ツルシダ科）、クサイチゴ（バラ科）、キダチチョウセンアサガオ（ナス科）、ハマニンドウ（スイカズラ科）、ミズヒキ（タデ科）。	 現地調査での確認個体
分布	本州、伊豆諸島、四国、九州、対馬、屋久島に分布する。国外では、台湾、中国に分布する。	
出典	「日本産蛾類標準図鑑Ⅱ」（平成 23 年 4 月 学研教育出版）	
確認状況	対象事業実施区域外の西側の公園の樹林で確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域外：初夏季 1 箇所 1 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境である樹林地が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、生息環境である樹林地は予測地域内に広く存在する。 また、本種の寄主植物の一つである対象事業実施区域内のタマシダが消失するものの、対象事業実施区域外にも確認されていることから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、本種の生息環境及び寄主植物であるタマシダの生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-8. 34(47) 重要な種の生息状況の変化（ゲジ）

ゲジ（ゲジ科）			
指定状況	⑥千葉県 RL：重要保護生物（B）		
種の特性	体長 20-25mm。体は灰黄色、淡緑色または暗緑色の 3 条線が背部を縦走する。頭の両側に偽複眼をもつ。触角および歩肢の附節は多数の小節からなり、極めて長い。第 1, 3, 5, 7+8, 10, 12, 14, 15 背板は大きく発達し、後縁中央に気門が開口（第 15 背板を除く）する。	 現地調査での確認個体	
分布	日本各地。		
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）		
確認状況	全季節をととして対象事業実施区域及びその周辺で確認された。		
	対象事業実施区域内：初夏季 1 箇所 1 例 夏季 2 箇所 5 例 秋季 4 箇所 10 例	対象事業実施区域外：初夏季 1 箇所 2 例 夏季 3 箇所 6 例 秋季 2 箇所 11 例	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の市街地（人工構造物）、草地及び樹林地が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられる。本種の移動能力は高いもの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、解体や造成等の工事は、段階的に実施することから、周辺へ忌避することが考えられる。 また、本種の生息環境である市街地、草地及び樹林地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。		
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。		

表 7-2-8. 34 (48) 重要な種の生息状況の変化（オオゲジ）

オオゲジ（ゲジ科）		
指定状況	⑥千葉県 RL：重要保護生物（B）	現地調査での撮影写真無し
種の特性	体長7センチほどになり、足は長く左右に15対、計30本もある。前方の足から後方の足先までは20センチに達する。ムカデと同じ祖先から進化し、強力な毒牙と扁平な体で狭いところに入って狩りをするムカデとは異なり、ゲジはしなやかかつ長い足による素早い動きで獲物を捕らえるよう進化した。体は黒か暗褐色で背には黄やオレンジの斑がある。足は赤褐色や褐色で、体ほど黒くはなく、前は短く後ほど長い。複眼（偽複眼）を持つため視力は良く、顔は一見コオロギに似る。	
分布	関東以西、南西諸島、東南アジアに分布。	
出典	天城町文化財データベース（天城町歴史文化産業科学資料センターホームページ）	
確認状況	春季に確認された。	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の市街地（人工構造物）、草地及び樹林地が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられる。本種の移動能力は高くないものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、解体や造成等の工事は、段階的に実施することから、周辺へ忌避することが考えられる。 また、本種の生息環境である市街地、草地及び樹林地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

③ 環境保全措置

本事業では、工事中における樹木の伐採、切土又は盛土、仮設工事、基礎工事及び施設の設置工事並びに施設の存在等に伴う動物の影響を低減するために、次のような措置を講じる計画である。

【計画段階で配慮し、予測に反映されている環境保全措置】

- ・「千葉県自然環境保全条例」及び「習志野市自然保護及び緑化の推進に関する条例」に準じた緑化に努め、敷地面積の20%（0.72ha）以上を緑地とする。
- ・植栽する樹種は、対象事業実施区域の立地条件を考慮し、地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める。
- ・解体や造成等の工事は、段階的に実施する。
- ・建設機械は、低騒音型重機の使用に努め、騒音の発生源を最小限にする。

【追加的に実施を検討し、予測に反映されている環境保全措置（チョウゲンボウを対象）】

- ・工事の開始時期は、チョウゲンボウの非繁殖期（7月～12月）とする。
- ・代替巣への移動を促進するため、旧清掃工場及び現清掃工場の解体工事前に、既存の営巣地（ダクト）を非繁殖期に閉鎖する。
- ・旧清掃工場の解体工事前に、現清掃工場に代替巣を設置し、営巣環境を創出する。また、現清掃工場の解体時には、新清掃工場に代替巣を設置し、営巣環境を創出する。
- ・対象事業実施区域周辺の緑地を有する施設と協議に努め、草地環境の確保や管理方法等を検討し、チョウゲンボウの採餌環境を確保するよう努める。

④ 評価

ア. 評価の手法

動物の評価は、予測結果を基に以下に示す事項について、事業者により実行可能な範囲内で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているかどうかを検討することにより評価する。

- ・構成生物の種組成の多様性の保全
- ・重要な種の保全

イ. 評価の結果

構成生物の種組成の多様性の保全、重要な種の保全に対する、環境保全措置の実施方法等について検討した結果、地域を特徴づける種または指標性の高い種であるチョウゲンボウについては、工事の実施に伴う直接改変により、対象事業実施区域内で繁殖している2ペアの営巣地は消失する。しかし、「③ 環境保全措置」に示す措置を講じることから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り低減あるいは代償措置が図られている。

また、チョウゲンボウ以外の動物については、対象事業実施区域内を生息環境としている種はいるものの、同様の環境は予測地域内に広く存在しており、これらは改変されない。また、「③ 環境保全措置」に示す措置を講じることから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減が図られている。

7-2-9 生態系

1. 工事の実施・土地又は工作物の存在及び供用

- (1) 切土又は盛土、工作物の撤去又は廃棄、仮設工事、基礎工事、施設の設置工事並びに施設の存在等に伴う生態系

① 調査

ア. 調査すべき情報

(ア) 地域特性に関する情報

(イ) 生態系の現況

イ. 調査地域

調査地域は、事業の実施が生態系へ影響を及ぼすおそれのある範囲として、植物及び動物と同様に対象事業実施区域の敷地境界から概ね200mの範囲を基本とした。また、猛禽類等の行動範囲の広い種を対象とする場合は、対象種の特性に応じて適宜範囲を拡大した。

文献等の収集は「第3章 対象事業実施区域及びその周囲の概況」で把握した範囲と同様とした。

ウ. 調査地点等

調査地点は、植物及び動物の各調査地点と同様とした。

エ. 調査手法

生態系の調査は、現地調査による植物及び動物の調査結果と文献その他の資料から得られた情報の整理・解析により以下の方法で行うものとした。

(ア) 地域特性に関する情報

調査地域における地域特性に関する情報（地形・地質、土壌等、生態系）について既存文献を収集・整理した。

(イ) 生態系の概況

i 調査地域の区分

調査地域の環境を地形や植生等の現地調査結果を目安に類型区分した。類型区分にあたっては、植物及び動物の生育・生息環境としてのまとまりを考慮して区分した。

また、事業の影響が調査地域の生態系のどのような生育・生息環境に及ぶことが想定されるかについて、事業計画の内容から影響要因の種類と範囲などを想定し、評価の際に重要と考えられる生育・生息環境を抽出した。

ii 生態系構成要素の把握

生態系構成要素は、植物及び動物調査によって整理された植物相及び動物相と、これらが成立する基盤となる地形などを基に、既存の生態学的な知見を参考として把握した。動物では生息場所の利用などの生活史や捕食・被食などの種間の関係、生息を規定する環境要因などを把握した。植物種及び植物群落では、分布域、生育場所、群落の相観などを把握した。

iii 注目種・群集の抽出

生態系への影響を予測・評価するための注目種を選定した。注目種は貴重な動植物種や群落、個体群のほか、生態系の上位に位置する性質の種（上位性）、地域の生態系の特徴を典型的に現す性質の種（典型性）、特殊な環境であることを示す指標となる性質の種（特殊性）のうちから当該生育・生息環境の特性を踏まえ、適切かつ効果的な種を選定した。注目種と他の生物種の関係性、注目種または関連する種の生育・生息環境については、植物及び動物の調査結果を基に把握した。

オ．調査期間

調査期間は、植物及び動物の調査期間と同様とした。

カ．調査結果

（ア）地域特性に関する情報

地域特性に関する情報については、「第3章 都市計画対象事業実施区域及びその周囲の概況」に示したとおりである。

(イ) 生態系の現況

i 調査地域の区分

地形、水象、植生等の情報をもとに調査地域の環境類型区分を行った。

環境類型区分は、表 7-2-9.1及び図 7-2-9.1に示すとおりである。

調査地域の地形は、旧水面埋立地（埋立地）となっており、対象事業実施区域南側には東京湾が広がっている。

調査地域内の環境は、市街地残存・植栽樹群を持った公園・墓地等、工場地帯等の市街地が16.18ha（50.8%）となっており、最も広い面積となっている。次いで、開放水域が7.28ha（22.9%）、チガヤーススキ群落、外来種二次草原、ゴルフ場・芝地等の草地が4.46ha（14.0%）、クロマツ植林、その他植林、残存・植栽樹群地等の樹林地が3.93ha（12.4%）となっている。

表 7-2-9.1 環境類型区分

環境類型 区分	地形・ 水象	植生・土地利用区分	調査地域内の構成		特徴	
			面積 (ha)	比率 (%)		
市街地	平坦地	市街地 残存・植栽樹群をもった公園、墓地等 工場地帯 造成地	16.18 (2.81)	50.8 (77.8)	事業所や道路、霊園等の造成地で、自然度の低い環境である。調査地域内で最も広い面積を占める。	
樹林地	平坦地	クロマツ植林 その他植林 その他植林（低木林） ハウライチク・ホテイチク林 残存・植栽樹群地	3.93 (0.41)	12.4 (11.4)	自然林や二次林ではなく、市街地に点在する植林、海岸沿いの防風林及び修景等を目的とした植栽による樹林地である。	
草地	平坦地	メダケ群落 クズ群落 チガヤーススキ群落 外来種二次草原 路傍・空地雑草群落 ゴルフ場・芝地	4.46 (0.39)	14.0 (10.7)	事業所や公園等にまとまった範囲で確認されたほか、道路沿道にパッチ状にみられた。草地管理の頻度等により、優占種や植生高が異なっていた。	
開放水域	人工池	開放水域	7.28 (0.00)	22.9 (0.1)	対象事業実施区域内及び隣接する事業所内、霊園内に作られた人工池である。	
	海域				調査地域内の開放水域のうち、海域（東京湾）が大部分を占める。	
合計			31.86 (3.60)	100 (100)	-	

注1）面積及び比率は、四捨五入の関係で合計が一致しないことがある。

注2）構成面積及び比率の（ ）は、対象事業実施区域の面積及び比率を示す。

ii 生態系構成要素の把握

各環境類型区分を構成する生態系の要素は、表 7-2-9.2に示すとおりである。

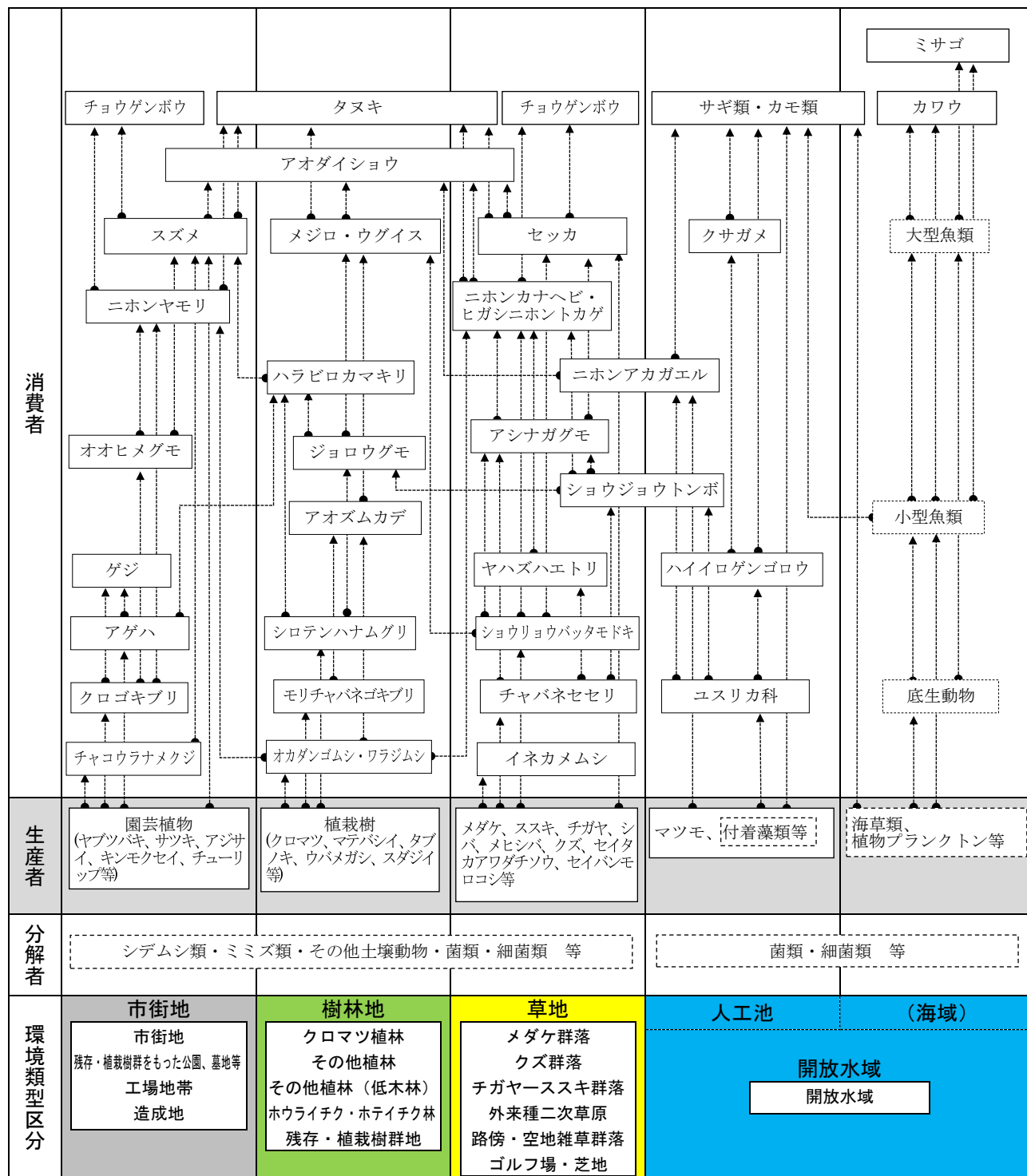
表 7-2-9.2 環境類型区分毎の生態系構成要素

環境類型区分	主な生態系構成要素	代表種
市街地	【消費者】 哺乳類：タヌキ、アブラコウモリ 鳥類：ドバト、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシブトカラス、ハシボソカラス、シジュウカラ、ツバメ、ハクセキレイ、チョウゲンボウ 爬虫類・両生類：アオダイショウ、ニホンヤモリ 昆虫類：クロゴキブリ、ヤマトシロアリ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ、モンシロチョウ、アゲハ、ヤマトシジミ その他無脊椎動物：イエユウレイグモ、オオヒメグモ、オカダンゴムシ、ゲジ、オオゲジ、イッスンムカデ、チャコウナメクジ 【生産者】 ・園芸植物（ヤブツバキ、サツキ、アジサイ、キンモクセイ、チューリップ等）	上位性：タヌキ、チョウゲンボウ 典型性：スズメ、ツバメ、ニホンヤモリ、クサギカメムシ、ヤマトシジミ 特殊性：なし
樹林地	【消費者】 哺乳類：タヌキ 鳥類：ホトトギス、コゲラ、サンショウクイ、モズ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、アトリなど 爬虫類・両生類：アオダイショウ、ニホンアカガエル 昆虫類：モリチャバネゴキブリ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、ハラビロカマキリ、シロテンハナムグリ、クロカミキリなど その他無脊椎動物：ジョロウグモ、ハラクロコモリグモ、ゲジ、オオゲジ、アオズムカデ、オカダンゴムシ、ワラジムシ 【生産者】 ・植栽樹（クロマツ、マテバシイ、タブノキ、ウバメガシ、スダジイ等）	上位性：タヌキ 典型性：ウグイス、エナガ、メジロ、シロテンハナムグリ、クロカミキリ 特殊性：なし
草地	【消費者】 哺乳類：タヌキ、アブラコウモリ 鳥類：ホトトギス、セッカ、ウグイス、ツグミ、チョウゲンボウ 爬虫類・両生類：アオダイショウ、ヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビ、ニホンアカガエル 昆虫類：ショウジョウトンボ、クビキリギス、ショウリョウバッタ、ショウリョウバッタモドキ、クロアシホソナガカメムシ、イネカメムシ、ウズラカメムシ、チャバネセセリ その他無脊椎動物：アシナガグモ、ササグモ、ヤハズハエトリ、ゲジ、オオゲジ 【生産者】 ・メダケ、ススキ、チガヤ、シバ、メヒシバ、クズ、セイタカアワダチソウ、セイバンモロコシ等	上位性：タヌキ、チョウゲンボウ 典型性：セッカ、ニホンカナヘビ、ショウリョウバッタモドキ、ヤハズハエトリ 特殊性：なし
開放水域（人工池）	【消費者】 哺乳類：なし 鳥類：サギ類、カモ類 爬虫類・両生類：クサガメ、ミシシippアカミミガメ、ニホンアカガエル 昆虫類：ショウジョウトンボ、ハイイロゲンゴロウ、アメンボ、ヒメアメンボ、ユスリカ科 その他無脊椎動物：なし 【生産者】 ・マツモ、付着藻類等	上位性：サギ類、カモ類 典型性：クサガメ、ショウジョウトンボ、ハイイロゲンゴロウ 特殊性：なし
開放水域（海域）	【消費者】 哺乳類：なし 鳥類：ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ウミネコ、カワウ、ミサゴなど 爬虫類・両生類：なし 昆虫類：なし その他無脊椎動物：なし 【生産者】 ・海草類、植物プランクトン等	上位性：ミサゴ 典型性：スズガモ、ホオジロガモ、ウミネコ、 特殊性：なし

環境類型区分毎の生態系構成要素をもとに調査地域の生態系について整理した。

調査地域における生態系の構成は、図 7-2-9.2に示すとおりである。

生態的に上位に位置づけられる種としては、タヌキ、チョウゲンボウやミサゴといった猛禽類、サギ類・カモ類といった鳥類等が該当した。



注1) 図名の矢印は被食者側(●)から捕食者側(↑)への方向を示す。

注2) 図名の種は代表的な種を整理しているため、必ずしも捕食・被食の関係が一致するものではない。

注3) 海洋生物は環境影響評価項目に選定しておらず、現地調査で確認していないため、想定される生態系構成要素を□で示す。

図 7-2-9.2 生態系模式図

iii 注目種・群衆の抽出

調査地域の生態系の構成から注目する種の抽出を行った。

注目種の選定結果は表 7-2-9.3に、確認状況は表 7-2-9.4に示すとおりである。

上位性の注目種は、対象事業実施区域内の旧清掃工場及び現清掃工場の2箇所で繁殖が確認されており、調査地域内にまとまった範囲で存在する草地を採餌環境として利用しているチョウゲンボウを選定した。

典型性の注目種は、調査地域内で最も広い面積を占める市街地で確認される種としてスズメ、調査地域内にまとまった範囲で存在する草地で確認される種としてニホンカナヘビ、ショウリョウバッタモドキ、チガヤーススキ群落を選定した。

特殊性の注目種は、該当する種がいなかったため選定しなかった。

表 7-2-9.3 注目種の選定結果

区分		注目種 (予測・評価の 対象とする種)	選定理由
上位性	生態系の上位に いると考えられる種	チョウゲンボウ	本種は、主に小型鳥類やトカゲ類、昆虫類等を餌とし、市街地及び草地における上位種である。現地調査において、調査地域内で広く確認されたほか、対象事業実施区域内の旧工場棟及び現工場棟で2ペアの繁殖が確認されたことから、上位性として選定した。
典型性	この地域に 典型的な種	スズメ	本種は、主に昆虫類や植物の種子等を餌とし、市街地で一般的にみられる小型の都市鳥の代表種である。現地調査(ポイントセンサス・ラインセンサス、任意観察)において、四季をとおして確認されているほか、対象事業実施区域内の人工構造物で営巣が確認されており、調査地域を主要な生息環境として利用していることが考えられる。 また、上位性として選定したチョウゲンボウの餌資源としての役割を担うことから典型性として選定した。
		ニホンカナヘビ	本種は、主に昆虫類やクモ類等を餌とし、市街地、草地で一般的にみられる種である。現地調査において、成体が多数確認されており、調査地域を主要な生息環境として利用していることが考えられる。 また、上位性として選定したチョウゲンボウの餌資源としての役割を担うことから典型性として選定した。
		ショウリョウバッタ モドキ	本種は、イネ科草本を食草とし、草地で一般的にみられる種である。現地調査において、草地で多数確認されており、調査地域を主要な生息環境として利用していることが考えられる。 また、上位性として選定したチョウゲンボウの餌資源としての役割を担うことから典型性として選定した。
		チガヤーススキ群落	本群落は、畑放棄地、造成跡地などに形成される二次草原である。現地調査において、対象事業実施区域及びその周辺の植栽にパッチ状にみられたほか、対象事業実施区域の南東側の事業所内で広い面積でみられ、草地を生息環境とする多くの種の生息基盤となっている。 また、上位性として選定したチョウゲンボウの採餌環境、典型性として選出したショウリョウバッタモドキ等の生息環境としての役割を担うことから典型性として選定した。
特殊性	特殊な生態 を有する種	該当なし	—

表 7-2-9.4 注目種の確認状況

区分	No.	種名	確認位置		環境類型	主な確認状況	調査地域内 における 繁殖可能性 の有無
			対象事業 実施区域				
			内	外			
			例数	例数			
上位性	1	チョウゲンボウ	198 例		市街地 草地	対象事業実施区域及びその周辺 で複数個体の生息が確認された ほか、対象事業実施区域内にお いて 2 ペアの繁殖が確認され た。	繁殖を確認した
典型性	1	スズメ	7 + 例	18 + 例	市街地 樹林地 草地	対象事業実施区域及びその周辺 で広く確認されたほか、対象事 業実施区域内の人工構造物で営 巣が確認された。	繁殖を確認した
	2	ニホンカナヘビ	4 例	6 例	草地	対象事業実施区域内のメダケ群 落や板切れの下、対象事業実施 区域外の南東側の草地、北側の 周辺道路の植栽等で確認され た。	繁殖の可能性あり
	3	ショウリョウバッタモドキ		19 例	草地	対象事業実施区域外の南東側の 草地、北側の周辺道路沿いの草 地等で確認された。	繁殖の可能性あり
	4	チガヤーススキ群落	0. 12ha	3. 07ha	主に対象事業実施区域内、対象事業実施区域 外の南東側の事業所で確認された。		—

注 1) 確認例数は、重要種としての記録及び定量調査（ポイントセンサス法、ラインセンサス法、トラップ法等）による例数を示す。

注 2) 「+」は、鳥類の任意観察法でも複数確認されていることを示す。

注 3) スズメは、ポイントセンサス法の地点 1 で確認された例数を対象事業実施区域内で確認されたものとした。

② 予 測

ア. 予測地域

予測地域は、調査地域と同様とした。

イ. 予測項目

生態系の予測は、以下に示す項目について行った。

- ・ 注目種等の生育・生息状況の変化
- ・ 予測地域の生態系の変化

ウ. 予測対象時期

予測対象時期は、工事の実施により生態系への影響が最大になると考えられる時期及び工作物の設置並びに植栽等による修景が完了した時期とした。

エ. 予測手法

予測は土地の改変など、本事業の実施に伴い発生すると想定される環境影響要因と、注目種等の生育・生息分布及び生育・生息環境との関連性を地形図・植生図等に図示し、予測地域における生態系の変化や、注目種等の生育・生息環境の消失及び保全の程度などについて、影響の予測を行った。

なお、現状では詳細な工事計画及び土地利用計画が確定していない。そのため、工事中は、対象事業実施区域内全域が改変され、造成地となるものとした。供用時は、建築物等、構内道路・駐車場等は工場地帯（植生自然度 1）になるものとし、緑地は区分（植栽樹林、芝地等）が未確定であることから、すべて植生自然度 1 とした。

オ. 予測結果

(ア) 注目種等の生育・生息状況の変化

現地調査により予測地域内で確認された、注目種の生息状況の変化についての予測結果概要は表 7-2-9.5に、予測結果は表 7-2-9.6(1)～(5)に示すとおりである。

表 7-2-9.5 注目種の生息状況の変化についての予測結果概要

区分	No.	種名	確認状況		生育・生息環境の有無		主な確認状況	影響の程度	
			内	外	内	外		工事中	供用時
上位性	1	チョウゲンボウ	198 例		○	○	対象事業実施区域及びその周辺で複数個体の生息が確認されたほか、対象事業実施区域内において2ペアの繁殖が確認された。	△	—
典型性	1	スズメ	7+例	18+例	○	○	対象事業実施区域及びその周辺で広く確認されたほか、対象事業実施区域内の人工構造物で営巣が確認された。	—	—
	2	ニホンカナヘビ	4 例	6 例	○	○	対象事業実施区域内のメダケ群落や板切れの下、対象事業実施区域外の南東側の草地、北側の周辺道路の植栽等で確認された。	—	—
	3	ショウリョウバッタモドキ		19 例	○	○	対象事業実施区域外の南東側の草地、北側の周辺道路沿いの草地等で確認された。	—	—
	4	チガヤーススキ群落	0.12ha	3.07ha	○	○	主に対象事業実施区域内、対象事業実施区域外の南東側の事業所で確認された。	—	—

注1) 「内」は対象事業実施区域内、「外」は対象事業実施区域外を示す。

注2) 確認例数は、重要種としての記録及び定量調査（ポイントセンサス法、ラインセンサス法、トラップ法等）による例数を示す。

注3) 「+」は、鳥類の任意観察法でも複数確認されていることを示す。

注4) スズメは、ポイントセンサス法の地点1で確認された例数を対象事業実施区域内で確認されたものとした。

注5) 事業実施による影響の程度は以下のとおり。

×：影響は大きい △：影響が生じる可能性がある —：影響はない(極めて小さい)

表 7-2-9.6(1) 注目種（上位性）の生息状況の変化についての予測結果（チョウゲンボウ）

チョウゲンボウ（ハヤブサ科）		
区分	上位性	 現地調査での確認状況
種の特性	体長雄 30cm、雌 33cm。雄成鳥は頭頸部、顔、腰から尾にかけて青灰色。背、翼上面は茶褐色。平地から山地の崖のほか、橋脚や煙突などの人工建造物で繁殖する。ネズミ類や小鳥、昆虫類を食べる。	
分布	北海道、本州（中部以東）では留鳥または漂鳥。本州（近畿以西）、四国、九州、南西諸島では主に冬鳥。山地の崖に営巣していたが、1990 年代以降は平地の都市部にあるビルや橋などの人工物にも営巣することも多くなった。都内では海岸の埋立地や河川敷の草地、丘陵地や低山地の耕作地や造成地、住宅地などで見られ、営巣もしており、分布は局所的だが増加傾向にある。	
出典	「東京都レッドデータブック（本土部）2023」（令和 5 年 3 月 東京都環境局）	
確認状況	現地調査において、令和 5 年 3 月～令和 6 年 2 月すべての調査月をとおして、対象事業実施区域及びその周辺において複数個体の生息が確認されており、「令和 5 年シーズン」、「令和 6 年シーズン」において、対象事業実施区域内の旧清掃工場及び現清掃工場の 2 箇所でチョウゲンボウが 2 ペア繁殖していることが確認された。 また、対象事業実施区域外の西側及び南東側の草地では探餌行動や採餌行動が確認され、対象事業実施区域周辺の草地等を採餌環境として利用しているものと考えられた。	
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、対象事業実施区域内の旧清掃工場及び現清掃工場で繁殖している 2 ペアの営巣地（ダクト）は消失する。 なお、「③ 環境保全措置」に示すとおり、工事の開始時期を非繁殖期（7 月～12 月）とし、解体工事前の非繁殖期に営巣地（ダクト）を封鎖する。また、旧清掃工場及び現清掃工場の解体工事前には代替巣を設置し、営巣環境を創出する等の環境保全措置を実施するものの、効果に不確実性があることから、工事中の直接的影響が生じる可能性があるとして予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境及び餌資源生物の組成・量が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止する。 しかし、工事の実施に伴う騒音により、対象事業実施区域内で営巣しているペアの繁殖が阻害される可能性があることから、工事中の間接的影響が生じる可能性があるとして予測する。 なお、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画である。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める。 また、対象事業実施区域周辺の緑地を有する施設と協議に努め、草地環境の確保や管理方法等を検討し、本種の採餌環境を確保するよう努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-9.6(2) 注目種（典型性）の生息状況の変化についての予測結果（スズメ）

スズメ（スズメ科）		
区分	典型性	
種の特性	市街地を含む平地から低山の人家付近にすむ。4～8月に人工物のすき間などに営巣する。4～7卵を12日前後抱卵し、14日前後で巣立つ。1繁殖期に2回繁殖するものもある。ヒナにはおもに昆虫の幼虫を給餌する。雑草の種子から昆虫まで食性が広い。	
分布	小笠原諸島を除く全国で留鳥。ユーラシアの亜寒帯～熱帯に広く分布。	
出典	「第6回自然環境保全基礎調査 鳥類繁殖分布調査報告書」（平成16年3月環境省自然環境局 生物多様性センター）	
確認状況	対象事業実施区域及びその周辺で広く確認されたほか、対象事業実施区域内の人工構造物で営巣が確認された。	
	対象事業実施区域内：冬季3例 春季3例 初夏季1例	対象事業実施区域外：春季11例 初夏季2例 夏季4例 秋季1例
予測結果 (工事中)	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の営巣環境となる対象事業実施区域内の人工構造物が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられるものの、本種は移動能力が高いことから、工事中は周辺へ忌避することが考えられる。 また、生息環境である市街地、草地及び樹林地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境及び餌資源生物の組成・量が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 (供用時)	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-9.6(3) 注目種（典型性）の生息状況の変化についての予測結果（ニホンカナヘビ）

ニホンカナヘビ（カナヘビ科）		
区分	典型性	
種の特性	日本固有種。茶褐色で背面の鱗はキールが発達してざらついた印象をあたえる。なめらかな鱗に被われ、つややかなニホントカゲと対照的。長い尾と発達した四肢を使って地上から草の上を生活場所とし、クモや小型の昆虫を捕食する。初夏に、2-6個の卵を数回にわたり産卵する。	
分布	日本固有種で、北海道・本州・四国・九州および佐渡島・隠岐・壱岐・五島列島・屋久島・種子島・中之島・諏訪之瀬島などに分布する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011年改訂版）」（平成23年3月 千葉県環境生活部自然保護課） 「山溪ハンドブック 10 日本のカメ・トカゲ・ヘビ」（平成19年7月 山と溪谷社）	
確認状況	全季節をとおして対象事業実施区域及びその周辺で確認された。	
	対象事業実施区域内：春季1箇所1例 初夏季1箇所1例 夏季2箇所2例	対象事業実施区域周辺：春季4箇所4例 夏季1箇所1個体 秋季1箇所1個体
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の草地が一時的に消失し、対象事業実施区域内に生息している個体への影響が考えられる。本種の移動能力は高くはないものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、解体や造成等の工事は、段階的に実施することから、周辺へ忌避することが考えられる。 また、本種の生息環境である草地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止する。 また、工事の実施に伴う騒音による一時的な忌避反応が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、低騒音型重機の使用等に努め、騒音の発生源を最小限にする等の環境保全措置を実施し、可能な限り影響を低減する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化及び餌資源生物の組成・量の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	



現地調査での確認個体

表 7-2-9.6(4) 注目種（典型性）の生息状況の変化についての予測結果（ショウリョウバッタモドキ）

ショウリョウバッタモドキ（バッタ科）		
区分	典型性	
種の特性	体長（翅端まで）雄 27～35 mm、雌 45～57 mm。淡緑色と褐色の 2 型がある。背面は淡紅色で直線状。頭頂が尖り、全体細長い。主にチガヤの優占する草原にすみ草の茎にとまっている。人が近づくと反対側に回って隠れる性質がある。成虫の出現初期にあたる 8 月頃には、希に灯火に飛来することがある。	
	分布	
	本州、四国、九州、伊豆諸島、南西諸島。国外では中国、台湾、東南アジアに分布する。	
出典	「千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編（2011 年改訂版）」（平成 23 年 3 月 千葉県環境生活部自然保護課）	
確認状況	対象事業実施区域外の南東側の草地、北側の周辺道路沿いの草地等で確認された。	
	対象事業実施区域内：確認無し	対象事業実施区域周辺 ：初夏季 1 箇所 1 個体 夏季 9 箇所 18 例
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、本種の生息環境となる対象事業実施区域内の草地が一時的に消失するものの、本種は対象事業実施区域内では確認されておらず、生息環境である草地は予測地域内に広く存在することから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。	
	【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害により、植物の生息環境が変化し、本種の生息環境が変化することが考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行い、粉じんの飛散を防止することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。	
	【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努めることから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

表 7-2-9.6(5) 注目種（典型性）の生息状況の変化についての予測結果（チガヤーススキ群落）

チガヤーススキ群落		
区分	典型性	
植生の特徴	本植生は、畑放棄地、造成跡地等に形成される二次草原。チガヤまたはススキが優占する。やや貧養な立地に多い。	
出典	「統一凡例（大・中・細区分一覧表）」（環境省ホームページ）	
確認状況	主に対象事業実施区域内、対象事業実施区域外の南東側の事業所で確認された。	
	対象事業実施区域内：0.10ha	対象事業実施区域周辺：1.07ha
予測結果 （工事中）	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、対象事業実施区域内に存在するチガヤーススキ群落が一時的に消失するものの、群落及び構成する種の生育環境は予測地域内に広く存在する。また、本群落を構成する種は草地環境において一般的にみられる種であることから、工事中の直接的影響は極めて小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う粉じん等による光合成の阻害等の影響が考えられるものの、「7-2-1 大気質」で示したとおり、敷地境界周辺に防じんネットや仮囲い等を設置し、適宜、散水を行う等の環境保全措置を実施することから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。	
予測結果 （供用時）	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては、地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。	

(イ) 調査地域の生態系の変化

本事業による生態系を構成する環境類型区分の面積の変化は表 7-2-9.7に、供用時の環境類型区分は図 7-2-9.3に、調査地域の生態系の変化についての予測結果は、表 7-2-9.8に示すとおりである。

表 7-2-9.7 環境類型区分の面積の変化

環境類型 区分	植生・土地利用区分	現況		供用時		増減	
		面積(ha)	比率(%)	面積(ha)	比率(%)	面積(ha)	比率(%)
市街地	市街地、工場地帯、造成地、残存・植栽樹群をもった公園、墓地等、緑地	16.18 (2.81)	50.8 (77.8)	16.98 (3.60)	53.3 (100.0)	0.80 (0.80)	104.94 (128.49)
樹林地	残存・植栽樹群地、ハウライチク・ホテイチク林、クロマツ植林、その他植林、その他植林（低木林）	3.93 (0.41)	12.4 (11.4)	3.52 (0.00)	11.1 (0.00)	-0.41 (-0.41)	89.58 (0.00)
草地	外来種二次草原、ゴルフ場・芝地、路傍・空地雑草群落、メダケ群落、クズ群落、チガヤーススキ群落	4.46 (0.39)	14.0 (10.7)	4.08 (0.00)	12.8 (0.00)	-0.39 (-0.39)	91.35 (0.00)
開放水域	開放水域	7.28 (0.01)	22.8 (0.1)	7.27 (0.00)	22.8 (0.00)	-0.01 (-0.01)	99.96 (0.00)

注1) 面積及び比率は、四捨五入の関係で合計が一致しないことがある。

注2) ()は、対象事業実施区域の面積及び比率を示す。

注3) 工事中は、対象事業実施区域全域が造成地となるものとした。

注4) 供用時は、現状では土地利用計画における詳細な緑地区分(植栽樹林、芝地等)が未確定であることから、緑地はすべて市街地の扱いとした。

表 7-2-9.8 予測地域の生態系の変化についての予測結果

確認状況	現地調査において、調査地域内で市街地 16.18ha、樹林地 3.93ha、草地 4.46ha、開放水域 7.28ha の環境類型が確認された。
予測結果 (工事中)	【直接的影響】 工事の実施に伴う直接改変により、対象事業実施区域内に存在する樹林地 0.41ha、草地 0.39ha が消失することで、これらを主な生息環境としている種への影響が考えられるものの、樹林地及び草地は予測地域内に広く存在している。 また、現況においても対象事業実施区域内は市街地が多くを占めており、環境の変化は小さいことから、工事中の直接的影響は小さいと予測する。 【間接的影響】 工事の実施に伴う対象事業実施区域周辺の生育環境の変化や粉じん等による光合成の阻害等の影響による生態系の変化が考えられるものの、樹林地や草地は予測地域内に広く確認されており、環境の変化は小さい。 また、工事の実施に伴う濁水の排水による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「7-2-2 水質」で示したとおり、敷地内の雨水は仮設沈砂池に集水し、濁水処理及び中和処理をしたうえで公共用水域に放流する計画であることから、工事中の間接的影響は極めて小さいと予測する。
予測結果 (供用時)	【直接的影響】 工事中における直接的影響の予測結果に準じる。 【間接的影響】 供用時の施設からのプラント排水や生活排水は、公共用水域に排水しない計画である。 緑化に伴う外来種の侵入、植栽の逸出等による生息環境の変化等の影響が考えられるものの、「③ 環境保全措置」に示すとおり、緑化にあたっては、地域の潜在自然植生に即した適切な樹種等の選定に努める等の環境保全措置を実施することから、供用時の間接的影響は極めて小さいと予測する。

③ 環境保全措置

本事業では、工事中における樹木の伐採、切土又は盛土、仮設工事、基礎工事及び施設の設置工事並びに施設の存在等に伴う生態系の影響を低減するために、次のような措置を講じる計画である。

【計画段階で配慮し、予測に反映されている環境保全措置】

- ・「千葉県自然環境保全条例」及び「習志野市自然保護及び緑化の推進に関する条例」に準じた緑化に努め、敷地面積の20%（0.72ha）以上を緑地とする。
- ・植栽する樹種は、対象事業実施区域の立地条件を考慮し、地域の潜在自然植生に即した樹種など適切な樹種の選定に努める。
- ・解体や造成等の工事は、段階的に実施する。
- ・建設機械は、低騒音型重機の使用に努め、騒音の発生源を最小限にする。

また、チョウゲンボウを対象とした環境保全措置は、鳥類を専門とする学識者にヒアリングを行い、その内容を踏まえて次頁のような措置を講じる計画である。なお、学識者へのヒアリング結果は表 7-2-9.9に示すとおりである。

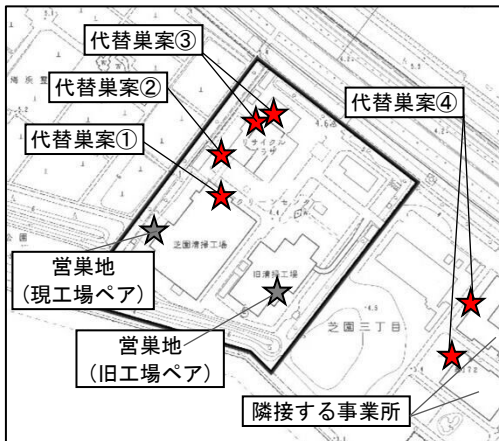
表 7-2-9.9 学識者へのヒアリング結果

項目	結果概要
調査方法及び調査結果並びに環境保全措置の妥当性について	・雛が少ないこと、餌の搬入回数が少ないこと、巣立ちが遅いことはいずれも関連しており、調査結果は妥当である。 ・餌の内容は、昆虫類、爬虫類、小型の鳥類であり、ネズミ類は捕食していなかったこと、承知した。ネズミ類を捕食しないペアであることから、「③環境保全措置」の内容は妥当である。
代替巢の設置場所について	・巣箱の設置場所は、以下を踏まえて検討すると良い。 ⇒巣の正面等の直近における工事を嫌うと考えられるため、工事場所の正面を避けると良い。なお、「③環境保全措置」の位置であれば問題ない。 ⇒雌同士は競合すること多いため、異なる壁面に設置すると良い。 ⇒電柱等、カラスがとまる場所の近くは避けると良い。 ⇒屋上の巣箱は利用されないことが多いため、壁面に設置すると良い。 ・電柱から15mの位置に巣箱を設置した際、利用されなかった経験がある。 ・見学者通路（新清掃工場南側に設ける計画）から見える位置に代替巢を設置することは良いが、南側（海側）に巣箱を設置した場合、海風による寒さを嫌うことから、利用されないと考える。
代替巢の設置時期について	・雄は繁殖期の終わり頃（6, 7月）に巣を探すため、雄のことを考えると、繁殖期後半に設置しても良い。一方で、雌は1月頃に巣を決めることから、雌のことを考えると12月までに巣箱を設置することが望ましい。雌雄で差があるため、いつ設置しても問題ない。
代替巢の仕様について	・他事例における巣箱の外寸サイズは、高さ30cm×幅50cm×奥行30cm、出入口サイズは高さ15cmである。現地調査で確認された雛数を考慮すると、外寸サイズは「③環境保全措置」のとおりで問題ない。 ・出入口サイズが大きいと天敵から逃げやすく、出入口サイズが小さいと天敵から守られるため、それぞれ利点がある。対象事業実施区域周辺では天敵である猛禽類の確認数が少ないため、出入口サイズは大小どちらでも良い。

【追加的に実施を検討し、予測に反映されている環境保全措置（チョウゲンボウを対象）】

- ・工事の開始時期は、チョウゲンボウの非繁殖期（7月～12月）とする。
- ・代替巣への移動を促進するため、旧清掃工場及び現清掃工場の解体工事前に、既存の営巣地（ダクト）を非繁殖期に閉鎖する。
- ・旧清掃工場の解体工事前に、現清掃工場に代替巣を設置し、営巣環境を創出する。また、現清掃工場の解体時には、新清掃工場に代替巣を設置し、営巣環境を創出する。なお、代替巣の設置案は表 7-2-9.10に示すとおりである。
- ・対象事業実施区域周辺の緑地を有する施設と協議に努め、草地環境の確保や管理方法等を検討し、チョウゲンボウの採餌環境を確保するよう努める。

表 7-2-9.10 代替巣の設置案

項目	内容	
	旧清掃工場解体工事～供用開始	供用後
設置場所	①現清掃工場棟北側の壁面、②渡り廊下の西側壁面、③リサイクルプラザ建屋の西側や北側の壁面、④隣接する事業所建屋西側の壁面	新清掃工場東西北の壁面（埋め込み）
		
設置数	2～3箇所	3箇所
外寸サイズ	高さ40cm×幅45cm×奥行35cm 屋根あり	高さ40cm×幅45cm×奥行35cm 屋根あり
出入口サイズ	高さ12cm×幅45cm×奥行35cm	高さ12cm×幅45cm×奥行35cm
素材	木材、床に人工芝や砂、おがくず等を敷設	鋼板、床に人工芝や砂、おがくず等を敷設
設置高さ	約10m～36m	10m以上
備考		環境教育やモニタリング調査を目的に巢内にビデオカメラを設置する。

注) 隣接する事業所とは協議前である。

④ 評 価

ア．評価の手法

生態系の評価は、予測結果を基に以下に示す事項について、事業者により実行可能な範囲内で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているかどうかを検討することにより評価した。

- ・ 注目種等の適切な保全
- ・ 周辺の生態系の保全

イ．評価の結果

注目種等の適切な保全、周辺の生態系の保全に対する、環境保全措置の実施方法等について検討した結果、調査地域における生態系の注目種（上位性）であるチョウゲンボウについては、工事の実施に伴う直接改変により、対象事業実施区域内で繁殖している２ペアの営巣地は消失する。しかし、「③ 環境保全措置」に示す措置を講じることから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り低減あるいは代償措置が図られている。

また、チョウゲンボウ以外の調査地域の生態系を構成する種については、対象事業実施区域内を生息環境及び採餌環境としている種はいるものの、同様の環境は予測地域内に広く存在しており、これらは改変されない。また、「③ 環境保全措置」に示す措置を講じることから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減が図られている。

7-2-10 景 観

1. 土地又は工作物の存在及び供用

(1) 施設の存在等に伴う景観

① 調 査

ア. 調査すべき情報

(ア) 主要な眺望点

(イ) 主要な眺望景観の状況

(ウ) 地域の景観の特性

イ. 調査地域

調査地域は、図 7-2-10.1に示すとおり、対象事業実施区域が平坦な地形に位置していることから、高さ58mの煙突の垂直見込1度以上で眺望できる範囲である対象事業実施区域から約3.4kmの範囲を基本とし、「第3章 対象事業実施区域及びその周辺の概況」で把握した眺望点の分布状況を踏まえ設定した。

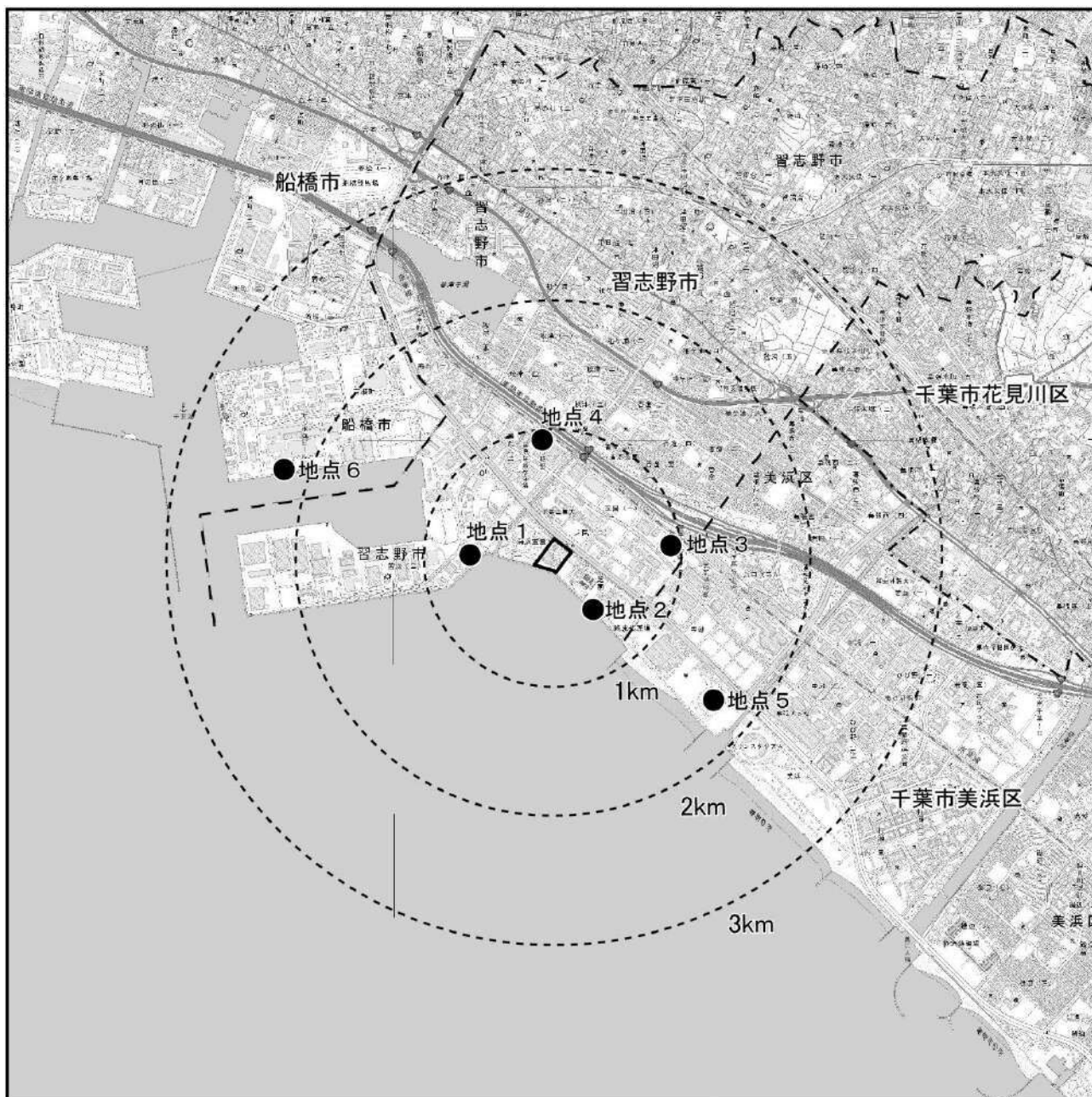
ウ. 調査地点

調査地点は、主要な眺望点を既存資料調査及び現地踏査により抽出・設定した。眺望点の設定にあたっては、煙突を含む計画施設を見通せる可能性があり、公共性、代表性、眺望の性質（日常的視点場、もしくは非日常的視点場）のある地点とした。

調査地点は、表 7-2-10.1及び図 7-2-10.1に示すとおりである。

表 7-2-10.1 景観調査地点

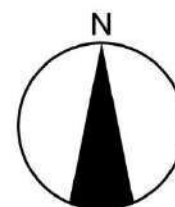
地点	市	名称	選定理由	距離
1	習志野市	茜浜緑地	対象事業実施区域の西側の主要な眺望点（非日常的な視点場）として設定した。	約0.7km
2		習志野親水護岸（展望広場）	対象事業実施区域の南東側の主要な眺望点（非日常的な視点場）として設定した。	約0.6km
3		さくら広場	対象事業実施区域の東側の主要な眺望点（非日常的な視点場）として設定した。	約0.9km
4		新習志野駅	対象事業実施区域の北側の主要な眺望点（日常的な視点場）として設定した。	約0.9km
5	千葉市	幕張海浜公園	対象事業実施区域の南東側の主要な眺望点（非日常的な視点場）として設定した。	約1.7km
6	船橋市	SHIRASE 5002	対象事業実施区域の北西側の主要な眺望点（非日常的な視点場）として設定した。	約2.2km



凡 例

- 対象事業実施区域
- 市境
- 区境
- 調査地域
- 景観調査地点

この地図は国土地理院発行の 1:25,000 地形図「浦安」「船橋」「千葉西部」「習志野」を使用したものである。



1:50,000



図 7-2-10.1 景観調査地点

エ．調査手法

(ア) 主要な眺望点及び眺望景観の状況

設定した各眺望点の利用状況を現地踏査により把握した。眺望の状況については、表 7-2-10.2に示すとおり写真撮影を行う方法により把握した。

表 7-2-10.2 撮影条件

条件	内容
焦点距離	約 35mm 相当
撮影高さ	約 1.5m

注) 人間の視野角に近い画角(約 60°)のレンズとして、35mm フィルム換算で 35mm 相当のレンズを使用した。

(イ) 地域の景観の特性

地形図等の既存資料の整理・解析及び写真撮影等の現地調査により、地域内の主要な景観構成要素及び景観資源等を調査し、地域の景観の特性を把握した。

オ．調査期間

調査期間は、季節により景観の状況が異なることを考慮し、以下に示すとおり、着葉季及び落葉季の2季とした。

着葉季：令和6年5月10日(金)、11日(土)

落葉季：令和7年1月24日(金)、30日(木)

カ．調査結果

(ア) 主要な眺望点及び眺望景観の状況

各眺望点の利用状況及び眺望の状況は、図 7-2-10.2(1)～(6)に示すとおりである。

(イ) 地域の景観の特性

対象事業実施区域は、主に現清掃工場や旧清掃工場等の人工構造物や植栽樹林等から構成されている。また、対象事業実施区域周辺は、主に市街地となっており、公園や街路樹等の植栽樹林等の自然景観があるものの、ほとんどが工作物等の都市景観となっている。対象事業実施区域の現清掃工場及び旧清掃工場の煙突及び建屋は、対象事業実施区域周辺の景観を構成する要素の一つとなっている。

	
着葉期	落葉期
【景観構成要素】 草地、樹木、現清掃工場の煙突及び建屋、旧清掃工場の煙突の一部 等 【眺望点の状況】 地域住民の憩いの場、レクリエーション活動の場等として利用されている。 対象事業実施区域西側に位置する茜浜緑地からの景観である。 【眺望景観の状況】 主要な眺望景観は、地域の都市景観（公園）となっている。 調査地点から対象事業実施区域方向をみると、公園の樹木等で一部遮られているものの、現清掃工場の煙突及び建屋、旧清掃工場の煙突の一部が視認できる。季節の違いによる眺望の変化はほとんどない。	

図 7-2-10.2(1) 調査結果：地点 1（茜浜緑地）

	
着葉期	落葉期
【景観構成要素】 海、草地、道路、現清掃工場の煙突及び建屋、旧清掃工場の煙突の一部 等 【眺望点の状況】 地域住民の憩いの場、散歩やジョギング等として利用されている。 対象事業実施区域南東側に位置する習志野親水護岸からの景観である。 【眺望景観の状況】 主要な眺望景観は、地域の都市景観（親水護岸）となっている。 調査地点から対象事業実施区域方向をみると、周辺の建物等で一部遮られているものの、現清掃工場の煙突及び建屋、旧清掃工場の煙突の一部が視認できる。季節の違いによる眺望の変化はほとんどない。	

図 7-2-10.2(2) 調査結果：地点 2（習志野親水護岸（展望広場））

	
着葉期	落葉期
【景観構成要素】 草地、池、樹木、建物 等 【眺望点の状況】 地域住民の憩いの場や散歩等として利用されている。桜が開花する季節では、花見が行われている。対象事業実施区域東側に位置するさくら広場からの景観である。 【眺望景観の状況】 主要な眺望景観は、地域の都市景観（公園・建物）となっている。 調査地点から対象事業実施区域方向をみると、周辺の建物等で遮られ、現清掃工場及び旧清掃工場の煙突及び建屋は視認できない。季節の違いによる眺望の変化はほとんどない。	

図 7-2-10.2(3) 調査結果：地点3（さくら広場）

	
着葉期	落葉期
【景観構成要素】 樹木、建物、旧清掃工場の煙突の一部 等 【眺望点の状況】 対象事業実施区域周辺の駅であり、通勤・通学などの日常生活で利用されている。対象事業実施区域北側に位置する新習志野駅からの景観である。 【眺望景観の状況】 主要な眺望景観は、地域の都市景観（建物）となっている。 調査地点から対象事業実施区域方向をみると、周辺の建物等で遮られているものの、旧清掃工場の煙突の一部が視認できる。季節の違いによる眺望の変化はほとんどない。	

図 7-2-10.2(4) 調査結果：地点4（新習志野駅）

	
着葉期	落葉期
【景観構成要素】 草地、樹木、建物 等 【眺望点の状況】 地域住民の憩いの場、レクリエーション活動の場等として利用されている。 対象事業実施区域南東側に位置する幕張海浜公園からの景観である。 【眺望景観の状況】 主要な眺望景観は、地域の都市景観（公園）となっている。 調査地点から対象事業実施区域方向をみると、公園の樹木等で遮られ、現清掃工場及び旧清掃工場の煙突及び建屋は視認できない。季節の違いによる眺望の変化はほとんどない。	

図 7-2-10.2(5) 調査結果：地点5（幕張海浜公園）

	
着葉期	落葉期
【景観構成要素】 海、建物、現清掃工場の煙突及び建屋、旧清掃工場の煙突の一部 等 【眺望点の状況】 船内の見学会や体験型のイベントの場等として利用されている。 対象事業実施区域北西側に位置するSHIRASE 5002からの景観である。 【眺望景観の状況】 主要な眺望景観は、地域の都市景観（海岸）となっている。 調査地点から対象事業実施区域方向をみると、周辺の樹木等で遮られているものの、現清掃工場の煙突及び建屋、旧清掃工場の煙突の一部が視認できる。季節の違いによる眺望の変化はほとんどない。	

図 7-2-10.2(6) 調査結果：地点6（SHIRASE 5002）

② 予 測

ア. 予測地域

予測地域は、調査地域と同様とした。

イ. 予測地点

予測地点は、調査を実施した眺望点のうち、予測地域の景観に係る環境影響を的確に把握できる地点を選定した。

ウ. 予測対象時期

予測対象時期は、供用開始後の植栽等による修景が完了した時点とした。

エ. 予測手法

(ア) 予測項目

予測項目は、本施設の設置による主要な眺望点の眺望景観の変化及び地域の景観特性の変化とした。

(イ) 予測方法

予測地点として選定した眺望点及び眺望景観に与える影響について、現況写真に計画施設を合成したモンタージュ写真を作成し、視覚的に表現することにより予測した。

オ. 予測結果

(ア) 主要な眺望点の眺望景観の変化

本施設の存在による主要な眺望点の眺望景観の変化は、表 7-2-10.3及び図 7-2-10.3(1)～(12)に示すとおりである。

表 7-2-10.3 予測地点からの眺望景観の変化（概要）

No.	予測地点	眺望景観の変化の程度	
1	茜浜緑地	△	公園内の樹木の奥に本施設の建屋及び煙突が視認されるものの、現況の煙突高さに変更がなく見え方も大きく変わらない。
2	習志野親水護岸 (展望広場)	△	周辺の建物等の奥に本施設の建屋及び煙突が視認されるものの、現況の煙突高さに変更がなく見え方も大きく変わらない。
3	さくら広場	—	周辺の建物で遮られ、本施設は視認できない。
4	新習志野駅	—	周辺の建物等の奥に本施設の煙突上部が視認されるが、手前の建物等でほとんど遮蔽される。
5	幕張海浜公園	—	公園の樹木等で遮られ、本施設は視認できない。
6	SHIRASE 5002	—	周辺の樹木等の奥に本施設の建屋及び煙突が視認されるものの、現況の見え方と大きく変わらない。

注) 眺望景観の変化の程度に整理した記号の意味は以下に示すとおりである。

○：変化はある △：変化は小さい —：変化はほとんどない

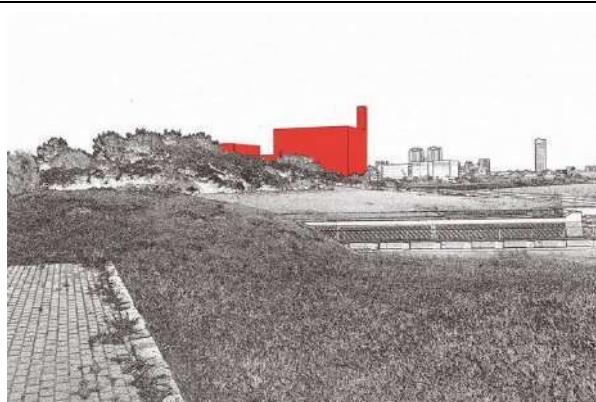
■ 現況



■ 将来



注) 本計画施設の建築物等は、現時点でのイメージである。



赤色箇所は本計画施設の建築物を示す。

公園内の樹木の奥に本施設の建屋及び煙突が視認されるものの、現況の煙突高さに変更がなく見え方も大きく変わらないことから、予測地点から見た景観構成要素の変化はほとんどないと予測する。

以上のことから、景観の変化に伴う影響は小さいと予測する。

図 7-2-10.3(1) 眺望景観の変化（地点 1：茜浜緑地（着葉季））

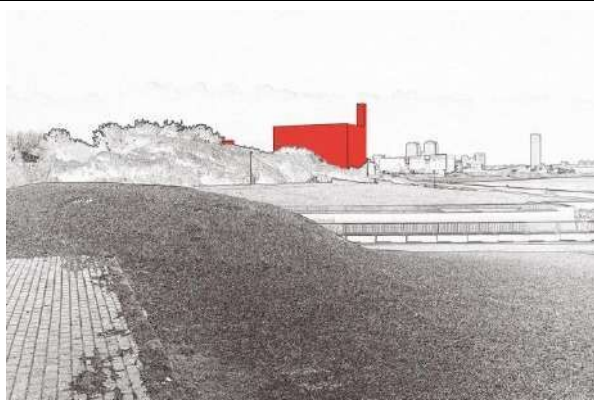
■ 現況



■ 将来



注) 本計画施設の建築物等は、現時点でのイメージである。



赤色箇所は本計画施設の建築物を示す。

公園内の樹木の奥に本施設の建屋及び煙突が視認されるものの、現況の煙突高さに変更がなく見え方も大きく変わらないことから、予測地点から見た景観構成要素の変化はほとんどないと予測する。

以上のことから、景観の変化に伴う影響は小さいと予測する。

図 7-2-10.3(2) 眺望景観の変化 (地点 1 : 茜浜緑地 (落葉季))

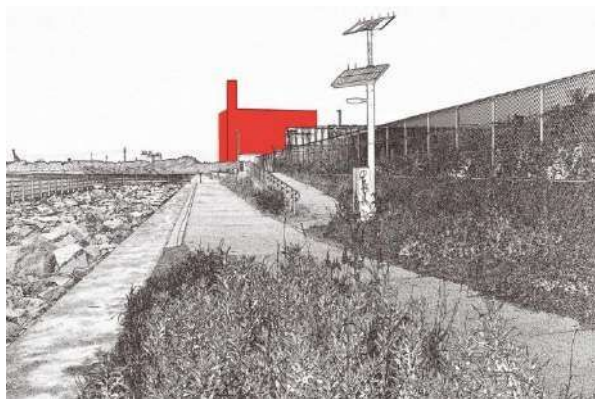
■ 現況



■ 将来



注) 本計画施設の建築物等は、現時点でのイメージである。



赤色箇所は本計画施設の建築物を示す。

周辺の建物等の奥に本施設の建屋及び煙突が視認されるものの、現況の煙突高さに変更がなく見え方も大きく変わらないことから、予測地点から見た景観構成要素の変化はほとんどないと予測する。

以上のことから、景観の変化に伴う影響は小さいと予測する。

図 7-2-10.3(3) 眺望景観の変化（地点2：習志野親水護岸（展望広場）（着葉季））

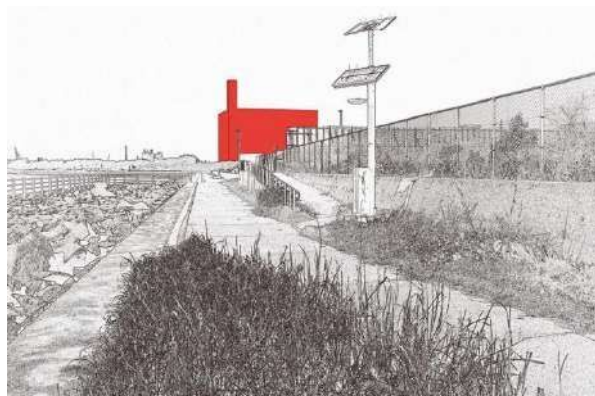
■ 現況



■ 将来



注) 本計画施設の建築物等は、現時点でのイメージである。



赤色箇所は本計画施設の建築物を示す。

周辺の建物等の奥に本施設の建屋及び煙突が視認されるものの、現況の煙突高さに変更がなく見え方も大きく変わらないことから、予測地点から見た景観構成要素の変化はほとんどないと予測する。

以上のことから、景観の変化に伴う影響は小さいと予測する。

図 7-2-10.3(4) 眺望景観の変化（地点2：習志野親水護岸（展望広場）（落葉季））

■ 現況



■ 将来



注) 本施設は視認できない。



周辺の建物で遮られ、本施設は視認できない。

以上のことから、景観の変化に伴う影響はないと予測する。

図 7-2-10.3(5) 眺望景観の変化（地点3：さくら広場（着葉季））

■ 現況



■ 将来



注) 本施設は視認できない。

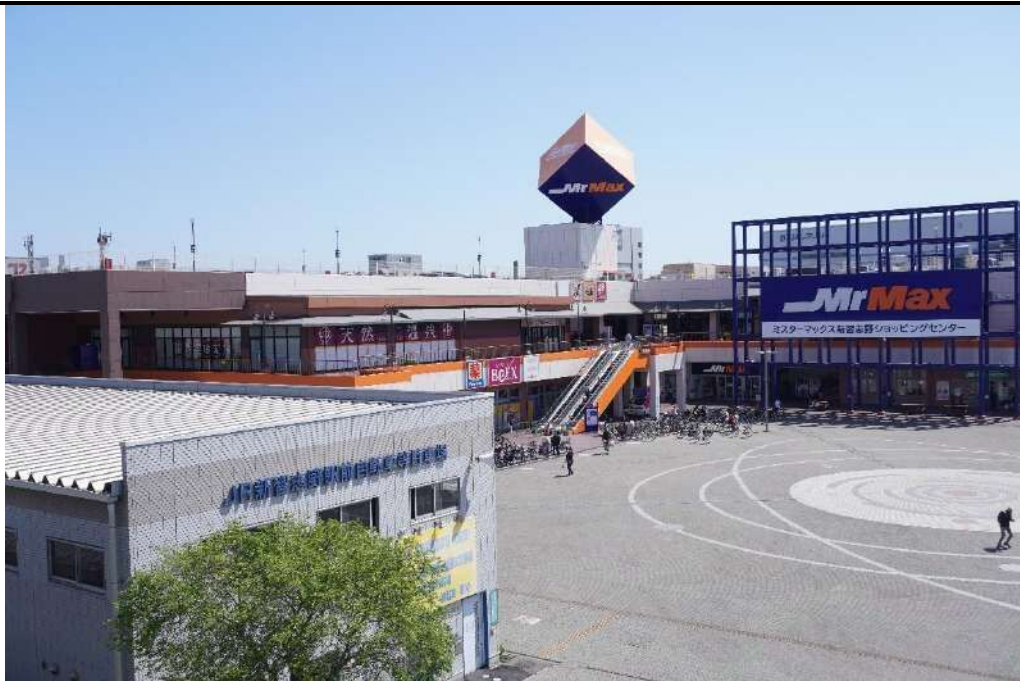


周辺の建物で遮られ、本施設は視認できない。

以上のことから、景観の変化に伴う影響はないと予測する。

図 7-2-10.3(6) 眺望景観の変化（地点3：さくら広場（落葉季））

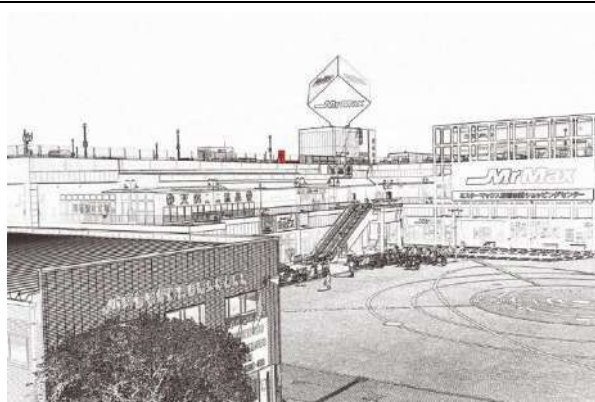
■ 現況



■ 将来



注) 本計画施設の建築物等は、現時点でのイメージである。



赤色箇所は本計画施設の建築物を示す。

周辺の建物等の奥に本施設の煙突上部が視認されるが、手前の建物等でほとんど遮蔽されることから、予測地点から見た景観構成要素の変化はほとんどないと予測する。

以上のことから、景観の変化に伴う影響は極めて小さいと予測する。

図 7-2-10.3(7) 眺望景観の変化 (地点4:新習志野駅(着葉季))

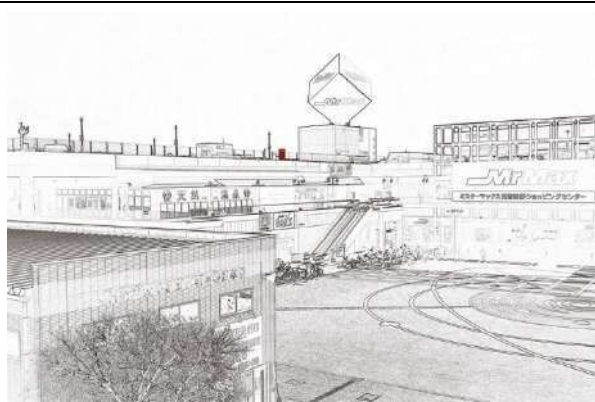
■ 現況



■ 将来



注) 本計画施設の建築物等は、現時点でのイメージである。



赤色箇所は本計画施設の建築物を示す。

周辺の建物等の奥に本施設の煙突上部が視認されるが、手前の建物等でほとんど遮蔽されることから、予測地点から見た景観構成要素の変化はほとんどないと予測する。

以上のことから、景観の変化に伴う影響は極めて小さいと予測する。

図 7-2-10.3(8) 眺望景観の変化（地点4：新習志野駅（落葉季））

■ 現況



■ 将来



注) 本施設は視認できない。



公園の樹木等で遮られ、本施設は視認できない。

以上のことから、景観の変化に伴う影響はないと予測する。

図 7-2-10.3(9) 眺望景観の変化 (地点5：幕張海浜公園 (着葉季))

■ 現況



■ 将来



注) 本施設は視認できない。



公園の樹木等で遮られ、本施設は視認できない。

以上のことから、景観の変化に伴う影響はないと予測する。

図 7-2-10.3(10) 眺望景観の変化（地点5：幕張海浜公園（落葉季））

■ 現況



■ 将来



注) 本計画施設の建築物等は、現時点でのイメージである。



赤色箇所は本計画施設の建築物を示す。

周辺の樹木等の奥に本施設の建屋及び煙突が視認されるものの、現況の見え方と大きく変わらないことから、予測地点から見た景観構成要素の変化はほとんどないと予測する。

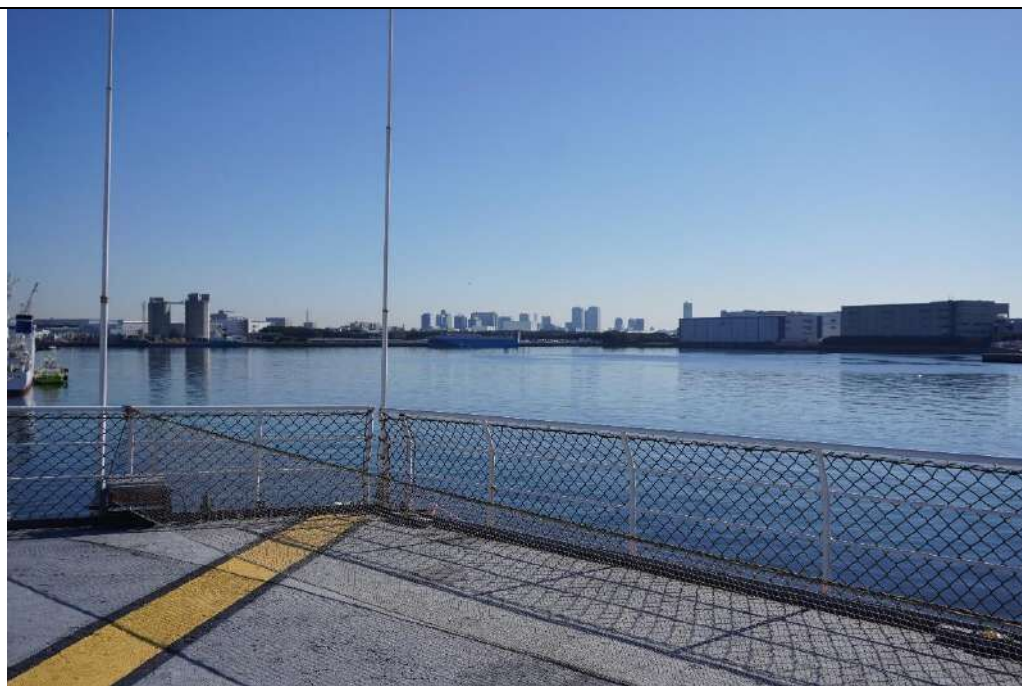
以上のことから、景観の変化に伴う影響は極めて小さいと予測する。

図 7-2-10.3(11) 眺望景観の変化（地点6：SHIRASE 5002（着葉季））

■ 現況



■ 将来



注) 本計画施設の建築物等は、現時点でのイメージである。



赤色箇所は本計画施設の建築物を示す。

周辺の樹木等の奥に本施設の建屋及び煙突が視認されるものの、現況の見え方と大きく変わらないことから、予測地点から見た景観構成要素の変化はほとんどないと予測する。

以上のことから、景観の変化に伴う影響は極めて小さいと予測する。

図 7-2-10.3(12) 眺望景観の変化（地点6：SHIRASE 5002（落葉季））

(イ) 地域の景観特性の変化

供用時における対象事業実施区域は、旧清掃工場を解体した後に本施設の工場棟や煙突、緑地等が建設され、現清掃工場を解体する。煙突高さは、現況と同様の58mである。また、「主要な眺望点の眺望景観の変化」の予測結果で示したとおり、対象事業実施区域周辺における主要な眺望点の眺望景観は、ほとんど変化がないものと考えられる。そのため、供用時における地域の景観特性は、現況と同様に、主に工作物等の都市景観であると予測する。

以上のことから、地域の景観特性の変化は小さいものと予測する。

③ 環境保全措置

本事業では、良好な景観形成に寄与するために、次のような措置を講じる計画である。

【計画段階で配慮し、予測に反映されている環境保全措置】

- ・「千葉県自然環境保全条例」及び「習志野市自然保護及び緑化の推進に関する条例」に準じた緑化に努め、敷地面積の20% (0.72ha) 以上を緑地とする。

【予測に反映されていないが環境影響の更なる回避・低減のための環境保全措置】

- ・周辺地域との調和を図るよう、建築物の色調、デザイン等について検討する。

④ 評価

ア. 評価の手法

(ア) 環境の保全が適切に図られているかどうかを検討する手法

環境保全措置の実施方法等について検討した結果、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているかについて、検討することにより評価した。

イ. 評価の結果

(ア) 環境の保全が適切に図られているかの評価

環境保全措置の実施方法等について検討した結果、「③ 環境保全措置」に示す措置を講じることから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているものと評価する。

7-2-11 人と自然との触れ合いの活動の場

1. 土地又は工作物の存在及び供用

(1) 施設の存在等に伴う人と自然との触れ合いの活動の場

① 調 査

ア. 調査すべき情報

(ア) 人と自然とのふれあいの活動の場の概況

(イ) 主要な人と自然との触れ合いの活動の場の分布、利用の状況及び利用環境の状況

イ. 調査地域

調査地域は、対象事業実施区域及びその周辺とした。

ウ. 調査地点

調査地点は、既存文献及び現地踏査により抽出・設定し、対象事業実施区域及びその周辺の主要な人と自然との触れ合いの活動の場として、表 7-2-11.1及び図 7-2-11.1に示すとおり、茜浜緑地及び海浜公園を選定した。

表 7-2-11.1 人と自然との触れ合いの活動の場の調査地点

地 点		選定理由
1	茜浜緑地	対象事業実施区域南西側に位置する、海に面した見晴らしの良い公園であり、市民等の利用が確認されているため。
2	海浜公園	対象事業実施区域西側に隣接する、海に面した見晴らしの良い公園であり、市民等の利用が確認されているため。

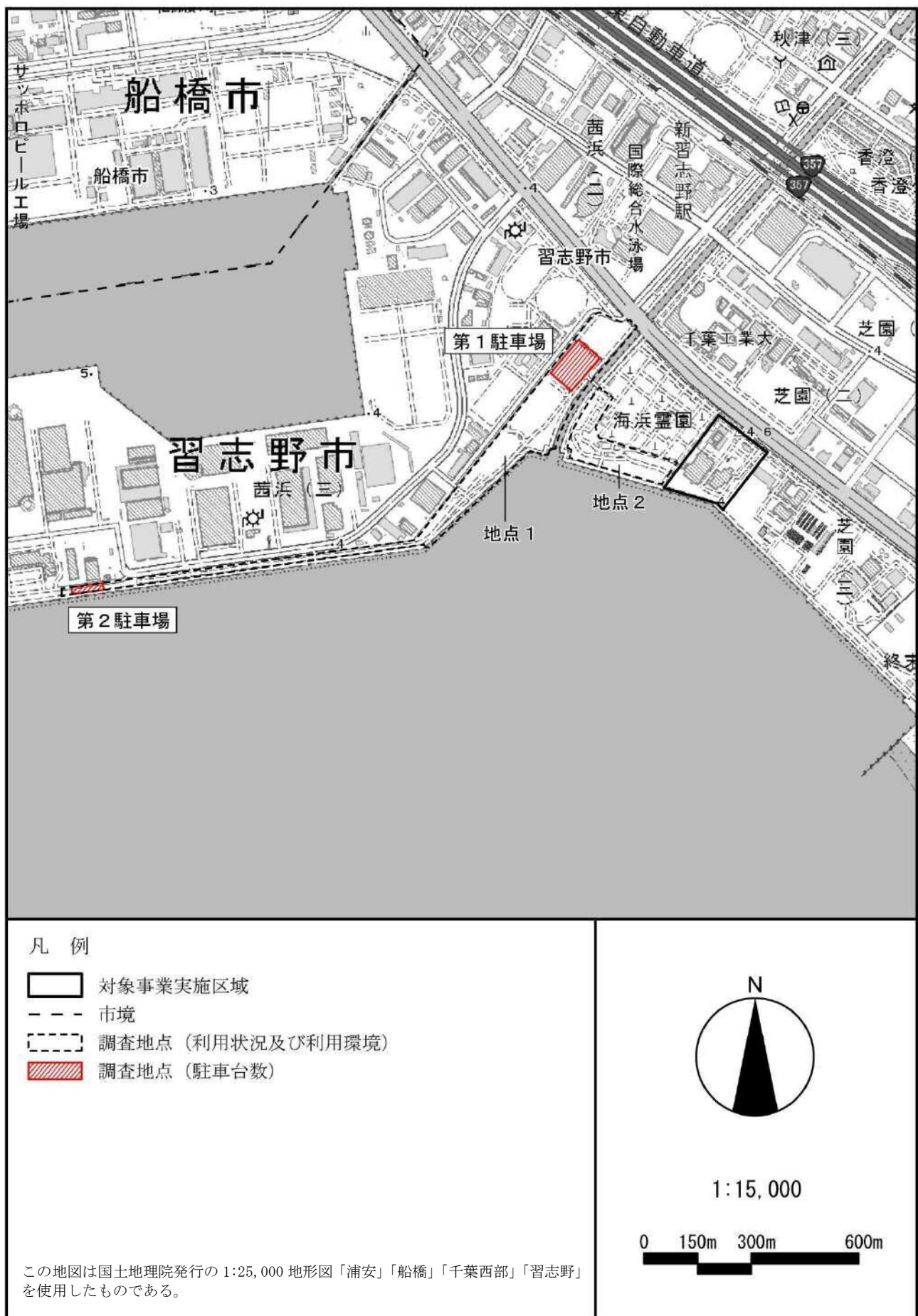


図 7-2-11.1 人と自然とのふれあいの活動の場の調査地点

エ. 調査手法

(ア) 人と自然とのふれあいの活動の場の概況

設定した主要な人と自然との触れ合いの活動の場の概況について、既存資料の整理及び現地調査等により利用者数、利用内容及び利用者の多い時期等を把握した。

また、適宜、写真撮影を行った。

(イ) 主要な人と自然との触れ合いの活動の場の分布、利用の状況及び利用環境の状況

設定した主要な人と自然との触れ合いの活動の場の分布、利用の状況及び利用環境の状況について、既存資料の整理及び現地調査等により、利用者数、利用内容等を把握した。

現地調査の具体的な内容は、下記に示すとおりとした。

- ・利用者数は、1時間毎（毎正時）に各利用環境を踏査し、目視によりカウントした。

また、駐車台数も併せて記録した。

- ・利用内容は、目視により把握して記録した。

オ. 調査期間

調査期間は、調査地域の代表的な人と自然とのふれあいの活動の場の状況を把握することができる平日及び休日（土曜日）の2日とし、以下に示す期間に実施した。

平日：令和6年10月24日（木）

休日：令和6年10月26日（土）

カ. 調査結果

(ア) 人と自然とのふれあいの活動の場の概況

人と自然とのふれあいの活動の場の概況は、表 7-2-11.2に示すとおりである。

表 7-2-11.2 人と自然とのふれあいの活動の場の概況

地点		区分	概況
1	茜浜緑地	公園・緑地	対象事業実施区域周辺に位置し、少年野球などが可能な多目的広場等がある。散策や運動等に利用されている。
2	海浜公園	公園・緑地	対象事業実施区域周辺に位置し、東京湾に面した見晴らしの良い公園である。散策や運動等に利用されている。

(イ) 主要な人と自然との触れ合いの活動の場の分布、利用の状況及び利用環境の状況

茜浜緑地及び海浜公園における、駐車場利用台数及び利用者数は表 7-2-11.3(1)、(2)に、利用状況は表 7-2-11.4に示すとおりである。

駐車場利用台数及び利用者数は、平日に比べ休日の方が多く、時間帯としては、平日は11時台、休日は15時台が最も多くなっている。

表 7-2-11.3(1) 駐車場利用台数及び利用者数（平日）

時間	茜浜緑地			海浜公園
	第1駐車場 (台)	第2駐車場 (台)	利用者数 (人)	利用者数 (人)
8時台	28	13	10	3
9時台	56	9	12	3
10時台	70	13	8	6
11時台	77	14	19	3
12時台	50	14	11	3
13時台	50	11	11	4
14時台	43	13	16	4
15時台	39	16	13	4
16時台	31	18	11	3
17時台	21	18	15	0
合計	465	139	126	33

表 7-2-11.3(2) 駐車場利用台数及び利用者数（休日）

時間	茜浜緑地			海浜公園
	第1駐車場 (台)	第2駐車場 (台)	利用者数 (人)	利用者数 (人)
8時台	34	16	15	3
9時台	68	14	23	7
10時台	67	14	25	6
11時台	74	17	39	15
12時台	54	13	27	7
13時台	58	11	30	4
14時台	74	13	35	6
15時台	77	17	39	16
16時台	64	14	34	8
17時台	15	10	19	8
合計	585	139	286	80

表 7-2-11.4 茜浜緑地・海浜公園の利用状況

利用環境		利用状況	現地状況
茜浜緑地	第1駐車場	茜浜緑地の北東側に位置する。調査期間中の利用時間は、午前8時30分から午後5時30分までであった。227台の駐車スペースが完備されている。	
	第2駐車場	茜浜緑地の北東側に位置する。調査期間中の利用時間は、午前8時30分から午後5時30分までであった。20台の駐車スペースが完備されている。	
	歩道・堤防	茜浜緑地の海及び菊田川沿いに歩道・堤防が整備されている。一部には、運動器具が設置されている。散策やジョギング等の運動、犬の散歩、自然観察、釣り等で利用されている。	
	展望台	茜浜緑地の中央及び西側に位置する。中央の展望台にはベンチが設置され、休憩や自然観察等で利用されている。	
	多目的広場	茜浜緑地の北東側に位置する。芝生及び砂地からなり、運動等で利用されている。	
海浜公園	歩道・堤防	海浜公園の海及び菊田川沿いに歩道・堤防が整備されている。散策やジョギング等の運動、犬の散歩、自然観察、釣り等で利用されている。	
	広場	海浜公園の中央に位置する。芝生が広がっており、ベンチが設置されている。散策やジョギング等の運動、犬の散歩、自然観察等で利用されている。	 

② 予 測

ア. 予測地域

予測地域は、調査地域と同様とした。

イ. 予測地点

予測地点は、調査地点と同様とした。

ウ. 予測対象時期

予測対象時期は、工事が完了し、本施設が存在する時期とした。

エ. 予測手法

(ア) 予測項目

予測項目は、本施設の存在等による主要な人と自然との触れ合いの活動の場の利便性、快適性等の利用環境の変化とした。

(イ) 予測方法

予測方法は、主要な人と自然との触れ合い活動の場の状況、本事業の内容及び環境保全措置等を勘案して予測を行った。

オ. 予測結果

施設の供用に伴い、施設の存在による景観の変化や施設の稼働による大気質、騒音、振動、悪臭等の影響が考えられる。

このうち、景観については「7-2-10 景観」に示すように、建物のデザインに配慮することにより、できる限り影響が低減されたものとなっている。また、施設の稼働による影響についても、「7-2-1 大気質」、「7-2-3 騒音及び超低周波音」、「7-2-4 振動」、「7-2-5 悪臭」で示したように、いずれの項目も周辺環境へ及ぼす影響は小さいものと評価している。

したがって、施設の供用による主要な人と自然とのふれあいの活動の場の利便性及び快適性の変化に及ぼす影響は小さいものと予測する。

③ 環境保全措置

本事業では、土地又は工作物の存在及び供用による主要な人と自然との触れ合いの活動の場への影響を低減するために、次のような措置を講じる計画である。

【計画段階で配慮し、予測に反映されている環境保全措置】

- ・排出ガスは、法規制よりも、より厳しい目標値を満足させて排出する。
- ・設備機器類は、低騒音型機器の採用に努める。
- ・設備機器類は、低振動型機器の採用に努める。
- ・ごみピットは常に負圧を保つことにより、外部への臭気の漏洩を防止する。

【予測に反映されていないが環境影響の更なる回避・低減のための環境保全措置】

- ・周辺地域との調和を図るよう、建築物の色調、デザイン等について検討する。

④ 評 価

ア．評価の手法

（ア）環境の保全が適切に図られているかどうかを検討する手法

環境保全措置の実施方法等について検討した結果、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているかについて、検討することにより評価した。

イ．評価の結果

（ア）環境の保全が適切に図られているかの評価

環境保全措置の実施方法等について検討した結果、「③ 環境保全措置」に示す措置を講じることから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているものと評価する。

7-2-12 廃棄物

1. 工事の実施

(1) 工作物の撤去又は廃棄、仮設工事、基礎工事及び施設の設置工事に伴う廃棄物

① 予 測

ア. 予測地域

予測地域は、対象事業実施区域とした。

イ. 予測対象時期

予測対象時期は、工事開始から工事終了までの全期間とした。

ウ. 予測手法

(ア) 予測項目

予測項目は、工事の実施に伴い発生する廃棄物の種類ごとの発生量、排出量、有効利用量及び最終処分量とした。

(イ) 予測方法

施工時の廃棄物の発生量、排出量及び有効利用量は、工事計画に基づいて、廃棄物の種類ごとに予測し、排出量及び有効利用量から最終処分量を算定した。

また、排出する廃棄物については、適正な処理方法を検討しその内容を明らかにした。

エ. 予測結果

既存施設の解体工事及び本施設の建設工事に伴う廃棄物の種類ごとの発生量、排出量、有効利用量、最終処分量及び処理等の方法は、表 7-2-12.1(1)、(2)に示すとおりである。

発生量のうち、金属くず(解体工事6,958 t、建設工事100 t、合計7,058 t)については、有価物(製鉄等原料)として売却し、それ以外の解体工事36,471 t、建設工事1,882 t、合計38,353 tが排出量となる。

排出する廃棄物の処理、処分方法については、当該工事が建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律(以下、「建設リサイクル法」という。)の対象工事となることから、「千葉県における特定建設資材に係る分別解体等及び特定建設資材廃棄物の再資源化等の促進等の実施に関する指針」(平成14年5月、千葉県)(以下、「千葉県建設リサイクル法実施指針」という。)に示されている基本的考え方を踏まえて、①建設資材廃棄物の発生抑制、②建設資材の再使用、③建設資材廃棄物の再生利用(マテリアルリサイクル)、④それが適切でない場合には、建設資材廃棄物の熱回収(サーマルリサイクル)を行う。最後にこれらの措置が行われないものについては適正に処分するものとする。

(ア) 特定建設資材

特定建設資材(コンクリート塊、アスファルト・コンクリート塊、建設発生木材)については、建設リサイクル法で分別解体や再資源化が義務付けられており、特定建設資材廃棄物については、分別排出を徹底し、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」により産業廃棄物の収集運搬業や処分業の許可を受けた業者に委託し、再資源化施設に搬出して処理を行う。

コンクリート塊については、破碎、選別、混合物除去、粒度調整等を行い、再生クラッシャーラン、再生骨材等としての利用を促進する。アスファルト・コンクリート塊については、破碎、選別、混合物除去、粒度調整等を行い、再生加熱アスファルト混合物、再生骨材等としての利用を促進する。建設発生木材については、チップ化し木質ボード、堆肥等、原材料として利用するとともに、熱を得ることに利用することを促進する。

(イ) 特定建設資材以外の建設資材

プラスチック製品、石膏ボードなど特定建設資材以外のものについても、廃棄物となった場合に再資源化が可能なものについては、できる限り分別を行い、再資源化を実施する。再資源化等が困難な建設資材廃棄物を最終処分する場合は、安定型最終処分場で処分すべき品目と、管理型最終処分場で処分すべき品目を分別して適正に処理する。

表 7-2-12.1(1) 解体工事に伴う廃棄物（旧清掃工場、現清掃工場及びリサイクルプラザ）

単位：t

種類	発生量	有価物	排出量	有効利用量	最終処分量	処理等の方法	
コンクリート塊	34,053	—	34,053	34,053	0	産業廃棄物処理業者に委託処理	建設リサイクル法の特定建設資材として再資源化
アスファルト・コンクリート塊	1,085	—	1,085	1,085	0		再資源化
廃プラスチック類	122	—	122	114	8		安定型最終処分場に埋立処分
金属くず	6,958	6,958	0	0	0	製鉄等原料として売却	再原料化
木くず	696	—	696	696	0	産業廃棄物処理業者に委託処理	建設リサイクル法の特定建設資材として再資源化
紙くず	7	—	7	7	0		再資源化
石膏ボード	187	—	187	0	187		管理型最終処分場に埋立処分
混合廃棄物	321	—	321	192	129		再資源化 安定型最終処分場に埋立処分
合計	43,429	6,958	36,471	36,147	324	—	

表 7-2-12.1(2) 建設工事に伴う廃棄物

単位：t

種類	発生量	有価物	排出量	有効利用量	最終処分量	処理等の方法	
コンクリート塊	380	—	380	380	0	産業廃棄物処理業者に委託処理	建設リサイクル法の特定建設資材として再資源化
アスファルト・コンクリート塊	10	—	10	10	0		再資源化
その他のがれき類	25	—	25	21	4		安定型最終処分場に埋立処分
ガラス及び陶磁器くず	5	—	5	0	5		安定型最終処分場に埋立処分
廃プラスチック類	375	—	375	350	25	製鉄等原料として売却	再資源化 安定型最終処分場に埋立処分
金属くず	100	100	0	0	0		再原料化
木くず	420	—	420	420	0	産業廃棄物処理業者に委託処理	建設リサイクル法の特定建設資材として再資源化
紙くず	32	—	32	30	2		再資源化 焼却処理
混合廃棄物	635	—	635	380	255		再資源化 埋立処分等
合計	1,982	100	1,882	1,591	291	—	

② 環境保全措置

本事業では、工事の実施による廃棄物の影響を低減するために、次のような措置を講じる計画である。

【計画段階で配慮し、予測に反映されている環境保全措置】

- ・ 廃棄物の排出量を抑制するため、廃棄物の分別排出を徹底し、資源化に努める。
- ・ 特定建設資材廃棄物については、種類ごとの分別排出を徹底し、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」により産業廃棄物の収集運搬業や処分業の許可を受けた業者に委託し、再資源化施設に搬出して処理を行う。
- ・ 特定建設資材以外の廃棄物についても、再資源化が可能なものについては、できる限り分別を実施して再資源化を行う。
- ・ 再資源化等が困難な廃棄物を最終処分する場合は、安定型最終処分場で処分すべき品目及び管理型最終処分場で処分すべき品目を分別して適正に処理する。

【予測に反映されていないが環境影響の更なる回避・低減のための環境保全措置】

- ・ 廃棄物の発生抑制のために、資源化等の実施が容易となるよう施工方法を工夫し、建築資材の選択にあたっては、有害物質等を含まないなど、分別解体や資源化等の実施が容易となるものを選択するよう努める。

③ 評価

ア．評価の手法

（ア）環境保全措置の実施の方法

環境保全措置の検討は、最終処分の量の抑制を主体に行うこととし、原則として廃棄物の発生量の抑制の手法、発生した廃棄物の有効利用の手法及び処理が必要となった廃棄物の適正な処理の手法について、事業者としての見解をとりまとめることにより行った。

（イ）環境保全措置の効果

環境保全措置の実施による廃棄物の発生及び排出抑制効果を検討した。

廃棄物の適正な処理の効果については、環境保全措置に係る減量化、再資源化の余地の有無などを含めて総合的に検討した。

イ．評価の結果

(ア) 環境保全措置の実施の方法

環境保全措置の実施方法等について検討した結果、「② 環境保全措置」に示す措置を講じることから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているものと評価する。

(イ) 環境保全措置の効果

工事の実施に伴う廃棄物の発生量及び最終処分量は、表 7-2-12.2に示すとおりである。

廃棄物の再資源化等の環境保全措置により、最終処分量は解体工事、建設工事合計で615 tと予測され、発生量45,411 tに対して抑制効果は98.6%となる。

さらに、資源化等の実施が容易となる施工方法の工夫や資材の選択等に努める等の環境保全措置を講じる計画であり、最終処分量の低減を図ることとしている。

以上のことから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているものと評価する。

表 7-2-12.2 工事の実施に伴う廃棄物の発生量及び最終処分量

区分	時期	発生量① (t)	最終処分量② (t)	排出抑制効果 (%) (①－②) / ① × 100
建設廃棄物	解体工事	43,429	324	99.3
	建設工事	1,982	291	85.3
	合計	45,411	615	98.6

2. 土地又は工作物の存在及び供用

(1) 施設の稼働に伴う廃棄物

① 予 測

ア. 予測地域

予測地域は、対象事業実施区域とした。

イ. 予測対象時期

予測対象時期は、施設の稼働が定常状態になる時期の1年間とした。

ウ. 予測の基本的な手法

(ア) 予測項目

予測項目は、施設の稼働に伴い発生する廃棄物の種類ごとの発生量、有効利用量及び最終処分量とした。

(イ) 予測方法

供用時の廃棄物の発生量、有効利用量及び最終処分量は、施設の稼働計画に基づき、廃棄物の種類ごとに予測した。

エ. 予測結果

供用時に施設から発生する廃棄物の種類及び量は、表 7-2-12.3に示すとおりである。

供用時に施設から発生する廃棄物は、合計で29.9 t/日であり、このうち主灰(21.5 t/日)を再資源化のうえ有効利用し、焼却飛灰(8.4 t/日)を再資源化又は最終処分場に埋立処分とする計画である。

表 7-2-12.3 施設から発生する廃棄物

単位：t/日

種 類	発生量	有効利用量	最終処分量	処理等の方法
主灰	21.5	21.5	0	再資源化
焼却飛灰	8.4	0	8.4	再資源化又は埋立処分
合 計	29.9	21.5	8.4	—

② 環境保全措置

本事業では、施設の稼働による廃棄物の影響を低減するために、次のような措置を講じる計画である。

【計画段階で配慮し、予測に反映されている環境保全措置】

・焼却主灰は、民間事業者に委託して資源化する。

【予測に反映されていないが環境影響の更なる回避・低減のための環境保全措置】

・焼却飛灰は、民間事業者に委託して資源化又は最終処分する。

③ 評 価

ア．評価の手法

（ア）環境保全措置の実施の方法

環境保全措置の検討は、最終処分の量の抑制を主体に行うこととし、原則として廃棄物の発生量の抑制の手法、発生した廃棄物の有効利用の手法及び処理が必要となった廃棄物の適正な処理の手法について、事業者としての見解をとりまとめることにより行った。

（イ）環境保全措置の効果

環境保全措置の実施による廃棄物の発生及び排出抑制効果を検討した。

廃棄物の適正な処理の効果については、環境保全措置に係る減量化、再資源化の余地の有無などを含めて総合的に検討した。

イ．評価の結果

（ア）環境保全措置の実施の方法

環境保全措置の実施方法等について検討した結果、「② 環境保全措置」に示す措置を講じることから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているものと評価する。

（イ）環境保全措置の効果

供用時における廃棄物の発生量及び最終処分量は、表 7-2-12.4に示すとおりである。環境保全措置により、最終処分量は合計で8.4 t /日と予測され、発生量29.9 t /日に対して抑制効果は72%となる。

以上のことから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているものと評価する。

表 7-2-12.4 施設から発生する廃棄物

種類	発生量① (t /日)	最終処分量② (t /日)	排出抑制効果 (%) (①－②) / ① × 100
主灰	21.5	0	100
焼却飛灰	8.4	8.4	0
合計	29.9	8.4	72

7-2-13 残 土

1. 工事の実施

(1) 切土又は盛土、工作物の撤去又は廃棄、仮設工事及び基礎工事に伴う残土

① 予 測

ア. 予測地域

予測地域は、対象事業実施区域とした。

イ. 予測対象時期

予測対象時期は、工事開始から工事終了までの全期間とした。

ウ. 予測手法

(ア) 予測項目

予測項目は、建設工事に伴い発生する土砂等（発生土）のうち、区域外に搬出する土砂等（残土）の量とした。

(イ) 予測方法

工事計画に基づいて発生土の量及び残土の量を予測した。

エ. 予測結果

工事に伴う残土の量は、表 7-2-13. 1に示すとおりである。

対象事業実施区域の造成及びごみピット等の掘削により発生する発生土は約19,700m³となるが、そのうち6,000m³を対象事業実施区域内において埋戻し等に使用する計画であることから、場外へ搬出する残土は13,700m³と予測される。

表 7-2-13. 1 工事の実施による残土量の予測結果

種 別	土量
発生土量	19,700m ³
場内再利用率	6,000m ³
残土量	13,700m ³

注) 土量は、地山土量を示す。

② 環境保全措置

本事業では、工事の実施による残土の影響を低減するために、次のような措置を講じる計画である。

【計画段階で配慮し、予測に反映されている環境保全措置】

- ・発生土は、盛土や埋戻しなどにより、できる限り再利用する計画とし、残土の発生を抑制する。

【予測に反映されていないが環境影響の更なる回避・低減のための環境保全措置】

- ・掘削面積を可能な限り小さくなるように配置計画を検討し、発生土を抑制する。

③ 評価

ア．評価の手法

（ア）環境保全措置の実施の方法

最終的に処分する残土の量の抑制を主体に検討することとし、発生土の量の抑制の手法、発生土及び残土の再利用の手法及び処分が必要となった残土の適正な処理の手法について、事業者の見解をまとめることにより行った。

（イ）環境保全措置の効果

環境保全措置の実施による工事の実施に伴う発生土の発生及び排出抑制効果を検討した。

発生土及び残土の適正な処理の効果については、環境保全措置に係る抑制や再利用の余地の有無等を含めて総合的に検討した。

イ．評価の結果

（ア）環境保全措置の実施の方法

環境保全措置の実施方法等について検討した結果、「② 環境保全措置」に示す措置を講じることから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているものと評価する。

（イ）環境保全措置の効果

工事に伴う発生土量は $19,700\text{m}^3$ であり、対象事業実施区域内において埋戻し等に利用することにより、残土量は $13,700\text{m}^3$ に抑制されている。

また、環境保全措置の実施により、さらに発生土及び残土の抑制に努める。

以上のことから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているものと評価する。

7-2-14 温室効果ガス等

1. 土地又は工作物の存在及び供用

(1) ばい煙又は粉じんの発生に伴う温室効果ガス等

① 予 測

ア. 予測地域

予測地域は、対象事業実施区域とした。

イ. 予測対象時期

予測対象時期は、施設が定常の稼働状態に達し、温室効果ガスの排出量が適切に把握できる時期とした。

ウ. 予測手法

(ア) 予測項目

予測項目は、「地球温暖化対策の推進に関する法律」(平成10年 法律第117号)に規定される温室効果ガス(二酸化炭素、一酸化二窒素、メタン)の発生量とした。

(イ) 予測方法

廃棄物の焼却に伴う温室効果ガスの発生量は、次の予測式により定量的に把握した。

二 酸 化 炭 素：排出量 (kg-CO₂) = 廃プラスチック類等処理量 (t) × 排出係数 (kg-CO₂/t)

一酸化二窒素：排出量 (kg-N₂O) = 廃 棄 物 処 理 量 (t) × 排出係数 (kg-N₂O/t)

メ タ ン：排出量 (kg-CH₄) = 廃 棄 物 処 理 量 (t) × 排出係数 (kg-CH₄/t)

また、その他の施設の稼働により発生する温室効果ガス及び廃棄物の焼却に伴い発生したエネルギーの有効利用による温室効果ガスの削減量について、「地方公共団体実行計画(事務事業編)策定・実施マニュアル(算定手法編) Ver2.0」(令和7年3月、環境省大臣官房地域脱炭素政策調整担当参事官室)及び「温室効果ガス排出量算定・報告マニュアル Ver6.0」(令和7年3月、環境省 経済産業省)を参考とし、事業計画に基づき定量的に把握した。

使用した排出係数は表 7-2-14.1に、地球温暖化係数は表 7-2-14.2に示すとおりである。

表 7-2-14.1 排出係数

項 目	排出係数		
	二酸化炭素	メタン	一酸化二窒素
廃棄物の焼却等	—	0.0026 kg-CH ₄ / t	0.038 kg-N ₂ O/ t
合成繊維	2,310 kg-CO ₂ / t	—	—
廃プラスチック類	2,760 kg-CO ₂ / t	—	—
都市ガスの使用（東京瓦斯株式会社）	2.05 kg-CO ₂ /m ³	—	—
軽油の使用	2.62 kg-CO ₂ /L	—	—
電力の使用（東京電力パワーグリッド）	0.000423t-CO ₂ /kWh	—	—

表 7-2-14.2 地球温暖化係数

温室効果ガス	地球温暖化係数
二酸化炭素	1
メタン	28
一酸化二窒素	265

（ウ）予測条件

施設が定常の稼働状態に達した時期における活動量は、表 7-2-14.3に示すとおりである。

表 7-2-14.3 施設の稼働に伴う活動量

項目	単位	活動量	備考
ごみ焼却処理量（排出ベース）	t /年	44,285	温室効果ガス排出
合成繊維（乾燥ベース）	t /年	753	
廃プラスチック類（乾燥ベース）	t /年	7,378	
燃料使用量	都市ガス	m ³ /年	
	軽油	kL/年	
発電量【①】	kWh/年	24,703,200	—
電力使用量	総量【②】	kWh/年	7,445,360
	うち買電分【③】	kWh/年	239,100
売電量（①+③-②）	kWh/年	17,496,940	温室効果ガス削減

エ. 予測結果

温室効果ガスの排出量及び削減量の予測結果は、表 7-2-14. 4に示すとおりである。

温室効果ガスの排出量は22, 895t-CO₂/年であり、売電による削減量が7, 401t-CO₂/年となることから、施設の稼働による温室効果ガスの排出量は15, 494t-CO₂/年と予測する。

また、参考に現施設の温室効果ガス排出量等を表 7-2-14. 5に示す。これによると、計画施設の温室効果ガスの排出量は、現施設の約38%となる。

表 7-2-14. 4 温室効果ガスの排出量予測結果

項 目		温室効果 ガス	排出量 ^{注)}	地球温暖化 係数	CO ₂ 排出量 (t-CO ₂ /年)
排出	廃棄物焼却	CH ₄	0. 115	28	3
		N ₂ O	1. 683	265	446
	合成繊維焼却	CO ₂	1, 740	1	1, 740
	プラスチック類焼却	CO ₂	20, 362	1	20, 362
	都市ガス使用	CO ₂	207	1	207
	軽油使用	CO ₂	36	1	36
	電力使用（買電）	CO ₂	101	1	101
	計	—	—	—	22, 895
削減	売電	CO ₂	-7, 401	1	-7, 401
合 計		—	—	—	15, 494

注) 単位は、温室効果ガスの種類に対応して t-CH₄/年、t-N₂O/年及び t-CO₂/年となる。

表 7-2-14. 5 現施設の温室効果ガスの排出量（令和3年度）

項 目		CO ₂ 排出量 (t-CO ₂ /年)
排出	廃棄物焼却	914
	廃プラスチック焼却	32, 948
	灯油使用	1
	都市ガス使用	382
	石炭コークス使用	6, 344
	電力使用（買電）	632
	計	41, 221
削減	売電	-351
合 計		40, 870

出典)「習志野市地球温暖化対策実行計画 ―職員による第4次行動―」
(令和5年10月 習志野市)

② 環境保全措置

本事業では、施設の稼働により発生する温室効果ガスの排出量を抑制するために、次のような措置を講じる計画である。

【計画段階で配慮し、予測に反映されている環境保全措置】

- ・ごみの焼却により発生する廃熱をボイラで回収し、発生した蒸気を用いてタービン発電機により発電して、場内電力に使用し、購入電力消費による温室効果ガスの発生を抑制する。
- ・余剰電力は売電し、電力会社等の化石燃料による発電量の削減に貢献する。

【予測に反映されていないが環境影響の更なる回避・低減のための環境保全措置】

- ・廃熱は発電のほか場内の給湯等にも利用し、燃料使用による温室効果ガスの発生を抑制する。
- ・本施設の設備機器、EV棟及び工場棟の照明や空調設備は省エネルギー型の採用に努める。

③ 評 価

ア．評価の手法

（ア）環境保全措置の実施方法

環境保全措置の検討は、温室効果ガスの排出量の抑制を主体に行うこととし、温室効果ガスの排出量の抑制の手法について、事業者としての見解をとりまとめることにより行った。

（イ）環境保全措置の効果

環境保全措置の実施による温室効果ガスの排出抑制効果を検討した。

温室効果ガスの排出抑制効果については、環境保全措置に係る排出抑制対策、更なる排出抑制の余地の有無などを含めて総合的に検討した。

イ．評価の結果

(ア) 環境保全措置の実施方法

環境保全措置の実施方法等について検討した結果、「② 環境保全措置」に示す措置を講じることから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているものと評価する。

(イ) 環境保全措置の効果

施設の稼動に伴う温室効果ガスの排出量、削減量及び削減量を考慮した排出量は、表 7-2-14.6に示すとおりである。

廃熱による発電等の環境保全措置により、削減量を考慮した排出量は15,494t-CO₂/年と予測され、排出量22,895 t-CO₂/年に対して抑制効果は32.3%となる。

さらに、施設の設備機器、照明や空調設備は省エネルギー型の採用に努める等の環境保全措置を講じる計画であり、温室効果ガス排出量の低減を図ることとしている。

以上のことから、事業者により実行可能な範囲で対象事業に係る環境影響ができる限り回避又は低減されているものと評価する。

表 7-2-14.6 施設の稼動による温室効果ガスの排出量及び削減量等

項目	温室効果ガス量 (t-CO ₂ /年)
施設の稼動による排出量①	22,895
売電による削減量②	7,401
削減量を考慮した排出量	15,494
排出抑制効果 (%) ②/①×100	32.3